

環境省

「持続可能な開発目標（SDGs）を活用した地域の環境課題と社会課題を
同時解決するための民間活動支援事業」

ローカル SDG s ギャザリング 2020 ファクトブック

平成 30 年度採択 8 取組

基礎資料集（発表資料、2 カ年事業計画）

令和 2 年 2 月 23 日 ローカル SDG s ギャザリング 2020

発行：地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）

**環境省「持続可能な開発目標（SDGs）を活用した地域の環境課題と社会課題を
同時解決するための民間活動支援事業」成果共有会
採択事業一覧**

No.	採択団体	地域	採択事業	頁
1	道東 SDGs 推進協議会 (中標津素材感覚)	北海道	道東 SDGs 広域パートナーシップまちづくりプロジェクト	6
2	鶴岡市三瀬地区自治会	東北	鶴岡市三瀬地域木質バイオマスエネルギーの自給自足活動	20
3	(一社)おらってにいがた市民エネルギー協議会	関東	環境・農業・観光が調和した岩室温泉街の持続可能なまちづくり	34
4	里山ウェルネス研究会	中部	里山保全体験を通じた障がい者雇用促進を目指すプログラム事業	48
5	竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会	近畿	竹生島・びわ湖北部の魅力発見プロジェクト	62
6	(公財)水島地域環境再生財団	中国	みずしま滞在型環境学習で新たな“まちなにぎわい”を創ろう	76
7	(特非)郷の元気	四国	協働による「かみかつ茅葺き学校」の展開	90
8	(特非)循環生活研究所	九州	ローカルフードサイクリング美和台	104

注)・「No.」は地域順に付しました。

- ・「採択団体」公募の申請者名を記載しており、実際には協働で実施する他の主体も含まれることとなります。
- ・「地域」は、事業の実施される地域を記載しました。
- ・「採択事業」の名称は、公表時のものを記載しており、今後専門家によるアドバイス等により事業の内容を含め変更となることがあります。
- ・事業は各地方環境事務所で実施します。
- ・(特非) = 特定非営利活動法人 (公財) = 公益財団法人 (一社) = 一般社団法人

本書について

この『ファクトブック 2020』は環境省「持続可能な開発目標（SDGs）を活用した地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業」の成果共有会の資料として、採択された8事業の**発表資料、事業計画（2年分）**を掲載しています。

- 発表資料 …事業毎に8枚のシートで構成された資料
- 事業計画（2年分）…2018年と2019年の事業計画書

採択事業（8取組）

（1）北海道地方

事業名：道東 SDGs 広域パートナーシップまちづくりプロジェクト

団体名：道東 SDGs 推進協議会（中標津素材感覚）



北海道東部は、広大な景観、国内有数規模の酪農や水産業、食の魅力等で全国に知られていますが、少子高齢化による後継者・担い手の不足、気候変動による一次産業への影響、インバウンド拡大も意識した環境対策等、さまざまな課題を抱えています。道東 SDGs 推進協議会では、それらの統合的な

解決や担い手づくりに向けて、圏域の多様な人材によるワークショップや根釧圏での広域プラットフォーム構築を進めます。これらをとおして、道東が誇る自然資本のワイズユースと強い地域経済を両立する「地域循環共生圏」の確立を目指します。

（2）東北地方

事業名：鶴岡市三瀬地域 木質バイオマスエネルギーで自給自足活動

団体名：鶴岡市三瀬地区自治会



盛んだった林業の移り変わりや燃料利用の変化、また、地域を取り巻く雇用の変化、地域経済循環の変化影響などによる課題が見えている。鶴岡市三瀬地区自治会では・地区の中心に位置するコミュニティセンターに木質バイオマスを導入するプロジェクト・地区の特色ある教育、保育、子育てに資源を利用するプロジェクト・子どもから高齢者まで参加できる森でのイベントや体験をする福祉プロジ

ェクト・森林伐採、保全を通し、効果的な燃料供給を検討するプロジェクト・SDGs の理解も含めた一般啓蒙プロジェクト等を行い課題の同時解決を目指します。

(3) 関東地方

事業名：環境・農業・観光が調和した岩室温泉街の持続可能なまちづくり

団体名：(一社) おらって新潟市民エネルギー協議会



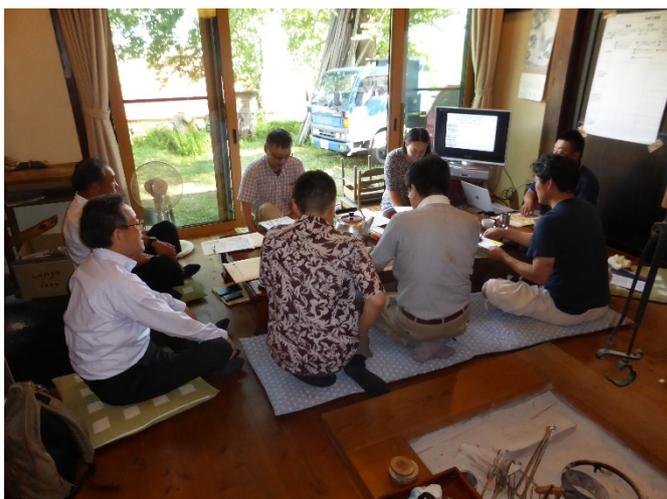
新潟市西蒲区は、山から海までの豊かな自然に恵まれた農村地帯です。この地域に惹かれて、自然と調和したライフスタイルを志し、関わりを持つ人が増える一方で、人口減など、社会の変化による影響は免れません。エネルギー・食などの地域資源の価値を地域の人が再発見し、自ら行動を起こすことが持続可能な社会の構築には欠かせません。本事業では岩室温泉地域を対象に、基幹となる「環境」「農業」

「観光」に、音楽やアートなど「文化」の視点を加えて展開することで新たな価値を創出し、協働による低炭素型社会の実現に寄与します。

(4) 中部地方

事業名：里山保全体験を通じた障がい者雇用促進を目指すプログラム事業

団体名：里山ウェルネス研究会



里山ウェルネス研究会は、「①森林保全のために間伐された木材利用が進まない」「②障がい者雇用支援の不足」「③冬期の林家及び林業従事者等の収入減少」の3つの地域課題の同時解決を目指しています。自然豊かな長野県飯山市で、地元の間伐材を活用した丸太ローソク「ログファイヤー」等の生産において、障がい者と林家・林業従事者の取組（作業）を組み合わせる仕組みづくりに取り組みます。

地域の様々な主体と協働して、林福連携による新たな展開を図り、里山保全、さらには持続可能な地域づくりへとつなげていきます。

(5) 近畿地方

事業名：竹生島・びわ湖北部の魅力発見プロジェクト

団体名：竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会



びわ湖北部にある竹生島（滋賀県長浜市）は古くから人々の信仰を集めてきました。日本三大弁財天の他、貴重な文化財が多数残され、多くの観光客が訪れています。近年、カワウが大繁殖し、森林が枯れる環境課題が発生しています。本事業では、竹生島びわ湖北部に存在する地域資源を教材化し、新たなファンを獲得するエクスカーシ

ョンの開発、美しい竹生島を未来に引き継ぐための持続的な体制づくりに取り組みます。多様な主体による交流の場（プラットフォーム）を創出して、ビジョン・目標を共有し、協働を推進します。

(6) 中国地方

事業名：みずしま滞在型環境学習で新たな“まちなぎわい”を創ろう

団体名：（公財）水島地域環境再生財団



大気汚染公害を克服してきた経験を踏まえ、環境学習のまちづくりを推進している岡山県倉敷市水島地域では、国内外からの教育旅行受け入れ機会の拡充を図るとともに、活力低下や若者の地元離れが懸念される地域の活性化に資するため、既存宿泊施設や空き店舗等を新たな学びの場として利活用し、地域を丸ごと教材化した滞在型環境学習プログラムの開発と推進体制づく

りに取り組みます。その中で地域内外の若者同士の交流や地域づくりへの関わりを通じ、水島への愛着・関心を育み、地元定着や起業などの新たな取組につながる礎を築きます。

(7) 四国地方

事業名：協働による「かみかつ茅葺き学校」の展開

団体名：(特非) 郷の元気



徳島県上勝町「八重地地区（重要里地里山選定地）」では、地域の担い手不足や里地里山離れが進み、集落の維持や伝統文化継承が困難になりつつあります。集落が抱えている課題解決に向けて、地域素材、地域の伝統的技術で再生したかや葺き民家（花野邸）を拠点に、地域住民・NPO・専門家・研究機関・行政の協働による、「かみ

かつかや葺き学校」の展開に取り組みます。かや葺き民家（花野邸）の建築的価値、かや葺き民家の暮らしの価値を掘り起こし、「かや葺き学校」を介した、里山資源活用と地域の担い手づくりを目指します。

(8) 九州地方

事業名：ローカルフードサイクリング美和台

団体名：特定非営利活動法人 循環生活研究所



高齢化率 25%を超える福岡市東区美和台地区で、高齢者を含む世帯を対象に「見守りコンポスト」を設置。定期的にスタッフが巡回してコンポストの手入れをし、できた堆肥を回収。住宅の庭の一部を菜園化して堆肥を活用した無農薬の野菜作りを行い、10%を家主へ提供、90%を地域へ還元・販売する。同時に、地域で開催されている高齢者向けのサロン等で野菜を販売

し、「たのしい循環生活」を実践する（自給自足、食、健康など）講座を開催する。すでに活動している「美和台お互いさまコミュニティ会議（自治協、社協、地元企業、学校法人等）」と連携して実施する。

①何と何の同時解決を目指したか 採択団体名：道東SDGs推進協議会（中標津素材感覚）
採択事業名：道東SDGs広域パートナーシップまちづくりプロジェクト

道東 SDGs パートナーシップまちづくりプロジェクトをきっかけにスタート！

「河畔林再生 未来の森プロジェクト（仮）」
浜中町の小さな水源からはじまる人と自然と産業の共存

経済
浜中町の酪農のブランディング、地域経済振興

社会
地域資源を理解する人材育成、学習機会の提供

環境
酪農地内の水源及び水源林を保全する

経済課題

- 安定した漁業資源確保
- 第一次産業の若い世代の労働人口確保
- テクノロジー導入の障壁

環境課題

- 環境に配慮したまちづくり政策
- 環境負担の少ない地域資源活用
- 河川の汚染
- 森林伐採
- 経済界との連携が難しい
- 自然教育が不足

社会課題

- 若者の地域離れ
- 基盤産業の担い手の確保
- 地域のつながりの欠如
- 人口流出、過疎化

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

②同時解決のステークホルダーは誰か

道東 SDGs 推進協議会

浜中町「河畔林再生 未来の森プロジェクト（仮）」チーム

酪農家 事業者 市町議員

自治体 教育委員会

浜中町

霧多布高校

霧多布 ナショナルトラスト

シマフクロウ エイド

松岡 牧場

グレイト ノース

樹木医等

浜中町農協

コアメンバー

❗：未参画

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

③2年間に行ったアクション

道東同時解決WS 6箇所開催

- 第1回 別海町
- 第2回 浜中町
- 第3回 中標津町
- 第4回 標津町・羅白町
- 第5回 根室市
- 第6回 釧路市

【高校生以上向け教育冊子作成、情報共有】

【同時解決プロジェクトの種を含む広域ビジョンの作成・提案】

【各地域の活動の後押し、協議会全体での共有】

別海町：北海道中小企業家同友会別海地区会での学習会
 中標津町：中標津農業高校でのSDGs公園
 浜中町：河畔林再生 未来の森プロジェクト(仮)
 根室市：シナプスねむろ(自然教育団体)

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

④2年間を通じたアウトプットや学び

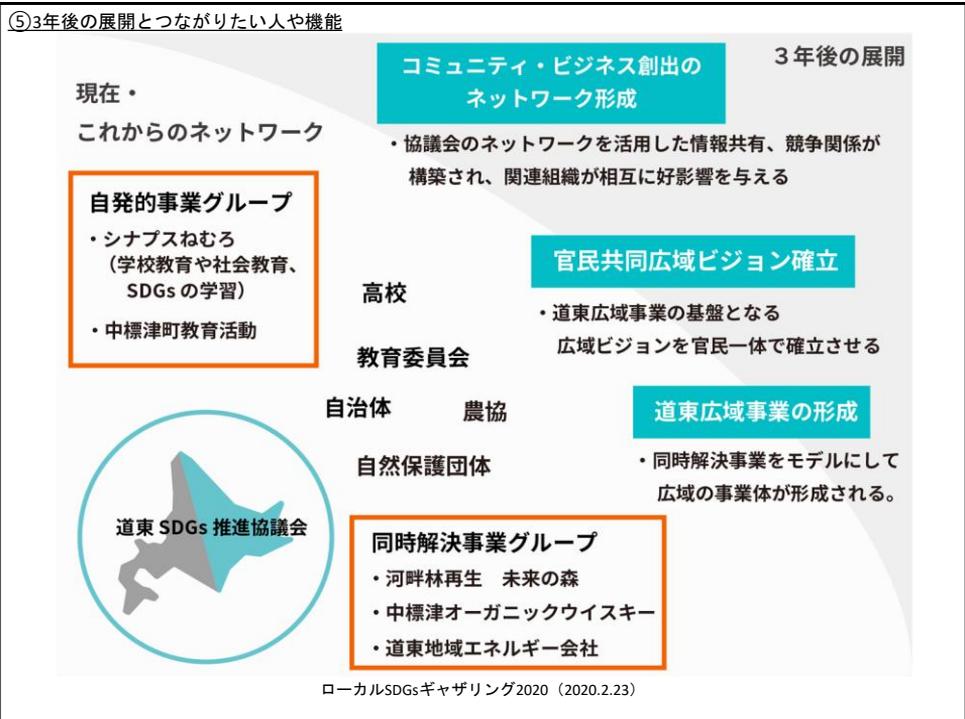
OUTPUT

- ・ 高校生以上向け教育冊子作成
- ・ 広域ビジョンの策定
- ・ 未来の森プロジェクトをはじめとした、各地域での自発的、内発的な取り組み

LEARNING

- ・ 共通のビジョンをベースにした対話・実践が「ゆるい」協働関係をつくる
- ・ 基幹産業の経済 / 環境課題を複数の関連団体がジブンゴトとして共有し、関連団体の事業が活かすることで基幹産業が守られる座組が効果的（検証中）
- ・ 地理的な距離が直接情報の共有の障壁になるため、地域を隔てて道東の持続性を目指す組織たちが協力 / 切磋琢磨できるよう、中間組織がオンライン / オフラインの関係性を創出、維持することが大切

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)



⑥同時解決のプロセスの特徴 (EPO記入欄)

前の

多様な分野・広域での交流

→ 「同時解決」のアイデアを加速化

- 同時解決プロジェクトを取り組んだメインの地域、根室管内・釧路管内の人口は_____人で人口密度は_____人/km²。それに対して牛の頭数は_____頭。
- 「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ」といわれても、人口密度の低い地方部では、多様な人たちが“たまたま”出会う機会のごくわずか。まずは業種や物理的な距離を超えて、人々が出会う場をつくり、刺激しあうきっかけをつくることが不可欠。

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

SDGs は“接着剤”であり“窓”

- 人々の交流を生み出す“接着剤”としてSDGsを活用。同時解決事業として、根室管内5市町でワークショップを開催したところ、事業者やNPOスタッフ、行政職員等を含めて、延べ200人以上の参加があった。広域ビジョン検討会には首長の参加もあり、民間によるSDGs関連の取り組みに対する、行政の期待の大きさがうかがわれた。
- SDGsはいまの世界を知る“窓”であると同時に、地域の未来をのぞきみる“窓”にも。バックカスティングの考え方で、ワークショップで集められた未来の素材をもとに、「環境」「経済」「社会」の3側面から広域ビジョンを整理、複数の側面が重なるところに同時解決のアイデアを埋め込む。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

「同時解決“事業”」

- 「広域」で、できる限り足並みをそろえて取り組んでいこうというプロジェクトであるため、第一段階である「SDGsの周知・理解促進」に力点が置かれがち。そこで終わらず、持続可能な社会づくりに向けた同時解決事業につながるよう意識付け。
- 一方で、採択のポイントとなった「広域」の意味合い、強みについて、繰り返し問いかける。共有により「競う」意識と「連携」が生まれ、個々と全体の取り組みが加速化。
- 意見交換の結果が適切に積み上げられるように、記録・ふりかえりをサポート。他事業も活用し、道東地域へ交流機会を提供。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
＜2カ年事業計画＞

道東SDGs広域パートナーシップ まちづくりプロジェクト

道東SDGs推進協議会

2018.08.

①-1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

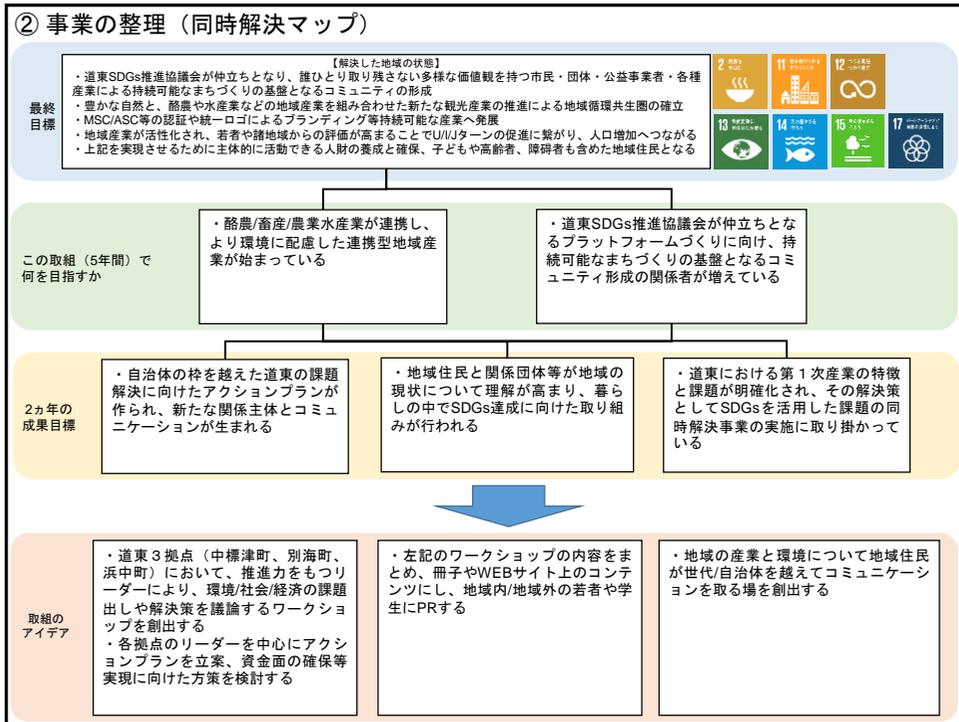
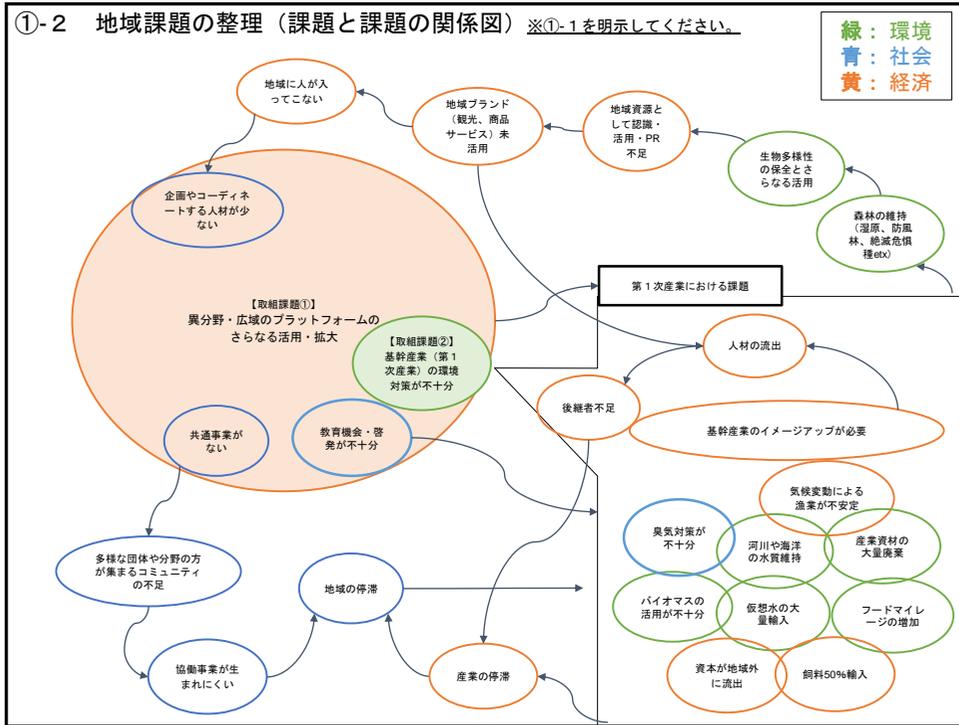
- 対象地域は北海道の東（道東）に位置する根室市・別海町・中標津町・羅臼町・標津町・浜中町とする。
（1市5町合計の人口:約81,500人、第1次産業就業者数:約11,600人 面積:3,965km²≒長崎県
（4,105km²）内 訳は※を参照）基幹産業は第1次産業。
- 日本一の規模（生乳生産量は全国の約1割）を誇る道東の酪農・畜産業において、中標津町を中心に酪農の価値を創造する「中標津素材感覚」があり、経営規模が違う等多様な酪農家が協働で事業を行ってきた。
- 2018年5月、道東のまちづくりに関わる様々な課題を解決するためのプラットフォームを目指し「道東SDGs推進協議会」が設立された。上記の流れから現在は酪農家のメンバーが多く、酪農・畜産業における現状や課題が把握され、協働体制があることから、本事業では2年間で酪農業に関わる課題（担い手不足、環境への対策等）の解決を始めに取り組む。担い手不足は、少子高齢化だけが問題ではなく産業へのイメージアップが必要である。
- また、道東において様々な協働が実施されており、例えば、中標津町では景観学習を切り口に市街地の住民や第1次産業（酪農）等による協働事業がある。他の分野や地域においても利害関係が同じテーブルにつき課題解決のための協働をサポートするプラットフォームが必要である。

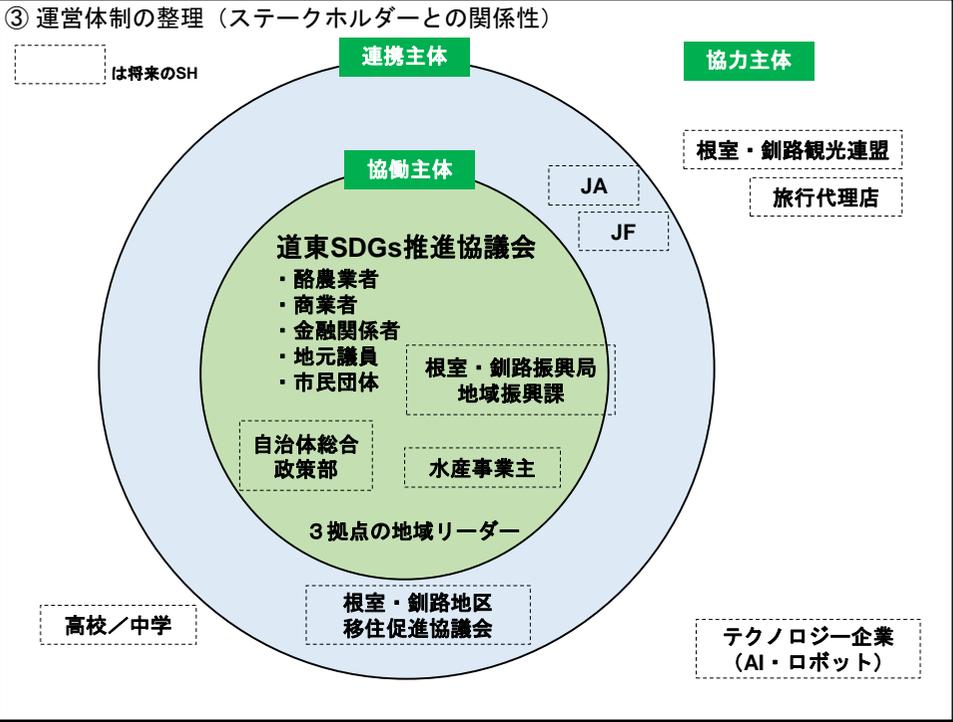
市町名	人口 (人)	第1次産業就 業者数(人)	面積 (km ²)
根室市	約26,500	約2,700	512
別海町	約15,400	約3,300	1,320
中標津町	約23,700	約1,500	685
羅臼町	約5,200	約1,200	397
標津町	約5,300	約900	624
浜中町	約5,900	約2,000	427

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- 異分野・広域のプラットフォームのさらなる活用・拡大
- 基幹産業（第1次産業）の環境対策が不十分

※内訳（出典：北海道根室総合振興局根室統計書、浜中町ウェブサイト）





④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 基幹産業（第一次産業）の環境対策が不十分	・道東地域3拠点（中標津町、別海町、浜中町）の環境課題/経済課題/社会課題の同時解決をする事業やイノベーションアイデアを募るワークショップの開催。また、その中で道東地域の自然資本や地域産業資源を活かしたサステナブルツーリズムを検討。
【取組課題②】 異分野・広域のプラットフォームが不十分であり、全体のビジョンがない	・道東地域3拠点（中標津町、別海町、浜中町）の環境課題/経済課題/社会課題の同時解決をする事業やイノベーションアイデアを募るワークショップの開催。また、その中で道東地域の自然資本や地域産業資源を活かしたサステナブルツーリズムを検討。（①と同じ） ・多様な産業が相互に関連した広域連携エリアのアクションプランの策定 ・道東SDGs推進協議会のWEBサイト上でワークショップの内容や制作物（動画等）をまとめた資料一般公開

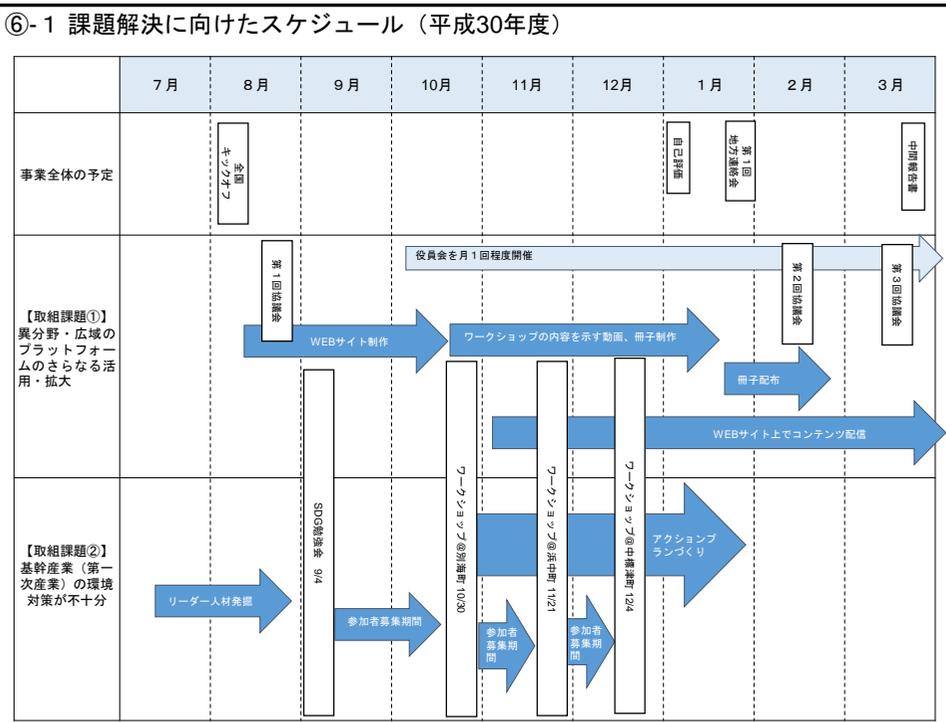
⑤ 本事業計画の見通し

■事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 基幹産業（第一次産業）の環境対策が不十分	<ul style="list-style-type: none"> 道東地域3拠点（根室市、羅臼町、標津町）の環境課題/経済課題/社会課題の同時解決をする事業やイノベーションアイデアを募るワークショップの開催。また、その中で道東地域の自然資本や地域産業資源を活かしたサステナブルツーリズムを検討。 前年度に上記ワークショップで提案された事業内容の経過報告
【取組課題②】 異分野・広域のプラットフォームが不十分であり、全体のビジョンがない	<ul style="list-style-type: none"> 道東地域3拠点（根室市、羅臼町、標津町）の環境課題/経済課題/社会課題の同時解決をする事業やイノベーションアイデアを募るワークショップの開催。また、その中で道東地域の自然資本や地域産業資源を活かしたサステナブルツーリズムを検討。（①と同じ） 前年度に上記ワークショップで提案された事業内容の経過報告（①と同じ） 前年度から作成を始めた広域連携エリアのアクションプランを主な関係団体に配布

■5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<ul style="list-style-type: none"> 道東SDGs推進協議会が仲立ちとなるプラットフォームづくりに向け、持続可能なまちづくりの基盤となるコミュニティ形成の関係者が増えている 酪農/畜産/農業水産業が連携し、より環境に配慮した連携型地域産業が始まっている



環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

道東SDGs広域パートナーシップ まちづくりプロジェクト

道東SDGs推進協議会

2019.5

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 道東SDGs推進協議会の事業によって形成された、持続可能な社会づくりに向けた各地域のコミュニティが、道東地域に根差した共通のビジョンのもとで継続的に活動し、広域のコミュニティを形成している
- 推進協議会を初めとした各主体の活動により、地域一帯でSDGsが広く認知され、SDGsの考え方に基づいた環境・社会・経済の同時解決、統合的向上を目指した取り組みが、地域のコミュニティにおいて、多様な主体の協働により新たに考案され、展開されている

2019年度末
地域の状態

- 2018年度のワークショップ実施地域（別海町・浜中町・中標津町）において、地域特有の環境課題と社会課題に関する同時解決アイデアの事業化が、少なくともひとつ以上、進められている
- 2019年度のワークショップ実施地域（根室市・標津町）において、SDGsの共通理解に基づいたコミュニティが形成され、2018年度実施地域とともに、道東地域の持続可能な社会づくりに向けたビジョンの基盤を共有している
- 上記の実現のため、推進協議会の働きや役割が整理され、SDGsの考え方に基づいた活動の促進や意識啓発の継続を可能とする、多様な主体との協働体制が敷かれている



2018年度末
地域の状態

- 道東SDGs推進協議会を設立し、取り組みを進める体制を整えた。道東地域の関係者に個別訪問して説明を重ね、3町（別海町・浜中町・中標津町）においてワークショップを開催。これまで一堂に会したことがなかった、異なる職種や立場の地域住民の対話が実現した。これにより同時解決に向けた今後の取り組みアイデアが創出されたとともに、SDGsに関する共通理解に基づく、プラットフォームの形成が進んだ
- 推進協議会や構成主体の活動を冊子にとりまとめ、関係者に広く配付することで、道東地域において活動やSDGsが広く周知された



② 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）

【道東SDGs推進協議会の構成主体】

酪農業等を中心に、クリーニング業・ICT関連・地方スーパー・地方銀行等の民間事業者や、環境NPO等の市民団体、議会議員等、多様な職種・立場の会員で構成されている任意団体（5/8時点で会員25名）。道東地域では中標津町・根室市・別海町・浜中町の会員が多い。各地域では会員以外に、地域のステークホルダーがワークショップや事業に参画している。

【各地域のステークホルダー】

地域 ※WS開催順	地域で活動する協議会会員 ＜採択団体＞	会員以外の主な協働・連携・参加主体 ＜右列は公的機関、下線を引いたものは潜在的な主体＞
別海町	(有) 中山農場、別海町市議会議員	酪農家、ちえのわ事業共同組合、社会福祉法人べつかい柏の実会等 別海町総務部総合政策課
浜中町	NPO法人シマフクロウ・エイド、(株)グレートフルファーム	NPO法人霧多布温原ナショナルトラスト、大地みらい信用金庫等 浜中町企画財政課、北海道霧多布高等学校
中標津町	(株)東武、(株)養老牛 山本牧場、(株)富岡クリーニング店	(有) 希望農場、中標津青年会議所等 中標津町企画課、北海道中標津高等学校、北海道中標津農業高等学校
根室市	根室・落石地区と幻の島コルリを考える会、(株)Winma Planning、(合)モーク	(株)マルコシ・シーガル、(有)かねむら村上商店、根室市青年会議所、根室市移住交流促進協議会等 根室市総合政策部、北海道根室高校
標津町	-	標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会、第一次産業従事者等 標津町企画政策課、標津サーモン科学館
羅臼町 ※標津町開催	-	- 羅臼町企画振興課、羅臼町教育委員会

※ 関連事業：SDGsをテーマとして高校生がプレゼンテーションを競い合う「(仮称) SDGs甲子園」(SDGs甲子園実行委員会の主催等で調整中)の予選会・全国大会が道東で開催される予定である。推進協議会はこの事業へ協力し、根室市・標津町のほか、釧路市でもSDGsワークショップを開催する。上記2か所で開催するワークショップでは、広域ビジョンの検討を見越して「持続可能な第一次産業の実現に向けた、環境課題と社会課題の同時解決」を目指した対話を行うが、釧路市では、釧路市都市経営課・釧路市青年会議所・北海道観光調査会や若者・女性支援の活動団体等と「持続可能なまちづくりに向けたSDGsの活用」をテーマとする予定である。

③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 プラットフォーム機能を有する広域コミュニティの形成（協働支援機能の強化）	異なる職種や立場を越えた各地域や広域のコミュニティが十分に形成されておらず、共通のビジョンが構築されていない。そのためまず推進協議会では、各地域で対話の機会（ワークショップ）を設け、SDGsを「接着剤」として地域コミュニティ形成のきっかけをつくる。 昨年度に引き続きワークショップを開催するほか、推進協議会が中間支援的な機能を持ち、持続可能な社会づくりに関して共通認識を持った「各地域での取り組み情報の収集・発信」やそれを踏まえた「広域ビジョンの検討」、また関係主体の協働による「同時解決の取り組みアイデアの事業化支援」等を支援することで、各地域のコミュニティの連携（広域化）と、同時解決を具体的に事業や政策として展開していくためのプラットフォーム化を進める。
【取組課題②】 持続可能な第一次産業の実現に向けた環境課題の解決 ※地域によって異なる	2019年度に根室市・標津町（羅臼町）で開催するワークショップでは、2018年度に開催したワークショップの成果を踏まえてさらにもう一段階、経済・社会・環境の側面の統合的向上、課題の同時解決を進めるべく、「持続可能な第一次産業の実現に向けた課題の整理と解決策の検討」に取り組む。地域固有の特性によって、課題の組み合わせは異なるが、以下のような課題が考えられる。2019年度中に、何らかの同時解決アイデアを考案し、2022年度までの活動の見込みを、推進協議会のサポートのもと作成する。 【取組課題②】 持続可能な第一次産業を実現する上での「環境課題」 <ul style="list-style-type: none"> ・第一次産業を支える自然資本（森林・湖沼・河川・海洋等の生物多様性）の保護保全 ・収穫量や品質に影響を与える気候変動の緩和策と適応策、産業廃棄物の削減 ・第一次産業に関わる臭気の問題（酪農業・漁業） ・バイオマス資源の未活用（特に酪農業）
【取組課題③】 持続可能な第一次産業の実現に向けた社会課題の解決 ※地域によって異なる	【取組課題③】 持続可能な第一次産業を実現する上での「社会課題」 <ul style="list-style-type: none"> ・担い手不足（地域からの若者の流出） ・収入の不安定さや世帯の持ちにくさ（特に漁業） ・技能実習生等、海外からの人材との共生

④ 課題解決に向けたスケジュール（2019年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定		第3回協議会							第4回協議会		全国報告会	
【取組課題①】 プラットフォーム機能を有する広域コミュニティの形成（協働支援機能の強化）		第3回協議会（総会）		ワークショップ（協議・構築）	第4回協議会	第1回ワークショップ会議	役員会（月1程度）		第5回協議会	第2回ワークショップ会議		第6回協議会
【取組課題②③】 持続可能な第一次産業の実現に向けた環境課題と社会課題の同時解決							中間支援の実施と支援体制の確立					関係機関との連携
【関連事業】				ワークショップ（協議）			SDGs 甲子園 道東ワークショップ					
												活動紹介冊子の作成・配布

⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
地域課題の再検討と道東SDGs推進協議会の関わり方の再整理	<p>同時解決を目指す地域の環境課題と社会課題については、地域別に再検討することとし、ワークショップを実施した5地域（2018年度3地域、2019年度2地域）の進捗状況を確認しながら、そのうち1事業以上の整理、実践を促進することとした。また、2019年度のワークショップは「持続可能な第一産業の実現に向けた課題の整理と解決策の検討」をテーマとして掲げることとした。</p> <p>これは当初の計画では、道東SDGs推進協議会の主要なメンバーが従事する酪農業に関する環境課題の解決アイデアが出てくると見込んでいたが、2018年度のワークショップはコミュニティ形成を中心とせねらとし、その結果、テーマが拡散したためである。2019年度は上記のテーマとし、環境課題と社会課題が一致するように整理することによって、あらためて本事業の同時解決性を明確に打ち出すこととした。</p> <p>なお、協議等を進める中で「環境課題と社会課題の同時解決」に実際に取り組むのは各地域のワークショップの中心人物（主に会員）やその他のステークホルダー（ワークショップ参加者等）であるという点が合意され、推進協議会は中間支援の役割を有するという整理を行った。</p>
2年目の取り組み地域と広域ビジョン検討に向けた取り組み	<p>当初の計画では、ワークショップを2年目に新たに3か所で実施する予定であったが、事業創出を図るとともに政策協働を進める必要があると考え、行政機関を巻き込むために新たに広域ビジョンを検討する場を2回設け、ワークショップは3回を2回とすることとした。</p> <p>広域ビジョン検討の会議は、ワークショップが開催された地域から、第1回目は行政機関の総合戦略等の担当者等を中心に招集し、推進協議会会員やワークショップ参加者等とともに、意見交換を行うことなどが考えられる。また第2回目には、推進協議会の2年間の活動を総括し、加えて第1回目の会議で検討された広域ビジョン案を推敲し、同地域の首長の賛意のもと、発信することなどが考えられる。</p>
年間スケジュール	<p>「②運営体制の整理」で言及したように、2019年度は「（仮称）SDGs甲子園」事業の道東開催に係る協力を、推進協議会として取り組むこととした。このため同時解決事業の年間スケジュールにおいても、こうした関連事業の進捗を見定めながら、よりよい成果を上げることができるよう適宜調整しながら事業を進めることとする。</p>

⑥ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・2019年度、ワークショップを「持続可能な第一次産業の実現」をテーマとして開催する際、漁業関係者の参画をどこまで得ることができるかは重要なポイントであるが、時期や地域によっては、漁業者の参加が難しいと推測される。そうした場合においても、できる限り漁業と関わりのある民間事業者（例えば水産加工業や飲食店、小売店等）や、直接的に関係は薄くても課題解決を図る上で参考になる地域の優良事例の共有等を進めるものとした
- ・2018年度のワークショップでは、もともと活動が計画されていたNPO法人シマフクロウ・エイド（浜中町）関係者を除き、地域のコアメンバー（SDGsの観点から地域の課題に取り組むチーム）による事前打ち合わせはなかったが、上記のとおり、テーマをある程度、絞り込む上では、ワークショップをどのように活用し、どのような成果を見込むのか、地域ごとの戦略が必要と考えられる

■その他、留意事項などがあればお書きください

- ・上記2項目で触れた、ワークショップを通じて地域にSDGsを導入しようとするプロセスを整理、発信することは、道東地域の今後のみならず、SDGsを実装しようとする他の地域にとっても有効な先進的な事例の紹介となりうる。伴走支援を行う地方支援事務局（EPO北海道）とそうしたプロセスの分析に取り組み、取り組みの報告冊子においても紹介することが、事業協働や政策協働を進め、行政機関の参画を得る上でも有効なのではないかと考える

⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

さらに多方面を巻き込みながら多様な同時解決を！

市内他地域（自治組織）との包括的な連携

地域内の教育機関：保育園・小学校中学校
 地域外の教育機関：高校、都市部の小中学校誘致
 グリーンツーリズム体験

観光・関係人口（地域内外・都市部）：
 海水浴・釣り、山歩き・キャンプ・ログハウス
 神社・お祭り等への参加、興味の創出
 ふるさと納税・クラウドファンディング。

地域内の企業：森林整備、農水林製品ブランド化・販売
 木質バイオマスエネルギーの利用拡大
 地域外の企業：風力エネルギー開発・竹林の利用
 行政・公共施設：木質バイオマスの導入拡大
 NPO等市民団体：エネルギー利用の啓蒙・知識等

課題：にぎわい創出

三瀬地区
ゆるやかな
ネットワーク

課題：再生可能エネルギー

課題：防災・安全

課題：生活環境整備

警察・消防・海上保安等：防災への取組強化
 情報企業：地域内への情報伝達手法の確立
 福祉協議会民生委員：避難行動効率化

地域内スーパーJA等：買い物支援・スーパー運営
 地域外スーパー等企業：買い物支援・出張店舗等
 行政・地域内外交通会社：公共交通の確保
 JR：三瀬駅と駅前の有効活用

鶴岡市内自治組織：除雪や防災に関する連携・労力交換
 都市部自治組織行政など：地域活動における位置を超えた連携
 災害時の助け合い・観光・労力交換・資金

市街地・都市部との資金・人的連携

⑥同時解決のプロセスの特徴（EPO記入欄）

三瀬のために、三瀬の未来のために。



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑦SDGsをどう意識したか、活用したか (EPO記入)

★SDGs勉強会 > メンバー内



★SDGs勉強会 > 一般向け



ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑧伴走支援の内容、留意したこと (EPO記入)

定期ミーティング

東北×関東×九州
合同研修会@三瀬



ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

鶴岡市三瀬地域 木質バイオマスエネルギー 自給自足活動事業

鶴岡市三瀬地区自治会

①- 1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

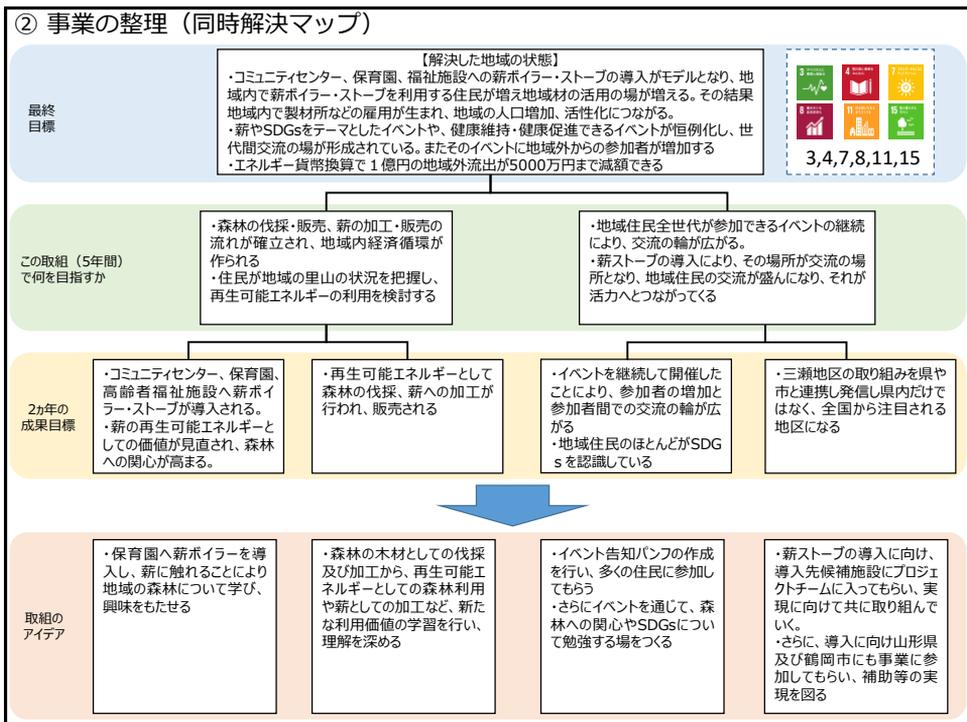
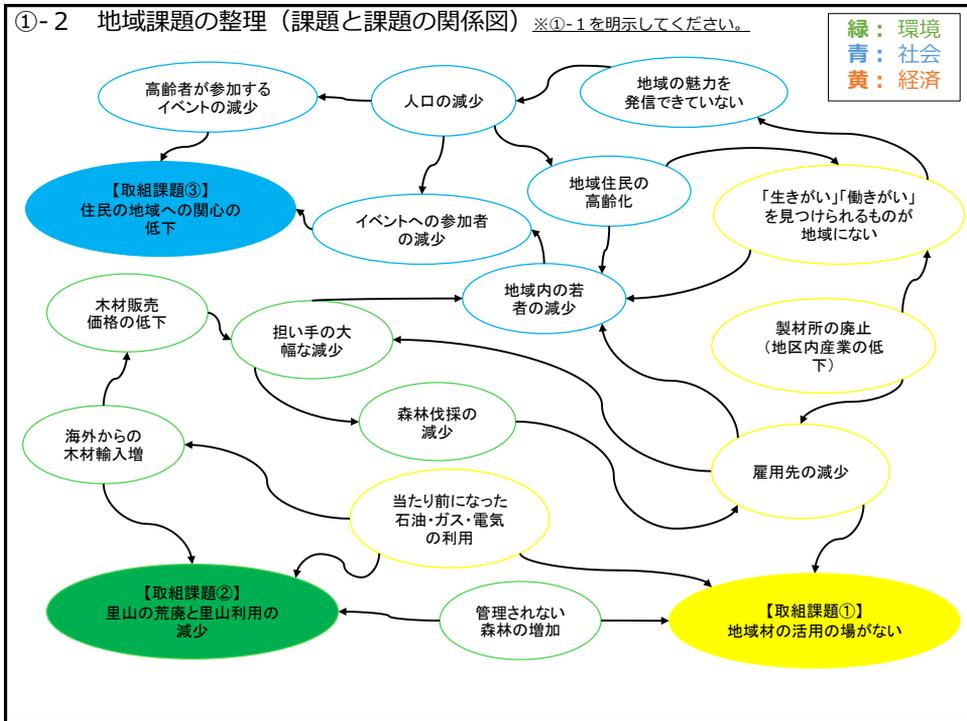
・山形県鶴岡市三瀬地区の現在の人口は約1,400人で、20年前に比べ約30%の人口が減少しており、さらに20年度には現在の人口より50%減少すると推計され、人口減少が加速的に進んでいる。また、人口の減少にともない、地域住民の交流機会や活力も失われつつある。

・昭和30年代までは林業が盛んな地域で、三瀬地区内に8つの製材所があり、雇用の受け皿となっていたが、ほとんどの施設、一般家庭等での石油、ガス、電気等の化石燃料の利用及び海外からの木材輸入増加により国内の木材利用の減少とそれともなう販売価格の下落、また、価格の下落にともなう担い手者の大幅な減少の要因により、森林の管理が行われなくなり、森林が荒廃している。そのような状況であることから、地域内住民の森林への関心が著しく低下している。

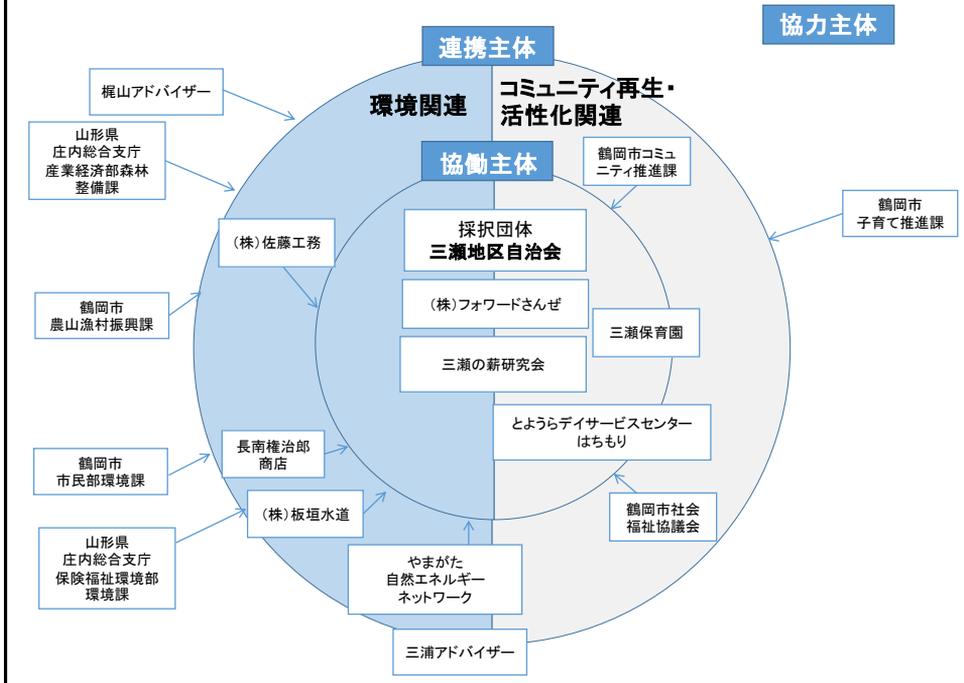
・地域内の森林から木材を伐採し、地域内の製材所で製材し、地域内外に木材として販売を行い、さらには森林管理及び担い手の育成を行い、経済循環を行ってきたが、近年においては上段の状況から林業の衰退により、地域内経済循環が衰退している。

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ①地域材の活用がない
- ②里山の荒廃と里山利用の減少
- ③住民の地域への関心低下



③ 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）



④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・地域材の活用場がない	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園に薪ボイラーを設置し、木材を地域内で利用するための受け皿を作る。 ・森林の木材としての伐採及び加工から、薪・チップなど再生可能エネルギーとして利用するための加工方法などに取り組みとともに、食器、箸など新たな利用価値の学習を行い、理解を深める。 ・三瀬コミュニティセンター及び高齢者施設へ平成31年度中の薪ボイラー・ストーブ導入に向け、鶴岡市及び鶴岡市社会福祉協議会との協議の場の設置し、導入を目指す。
【取組課題②】 ・里山の荒廃と里山利用の減少	<ul style="list-style-type: none"> ・里山の状況を知らない地域住民にイベントの中で、森林の価値、管理の大切さ等について勉強会等を行い、理解を図る。 ・地域の森林資源搬出・再造林の進捗を確認する。
【取組課題③】 ・住民の地域への関心低下	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者も参加できる雪山散策イベントを開催し、森林への興味を持ってもらうとともに、参加者の健康促進またイベントを通じてコミュニティがうまれるきっかけになる ・地域住民にSDGsの理解を深めてもらう内容をイベントに組み込むと同時に、三瀬地区自治会の取り組みがSDGsのたくさんの目標に取り組んでいることを理解してもらう。 ・保育園への薪ボイラー導入により、地域の木材で薪を作る、使う等の実体験を伴う環境教育の場をつくる。

⑤ 本事業計画の見通し

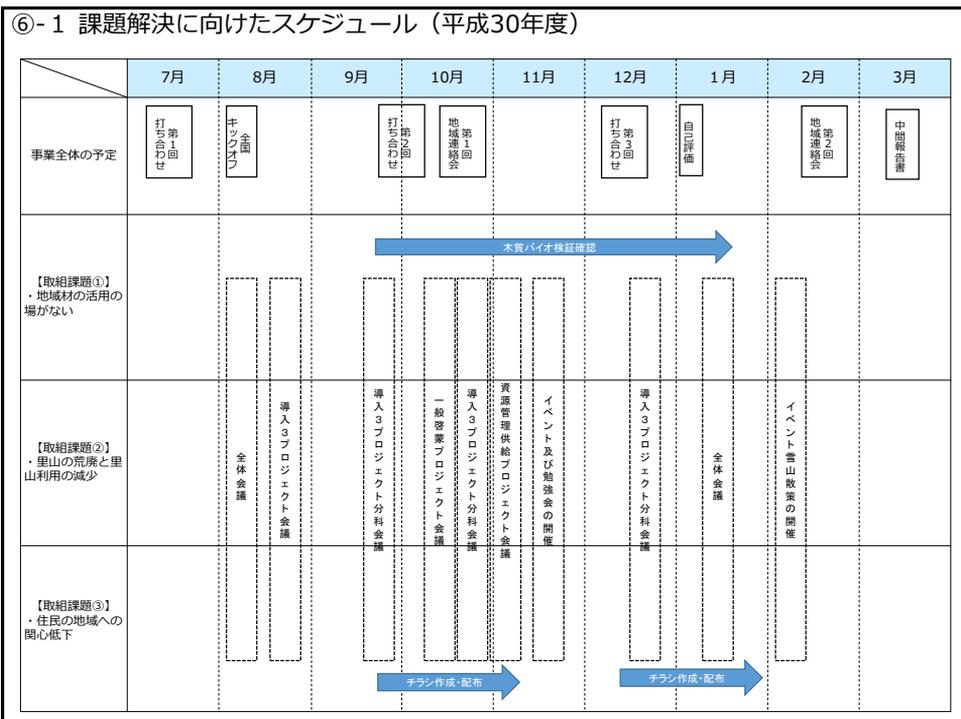
■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・地域材の活用場がない	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティセンター、保育園、高齢者福祉施設へ薪ボイラー・ストーブが導入される ・3施設への薪ボイラー・ストーブの導入から地域資源を地域内で使うモデルを作る ・薪ボイラー・ストーブの導入及び導入計画により、森林の再生エネルギーとしての価値が見直され、地域住民の森林への関心が高まる
【取組課題②】 ・里山の荒廃と里山利用の減少	<ul style="list-style-type: none"> ・里山の間伐などの整備を行いつつ、間伐材が薪へと加工され、販売される ・地域住民の里山の状況への理解が深まる ・森林の整備状況マップを作成し、現状把握とともに今後の森林整備計画を関係者でわかりやすく共有する ・山に関心を持ってもらえるよう、紅葉や山菜取りなど季節的なイベントとの組み合わせで新たに計画を立てる
【取組課題③】 ・住民の地域への関心低下	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園で環境教育を行うことにより、保護者の木質バイオマスエネルギーへの関心が高まる。またそこに地域の多くの人が関わることによって、コミュニティが生まれる ・事業に関わるステークホルダーや薪ボイラー・ストーブ導入施設の関係者がSDGsを認識している ・三瀬地区の取り組みを県や市と連携し発信し県内だけではなく、全国から注目される地区になる

■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか

- ・森林の伐採・販売、薪の加工・販売の流れが確立され、地域内経済循環が作られる
- ・住民が地域の里山の状況を把握し、一般家庭においても再生可能エネルギーの利用を検討する
- ・地域住民全世代が参加できるイベントの継続により、交流の輪が広がる
- ・薪ストーブの導入により、その場所が交流の場所となり、地域住民の交流が盛んになり、それが活力へとつながってくる
- ・保育園での薪をテーマとして地域の多くの関係者を巻き込んだ環境教育プログラムが作成される



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定	打ち合わせ 第1回	地域連携会 第1回				打ち合わせ 第2回	地域連携会 第2回			打ち合わせ 第3回	最終報告会	報告書提出
【取組課題①】			各プロジェクトによる取組み									
【取組課題②】		全体会議	各プロジェクト毎の会議				各プロジェクト毎の会議	イベント及び勉強会の開催		各プロジェクト毎の会議	全体会議	イベント及び勉強会の開催
【取組課題③】						チラシ作成・配布				チラシ作成・配布		

⑦ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・薪ボイラー・ストーブの導入施設として、保育園、三瀬地区コミュニティーセンター及び高齢者施設の3施設を候補として進めていくが、導入への資金が問題になる。
- ・そのために、山形県及び鶴岡市との連携により、補助金等を利用して進めていく必要がある。
- ・さらには、山形県及び鶴岡市の担当職員へのSDGsの理解を高めていく必要も感じられる
- ・薪ボイラーの導入予定施設である三瀬地区コミュニティーセンターの決定権を持つ鶴岡市に、ボイラー導入の予算組の時期もあるため、市へのアプローチの時期が重要である。
- ・森林への関心を高めるためにイベント及びイベントを通じての勉強会を実施していくが、そのための内容が難しい
- ・地域内経済循環を高めるためには、一般の家庭での薪ストーブ（薪暖炉）等の利用も必要であり、どのように理解してもらうかが課題である

■その他、留意事項などがあればお書きください

.

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

鶴岡市三瀬地区 木質バイオマスエネルギー 自給自足活動事業

鶴岡市三瀬地区自治会

2019.4.16

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 自治会の取組が地域住民に理解され、一般家庭で地域材の活用が増える。
- 保育園・小学校・中学校の授業やイベントに地域の取組や里山を学ぶ・触れ合う時間がある。
- 栽培漁業センターの設備の更新に伴い、薪ボイラー等の導入の提案を行い、実現に向けて検討が行われる。

2019年度末
地域の状態

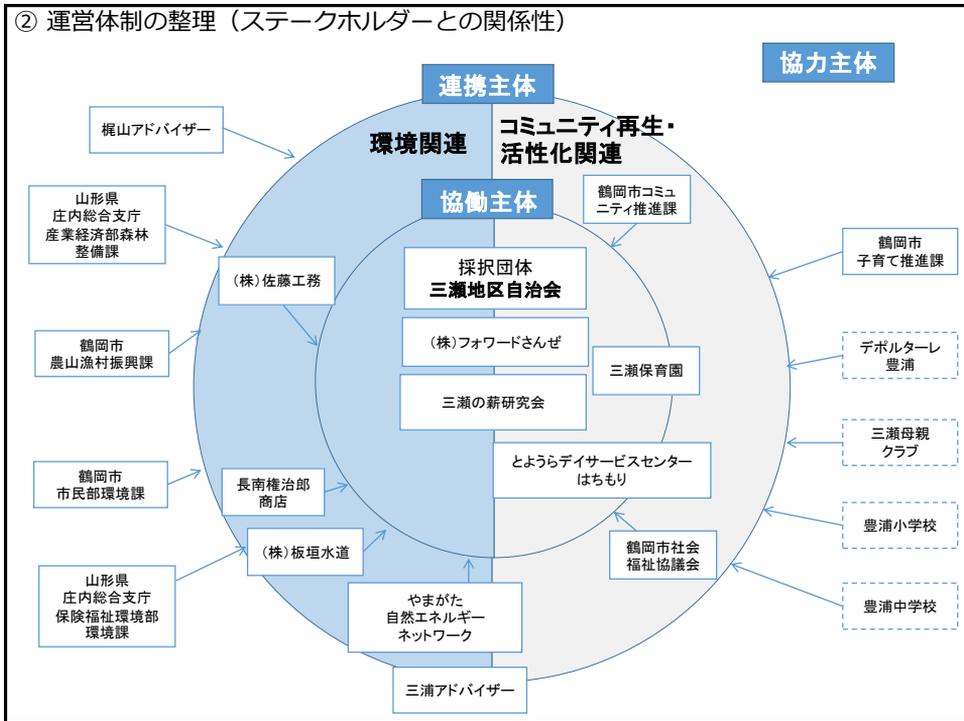
- 取組紹介のニュースペーパーを地域住民に定期的に配信することにより、自治会の取組、里山の状況の理解が深まる。
- 遊覧道整備やイベントを通じて自治会の取組やSDGsの理解が地域住民に浸透する。
- 高齢者福祉施設や、地域の大型施設への地域の取組の理解を深めもらうアップロープを行い、今後再生可能エネルギーの導入に担当者が前向きになっている。

目指す未来
からの逆算

2018年度末
地域の状態

- プロジェクトや勉強会を通じて新たなステークホルダーを巻き込むことができた。
- SDGs勉強会の機会に鶴岡市のこれまで関わりのなかった課の職員の参加や、区長の参加が得られ、取り組みの理解が進んだ。
- 鶴岡市が改訂した総合計画にSDGsの文言が反映され勉強会の影響があった。
- 地域材活用の場として、三瀬保育園に薪ボイラーが導入された。

目指す未来
からの逆算



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・地域材の活用場がない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域資源を地域内で活用するモデルの一つとして、薪ボイラーを導入した三瀬保育園で薪ボイラー使用におけるコスト面の数値のデータをとる。 ・高齢者福祉施設との連携において、本部である社会福祉協議会へアプローチをかけ、取り組みの理解を得る。 ・三瀬地区コミュニティセンターの薪ボイラー導入について、2020年度内に導入は決定しているが、現計画ではホールの暖房をまかなうボイラーの導入にとどまっているため、全館冷暖房できる薪ボイラー導入を鶴岡市に提案し、計画に組み込まれる。 ・薪ボイラー・ストーブの導入及び導入計画により、森林に再生可能エネルギーとしての価値が見直され、地域住民の森林への関心が高まる。
<p>【取組課題②】 ・里山の荒廃と里山利用の減少</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民の里山の状況の理解がイベント等を行い理解を図る。 ・地域の森林資源搬出・再造林の進捗を確認する。 ・山の整備・管理されている方や今後対象に考えている方、一緒に管理して欲しい方等を対象にした交流の場を作り継続的な管理体制をめざす。 ・ステークホルダーである地元の企業が管理する山が、学びの場として活用される。 ・里山の間伐などの整備を行いつつ、間伐材が薪やチップへと加工され、販売される。
<p>【取組課題③】 ・住民の地域への関心低下</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事業に関わるステークホルダーや薪ボイラー・薪ストーブ導入施設の関係者がSDGsを理解している。 ・地域住民に取り組みを紹介するニュースペーパーを作成し、年2.3回程度回覧板等と一緒に配布することにより地域住民の理解・関心が深まる。 ・地域内外に地域の取組を発信するため、取り組みが一目でわかるペーパーを作成し、地域外の認知度が高まる。 ・保育園で環境教育を行うことにより、保護者への木質バイオマスエネルギーへの関心が高まる。またそこに地域の多くの方が関わることでコミュニティ・協働が生まれる。

<p>⑥ その他補足事項</p>
<p>■ 事業を進める上での課題やリスクとその対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域住民に取り組みやSDGsとの関連性などを認知してもらうために、自然に受け入れてもらえるような見える化やマスコミの巻き込みなど工夫が必要である。 ・ 新ボイラー等の導入については、実際に導入するとなると費用や労力の面が大きく導入の阻害要因となっており、ステークホルダーを巻き込みながらフォローアップを考える必要がある。（費用に関しては、補助金の提案。労力に関しては地域の薪の供給の体制の提案など。）
<p>■ その他、留意事項などがあればお書きください</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昨年度行ったSDGs勉強会に鶴岡市が参加した。勉強会后、市の施策にSDGsの文言を反映させる動きが見られた。しかしその後実際にどのようにSDGsを理解・活用しているのかを確認していないため、会議やイベントの際などにコミュニケーションを取りながら連携を強めていきたい。 ・ 三瀬地区では数年前から地域ビジョンの策定に取り組んでおり、事業との親和性も高いことから、地域ビジョンで得られたデータなどを情報発信等に活かしたい。

①何と何の同時解決を目指したか	採択団体名：一般社団法人おらってにいがた市民エネルギー協議会 採択事業名：環境・農業・観光が調和した岩室温泉街の持続的なまちづくり
■何と何の地域課題の解決を目指したか	
①地域における再生可能エネルギーの理解促進 ②地域循環型社会の構築 ③地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足 ④地場産業の分断による地域の持続可能性の低下	
■2年間のアウトプット（地域課題の変化）	
① 地域における再生可能エネルギーへの意識醸成 →農業法人・観光地での省エネ診断実施 →地元ロックFestivalでのEV電源の利用 ② 「にしかん」らしい地域循環型社会づくり →地元活動を伴走支援するチーム「SHE」の立ち上げ →「にしかん未来会議」へ参画とアドバイザー →新潟市中心部（都市）とにしかん地域（農村）におけるキーパーソンのマッチング ③ 地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足 →地域との対話による地場産業若手の声の把握 ④ 地場産業をつなげる中間支援者の不足 →福祉×観光イベントの事務局支援（助成金申請）	
ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）	

②同時解決のステークホルダーは誰か
■同時解決のステークホルダーは誰か
① 地域における再生可能エネルギーへの意識醸成 EVトライアル事業（教育面・観光面）連携者 →岩室温泉旅館組合、岩室温泉観光協会、新潟国際情報大学、新潟市 カーブドッチワイナリー、観光事業関係者（広域連携） ② 「にしかん」らしい地域循環型社会づくり →岩室温泉地域づくり協議会 →「にしかんローカルマニフェスト」連盟者 →西蒲区役所（区長、地域総務課、観光課） ③ 地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足 →旅館スタッフ →新規事業者（ブルーベリー農家、じよんのび館） ④ 地場産業をつなげる中間支援者の不足 地場産業とをつなげる橋渡し役 →SHE+地元大学生

③2年間に行ったアクション		
アクション 目標 取組課題	< 1年目 > 信頼関係づくり 地域課題設定の検証	< 2年目 > 地場産業と地域づくりの伴走支援 ローカルSDG s 事業の種まき
<p>【取組課題①】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない 	<p>◆岩室地区の関係者が地域資源や自然資本を活用した暮らしと産業のイメージができるようになる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング ・再エネ事業視察 	<p>◆岩室地区において実現可能性の高い再エネ事業の見通しをたてる</p>  <p>もみ殻 葡萄（農業系廃棄物）温泉、太陽光</p>
<p>【取組課題②】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域資源の豊かさが見えづらくなっていて、地域循環型社会が構築できない 	<p>◆岩室地区内外の人に、アート・文化を活用した地域の魅力を体感する機会を提供し、「豊かな地域とは何なのか」を考えるきっかけを与える</p> 	<p>◆岩室地区の住民が、持続可能な岩室地区のあり方という視点を持って、環境・農業・観光などの各自が携わる分野からのつながり方を見出す</p> 
<p>【取組課題③】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足 	<p>◆今まで地域の担い手として活躍してきた人達の想いやニーズを聞き取ることで、新しく地域の担い手になろうとする人の活動を応援する機運を高める</p> 	<p>◆継続+新潟市中心部内の方々とのマッチング</p> <p>◆地域事業・まちづくりの伴走支援</p> 
<p>【取組課題④】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地場産業の分断による地域の持続可能性の低下 	<p>◆課題①～③への取組の中で、地域の現状を把握し、より効果的に本事業に結びつける方策を考える</p>	<p>◆継続</p> 

④2年間を通じたアウトプットや学び

■2年間の学び

- ・非営利のための営利追及であることと、それを形にすることの大切さ
- ・営利追及企業の経営者が地域での循環共生社会を考える時代に
- ・環境・エネルギー分野が地域に入ること、"1+1=2"から"1+1+1>3"へ
- ・地域課題解決のエネルギーになるのは人の原動力

■アウトプット

①プラットフォームの構築

SHEプロジェクトの立ち上げ

コンセプト

**Share!!
Human
Energy
for
"HOPE"**



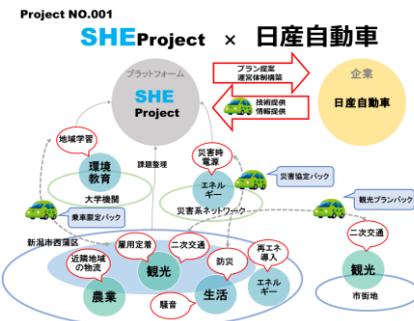
SHEがあらわすもの
* 物産山から連なる可能性を感じられるイメージラインと共に何かを生み出す生命力(energy)
* 愛情深く、温かく、賢くもって見守ってくれる岩室地域の思いやりと温性。

"SHE" towards the HOPE!!

人(Human)のエネルギー(Energy)を共有(Share)、未来を創るプロジェクトへ
岩室(西蒲区)を想うみんなの幸せや未来のために、今、手を繋いでいこう。

②ローカルSDG s 事業の芽づくり

EVトライアル事業の具体化



Project NO.001 SHEProject × 日産自動車

プラットフォーム: SHE Project × 日産自動車

地域学習: 環境教育, 大字機関, 農業協定パック, 近隣地域の物流, 農業, 観光, 生活, 観音, 二次交通, 観光, 市街地

企業: 日産自動車

プラットフォーム: プラットフォーム運営体制構築, 情報提供, 継続的提供, 情報提供

活動: 環境教育, エネルギー, 災害系ネットワーク, 災害協定パック, 観光, 二次交通, 観光, 市街地

雇用定着, 二次交通, 観光, 生活, エネルギー

海士本導入

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

■3年後の展開：温泉・農業・福祉・環境・エネルギーによる地域循環型社会の構築にむけて

- ①ローカルSDGs 観光地としての非営利型営利事業（観光モデルツアーの実現）
- ②人材育成の場（高校生～35歳までの若年世代を巻き込んだ事業チャレンジ）
- ③地元大学や地域専門家による学びと地域循環型まちづくりの検討
- ④地域伴走支援による、ゆるやかでスピーディな支援関係の構築

■つながりたい人・機能

●人

- ・全国的に活動している人、経営者
- ・地域の調整をサポートしてくれる地元の先輩的人材
- ・高校生～35歳までの若年世代
- ・新規事業を考えている人
- ・教育～若手起業の支援者
- ・営利追求型企業の経営者 ※SHEとして経済循環を学ぶため
- ・異分野(企業や行政)に本業を持ち、地域貢献に関心の高い有志

●機能

- より多面的で多様な、弾力のある地域にするためにSHEに必要な機能
- ・高校生～35歳までの若年世代を巻き込んだ事業チャレンジの支援機能
- ・持続可能な新たなライフ＆ワークスタイルの発信から観光誘致の流れ
- ・半歩先の世界を見せつつ、わかりやすいインパクトを生み出せる力

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑥同時解決のプロセスの特徴（EPO記入欄）

アウトサイドイン×インサイドアウト アプローチ

仮説を捨てる

- ・そもそも複雑な地域の課題をすべて把握はできない前提
- ・「人」と「歴史」に寄添って徹底的に地域に溶け込む
- 自分の経験、価値観、先入観を手放し、地域全体を捉えなおす

裏も表も受け止める

- ・それぞれの“HOPE”、顕在的・潜在的ニーズを引き出す
- ・関係性構築の中で、自分のニーズを客観視する
- 複雑なものは複雑なまま受け止める

仮説の見直し、SDGsと紐づけ→レバレッジポイントの発掘

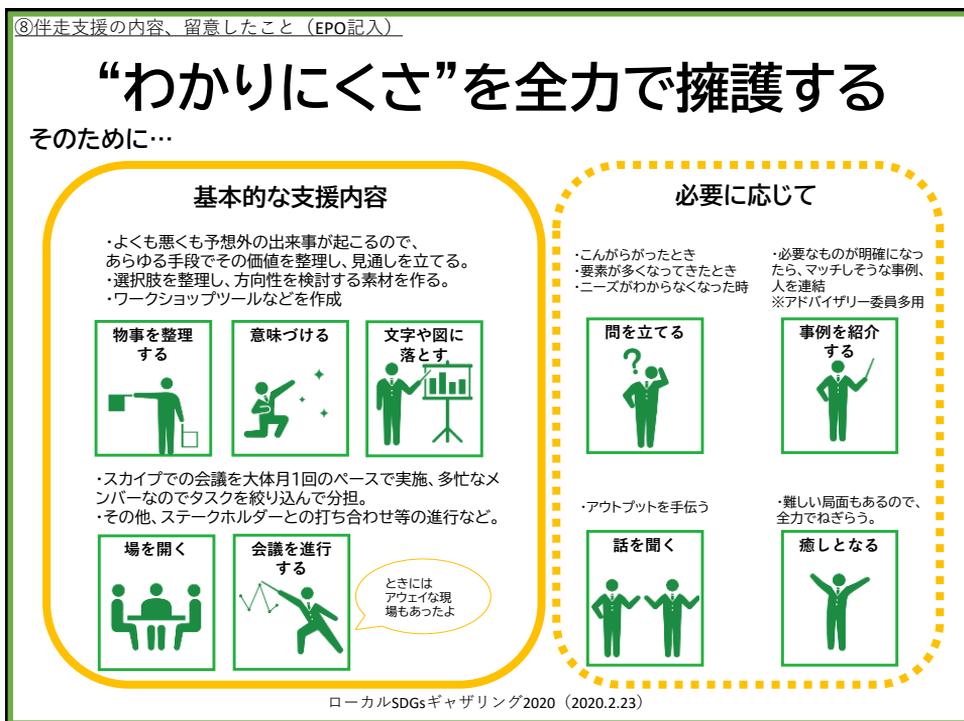
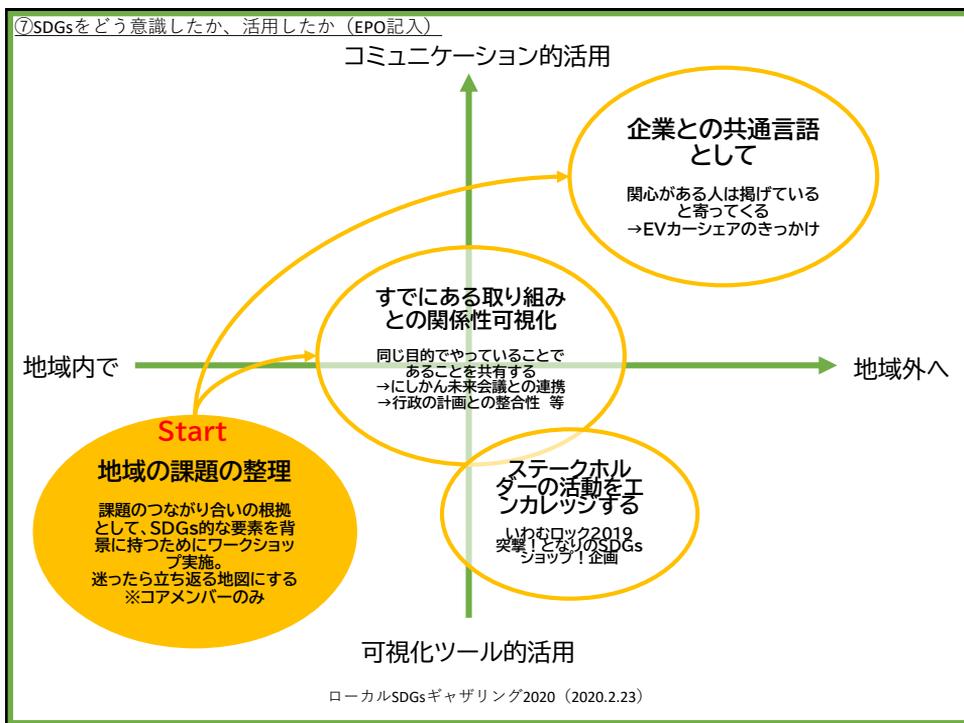
混沌に耐える

- ・ニーズとニーズの掛け算の勝算と可能性を信じて、人・モノ・こと・金をつなぐ努力をする
- 「正しい」答えはないこと、ゴールは一つではないことを楽しむ

欲を出す

- ・ニーズ×ニーズのその先の価値を共有できる仲間を得る
- ・自分達のニーズもより鮮明に認識できるようになる
- 必要な協働を理解し、自分と他者のニーズ・資源を有機的に結ぶ

ローカルSDGsギャザリング2020(2020.2.23)



環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

「環境・農業・観光が調和した岩 室温泉街の持続的なまちづくり」

一般社団法人おらって新潟市民エネルギー協議会

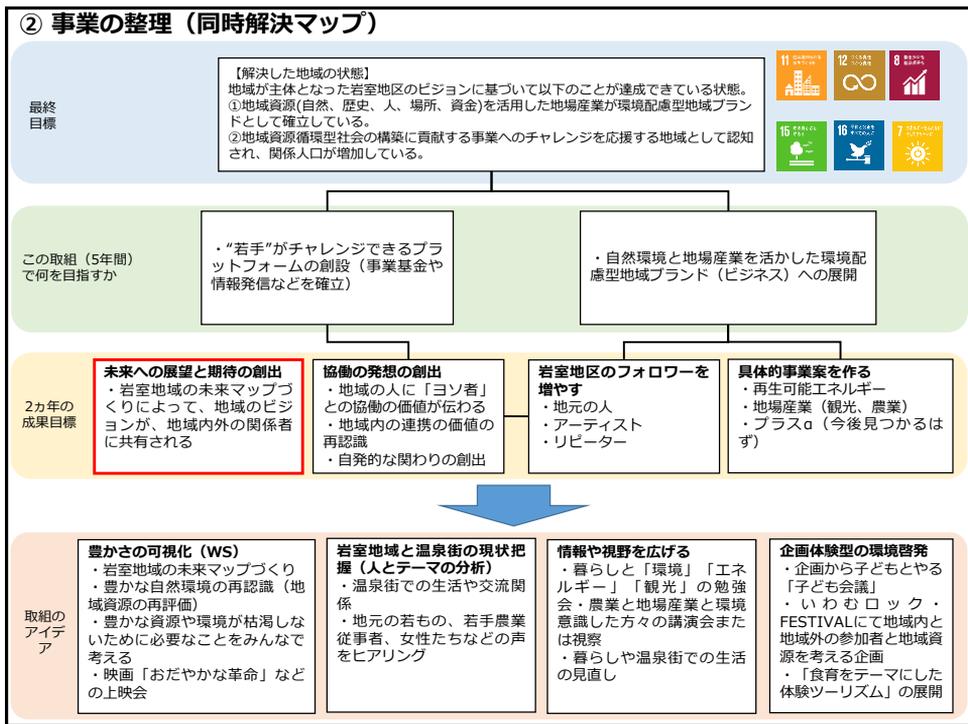
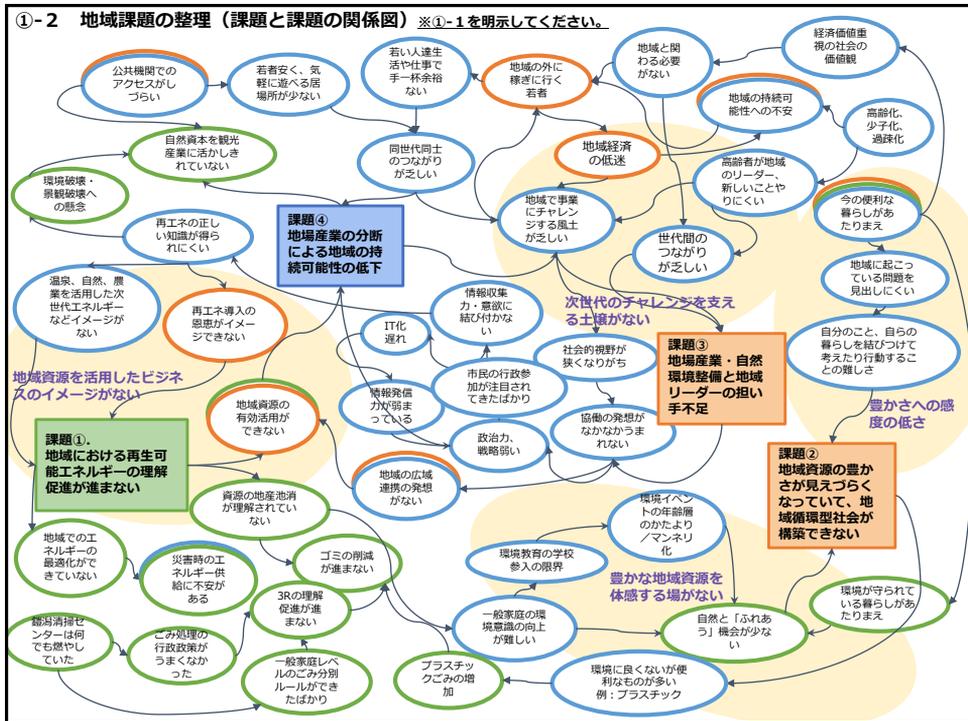
①-1 地域課題の整理

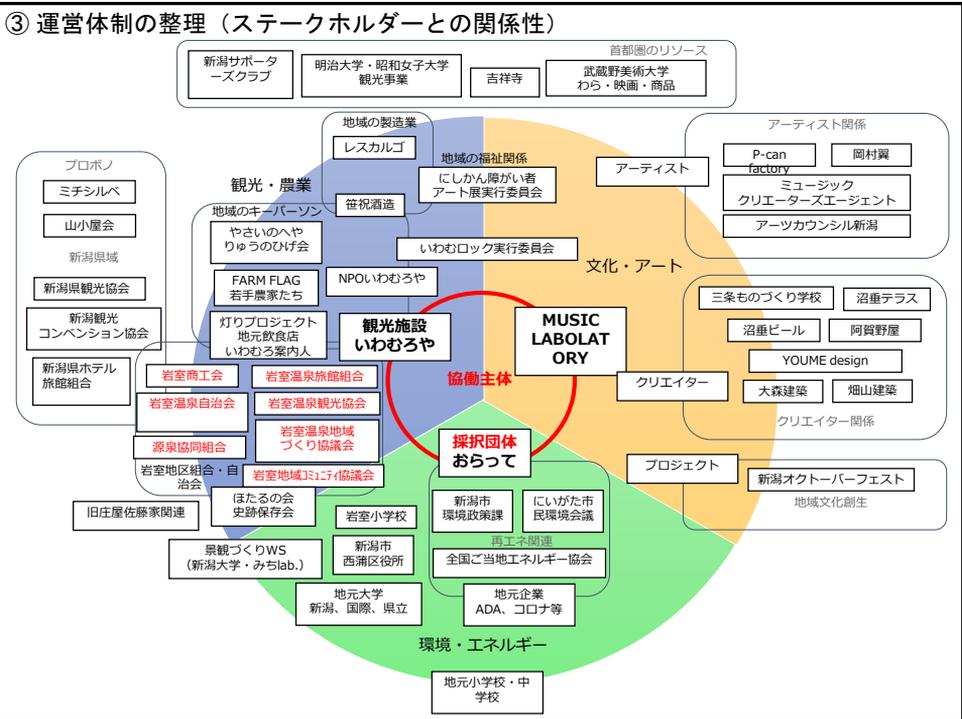
■地域の状況や課題背景

- ・【再生可能エネルギー分野】
再生可能エネルギー（以下、再エネ）を活用した自立型のエネルギー利用の構築やそれが持つ自然災害への対策効果の認知度が低く、さらに旧来型エネルギーが存在し、これに対する無意識な依存体質があること、またこれに起因する地球温暖化対策に対する取組が少ない。
- ・【低炭素型社会に向けた意識の低さ】
当該地域は自然と調和したライフスタイルに関心が高い地域にも関わらず、環境課題配慮型の事業開発までは至っていない。また、環境課題の解決や取り組みが、地元への収益性や若者雇用と挑戦の実現などに繋がることに対してのイメージも薄い現状を抱えている。
- ・【地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足】
自然が豊かな地域として、認知度も上がってきているが、里の生態系を維持している農業や保全活動を支える団体の高齢化が深刻化している。また、観光業を牽引していくリーダー人材の発掘も同様に地位全体の担い手不足は喫緊の課題である。
- ・【所要産業である「温泉観光」と「農業」の分断化】
人口規模が大きいので消費地として小さくなく、観光地としてもニーズがある当地域では、経済活動において消費と生産の持続可能性について省みられていない現状があり、個々での業務や身内での関係性にとどまっている。そのため、地域内における相互補完や連携が乏しく発展性の機会を損失していることや、情報発信力が低く集客効果が発揮されないことで、新たな顧客・訪問者の増加に苦慮している。

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ①地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない
- ②地域循環型社会の構築ができない
- ③地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足
- ④地場産業の分断による地域の持続可能性の低下





④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない	<ul style="list-style-type: none"> ◆岩室地区の関係者が地域資源や自然資本を活用した暮らしと産業のイメージができるようになる ◆岩室地区において実現可能性の高い再エネ事業の見通しが立つ
【取組課題②】 ・地域資源の豊かさが見えづらくなっていて、地域循環型社会が構築できない	<ul style="list-style-type: none"> ◆岩室地区内外の人に、アート・文化を活用した地域の魅力を体感する機会を提供し、「豊かな地域とは何なのかを考えるきっかけを与える ◆岩室地区の住民が、持続可能な岩室地区のあり方という視点を持って、環境・農業・観光などの各自が携わる分野からのつながり方を見出す
【取組課題③】 ・地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足	<ul style="list-style-type: none"> ◆今まで地域の担い手として活躍してきた人達の想いやニーズを聞き取ることで、新しく地域の担い手になろうとする人の活動を応援する機運を高める
【取組課題④】 ・地場産業の分断による地域の持続可能性の低下	<ul style="list-style-type: none"> ◆課題①～③への取組の中で、地域の現状を把握し、より効果的に本事業に結びつける方策を考える

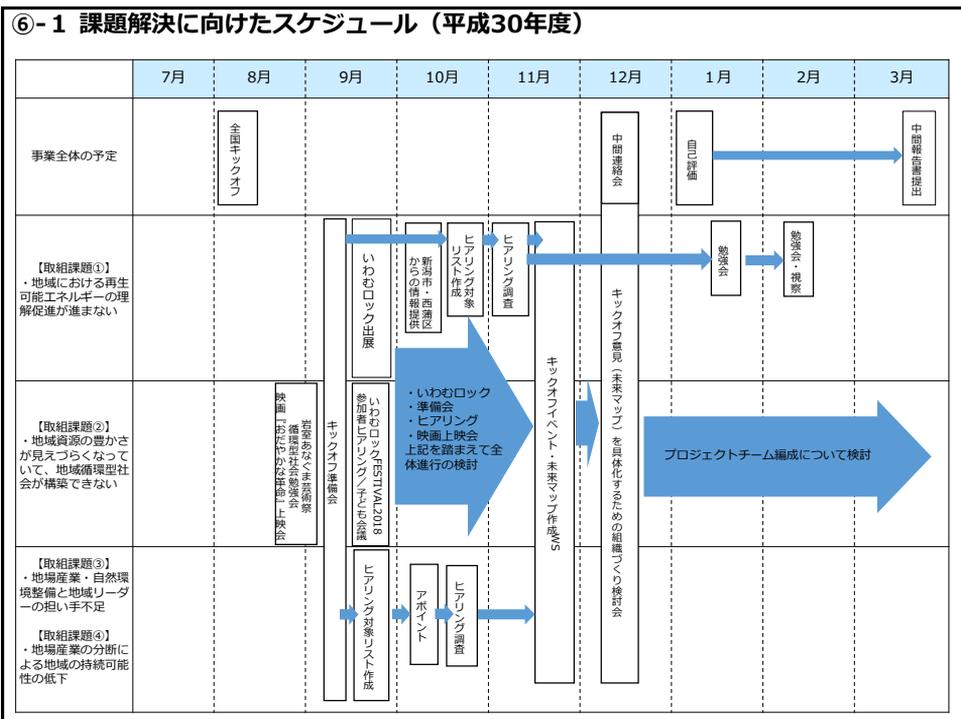
⑤ 本事業計画の見直し

■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない	◇地域資源や自然資本を活用したビジネスプランが策定されている
【取組課題②】 ・地域資源の豊かさが見えづらくなっていて、地域循環型社会が構築できない	◇岩室温泉街における地域循環型社会のモデルイメージの完成し、地域住民および関係者と共有され、それに基づいた活動や事業の芽が生まれる →岩室地域内外のメンバーで形成されるプロジェクトチームが形成される
【取組課題③】 ・地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足	◇岩室地区の住民が、地域の担い手作りの重要性に気付き、地域外の人も協働しながら、具体的な支援策を検討し始める
【取組課題④】 ・地場産業の分断による地域の持続可能性の低下	◇課題①～③への取組の中で、地域の現状を把握し、より効果的に本事業に結びつける方策を考える

■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<ul style="list-style-type: none"> ・「未来マップ」に関連した地域資源を活用した地場産業の展開が生まれている(課題①、②) ・この新しい地場産業が環境配慮型地域ブランドのモデルとして認知されている(課題①) ・地域資源循環型社会の構築に寄与する事業へのチャレンジを応援する地域として、認知され関係人口が増加している(課題③、④)



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定											最終報告会	
【取組課題①】 ・地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない	事業検討会・勉強会	事業計画を実現するための様々な活動						事業検討会・勉強会・地域説明会				プロジェクトの継続 事業実施に向けた活動
【取組課題②】 ・地域資源の豊かさが見えづらくなくなって、地域循環型社会が構築できない	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	いむむロック出展	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	プロジェクト チーム会議	今後の活動に関する検討会		
【取組課題③】 ・地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足	関係するイベントや企画とのコラボ、関連付け											
【取組課題④】 ・地場産業の分析による地域の持続可能性の低下												

⑦ その他補足事項

■ 事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・地域内の人間関係、軋轢
→地域で信頼のあるキーパーソンを巻き込む
- ・「未来マップ」（指標）の具体的なイメージを持つことが地域内の目的や理念に結び付き事業推進へむかう絶対要素だが、関係者が納得するものをどうやって作るか
→SEPLSレジリエンス評価指標のような5つの要素をもとに、岩室地域の評価指標を地域が納得しながら作成する。

■ その他、留意事項などがあればお書きください

.

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
＜平成31年度 事業計画＞

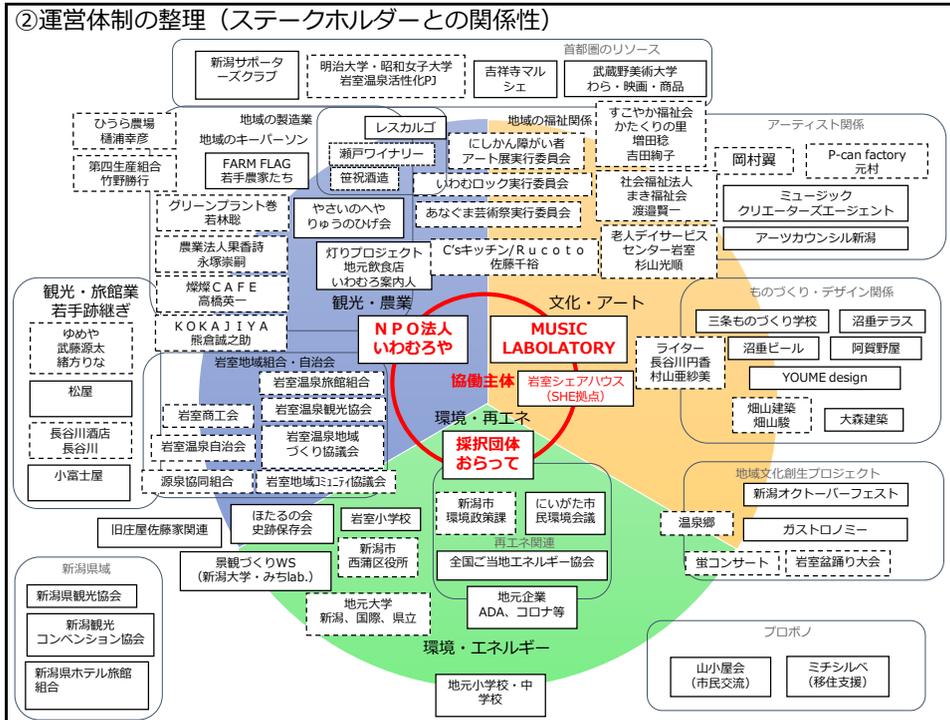
「環境・農業・観光が調和した岩室温泉街の持続的なまちづくり」

一般社団法人おらって新潟市民エネルギー協議会

2019.4

①取組で目指す地域像

<p>2022年度末 地域の状態</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●「SHE」が、多様性を包括する地域のプラットフォームとして機能している。 一人との関わりを結ぶことによるセーフティーネットとしての機能 (対話の場づくり、窓口、ゆるやかなネットワークなど) —新規事業開設や既存の地場産業の支援 (マッチングやエンパワーメント、基金など) ●経済と自然が調和した産業が当たり前になり、仕事でのつながりが増え、意識と誇りをもって働く人が増える ●「SHE」が介入する取り組みが、岩室（旧西蒲原地域）の環境、農業、観光、福祉、食、教育が調和した地域資源循環型地域、「田園型環境都市にいがた」のモデル地域での取り組みとして認知度が高まり、観光客数や交流人口が増えている。 	
<p>2019年度末 地域の状態</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 2018年度で見えてきた、里山の地域資源と福祉と文化(アート、音楽)、地場産業(農業、温泉街)との相乗効果を狙った、小さなプロジェクトの実践が地域内の連帯で展開されている ● 上記の地域連帯型の取り組みを通じ、地域内外の関係者を中心に、地域循環共生のイメージを共有できるようになる ● 岩室地域の里山資源を使った地域資源循環ビジネス構想がみえてきている ● 西蒲原地域内で、「開かれた小さな対話」が自発的積極的に開かれたり、声掛けがされるようになってきている 	<p>目指す未来からの逆算</p>
<p>2018年度末 地域の状態</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●多様なステークホルダーが、この取り組みに関心を持ち、それぞれの期待感を持っている状況。 —若手農業従事者の集まり「FARMFLAG」との信頼関係が築けた —あなぐま芸術祭実行委員会とも関係し、福祉関係者と共に地域課題解決にむけたイベントや事業を進めていく基盤ができた ●地域資源の活用へのニーズはあるが、例えば地域再生可能エネルギーに対する関心はあるが、具体的にどう生活や産業と結び付けたら良いかというイメージは持てないなど、環境・経済・社会のつながり(豊かさとは何か)について具体的なイメージは持てない状況。 	<p>目指す未来からの逆算</p>



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・地域における再生可能エネルギーの理解促進が進まない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・住環境や温泉旅館（飲食店）の冷暖房における省エネやCOOLCHOICEなどの検討から、環境やエネルギーによる関心を高める ・FARMFLAGチームメンバーにさらに具体的なプロジェクトを検討し、再生可能エネルギーが農業や食と結びつく点を検討する。
<p>【取組課題②】 ・地域資源の豊かさが見えづらくなっていて、地域循環型社会が構築できない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・岩室の未来を考えるシンポジウムにて、2018年度に出会った「農業」「福祉」「観光」「環境」「食」で活躍されている方と共に公開対話をし、来場者と共に「豊かさ」や地域循環社会をイメージし、共有することを試みる。
<p>【取組課題③】 ・地場産業・自然環境整備と地域リーダーの担い手不足</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・岩室および西蒲原の山林資源の勉強会・調査と対話ダイアログを通じて、①里山が地域に存在することの価値を再認識する、②里山をどう活用することで保全に繋がるかアイデアを募る ・文化(アート、音楽)のジャンルを活かし、子供たちや保護者、地域の若者が気軽に参画できる土台を醸成する
<p>【取組課題④】 ・地場産業の分断による地域の持続可能性の低下</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「2018年の対話」の芽を小さなプロジェクトへのアクションに変えエンパワメントする 例) 福祉×アート（音楽）×いわむロックFESTIVAL2019 福祉×観光×あなぐま芸術祭 環境×農業×食×カルチャー（スポーツ）×食文化推進プロジェクト

<p>⑥ その他補足事項</p>
<p>■事業を進める上での課題やリスクとその対策</p> <p>・個々の取りんでいるビジネスや活動とを連動することができるか（その可能性を共に探ることに価値があるとする）</p>
<p>■その他、留意事項などがあればお書きください</p> <p>.</p>

①何と何の同時解決を目指したか

採択団体名：里山ウェルネス研究会
採択事業名：里山保全体験を通じた障がい者雇用促進を目指すプログラム事業

森林(もり)づくり(里山保全・林業)と福祉の同時解決

課題① 里山整備等で出た間伐木材の利用が進まない。

課題② 障がい者等の就労就労支援においては、実習先の確保等が課題。

課題③ 冬の期間（積雪期）における林家や林業従事者の収入減少

林業家と障がい者の自立支援NPOが連携した取組

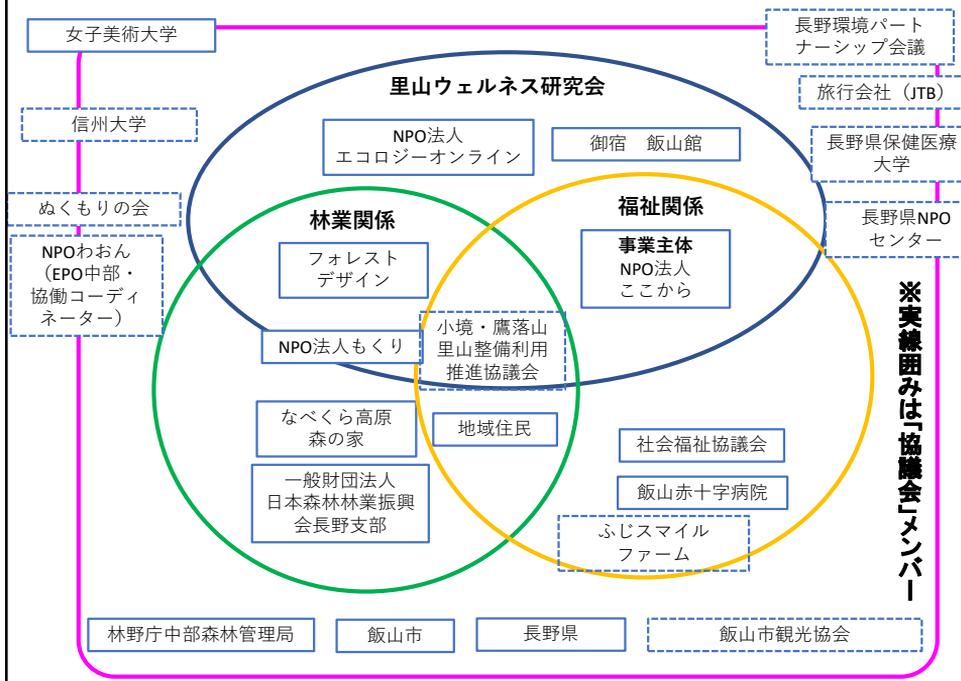
間伐材の未利用木材商品の付加価値と障がい者支援

- ① 未利用木材の新しい活用方法、林業家の新たな収入源の確保
- ② 福祉施設入所者等の新しい支援先、支援方法の開発
- ③ 里山への地域の関心向上、里山保全へ



ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

②同時解決のステークホルダーは誰か



③2年間に行ったアクション

ログファイヤー 明かり、コンロ、暖取り ひとつで3役

ForestGood2018間伐・間伐材利用コンクール
審査委員長奨励賞受賞



燃焼実験等を経て<規格基準>を設定
直径：20～25cm程度・長さ：35～45cm程度・
含水率：12%以下

<その他の主なアクション>
女子美術大学とのキャラクター開発・市のふるさと納税返礼品へのエントリー・
市内のお祭りにてログファイヤーの提供など

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

・ログファイヤー製作工程の障がい者(精神障害)の作業実証事業



作業や支援施設担当者や相談しながら使用する工具や安全具の使用などを模索

・地域住民等へ製作講座の開催



地域における本事業の活動への理解と新たなログファイヤー製作の担い手の育成を目指した製作講座と交流会を開催

④2年間を通じたアウトプットや学び

■森林(もり)づくり

【間伐材の活用;ログファイヤー】

- ・ログファイヤー:活用されることのなかった間伐材を商品化して付加価値をつけられた。
- ・名称「飯山ログファイヤー」で地域のPRも。
- ・林福連携、SDGs、同時解決等々をキーワード(ブランド)にして観光/環境学習用ツールとしての展開も。

【空間としての活用】

- ・森林セラピーの展開や新たに認知症予防のプログラム展開
- ・環境学習、「森カフェ」講座等の展開(ログファイヤーも活用)

■新たな「森林サービス」として関係者が評価

■地域住民の里山への関心向上(=地域住民による維持管理費支出等に対する賛同意識が向上)

今、里山では...

里山の維持管理のパロメーターであり、林業と共生して開花するといわれる「カタクリ」が生育しはじめている。



■福祉

【障がい者・施設スタッフの声(アンケート結果より)】

- ・始めは難しかったけど、やりやすい道具も作ってくれて良かった。
- ・施設から出た作業は利用者のモチベーションが上がったように感じた
- ・他の人と関わり、指導を受けていくにつれて、本人が自信をもって活動していく様子が見られた。

■治具の工夫、障がい者(作業)のモチベーション向上、障がい者による加工=付加価値として展開(私がつくりましたメッセージカード添付等)

■「働く場」づくり(A・B型事業所になること)は困難だが、障がい者の「居場所」「自立支援の場」の選択肢を増やしたことを地域(市)が評価。

■市の福祉における重要政策の一つに。

市民に信頼される市政をめざし 三穂市の社会福祉が伸びる重点政策

経済の発展
人口対策として活力ある「グローバルふるさと」を創出する。経済発展を推進します。
健康を守る
市民の健康増進のため、予防医療の充実を図ります。

「障がい者雇用と里山保全とをマッチングした連携事業(林福連携)を推進します。」

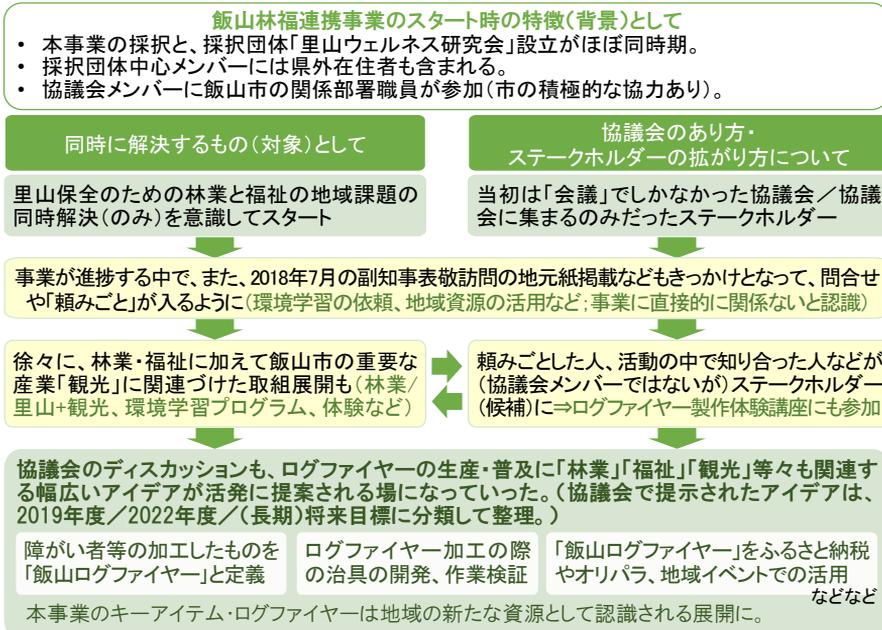
2018年11月15日発行「市報いしやま(No.713)」より

⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

	3年後の展開	つながりたい人や機能
既に進行中	協議会の継続開催	次年度以降も開催予定であることを協議会メンバーは了承済み
	大学等と連携した森林活用プロジェクトの継続と新たな展開	信州大学建築学科学生との間伐材を活用した古民家づくりのプロジェクト、そのほか環境学習プログラムづくり
	「森カフェ」講座等での飯山ログファイヤー活用	里山空間活用プロジェクト「森カフェ」主宰団体NPOわおんととの連携による森カフェでのログファイヤー活用の定着・ツール化
	地域イベント等での飯山ログファイヤーの活用・PR	地域の祭りでの奉納、かまくらまつり等イベントでの定番化、出張カフェ学生サークルとの提携展開など
	森林環境を活用した認知症予防の取組の中心拠点づくり	東北医科薬科大と連携した認知症予防における非薬学療法の可能性を探る研究の実施体制作りを開始(今春から開始予定)
	パラリンピック等障がい者スポーツの場での活用	まず、2020パラリンピックにおけるログファイヤー活用へ
今後取組予定	福祉事業研修の場への発展	障がい者だけではなく、引きこもり者や高齢者などのほかの福祉における研修の場への発展。
	SDGs、環境教育、林福連携の研修の場づくり	旅行会社(JTB)販売員向けサイトや教員向けサイト等へのプログラム登録
	里山と地域を結ぶの新しいプラットフォームづくり	里山ウェルネス研究会による森林と地域(人)を結ぶソーシャルビジネスプラットフォームへの進化

山づくりの取組でも一番を目指す組織へ
(飯(米)でも一番、山(森林)でも一番を実現する飯山プラットフォームへ)

⑥同時解決のプロセスの特徴 (EPO記入欄)



⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

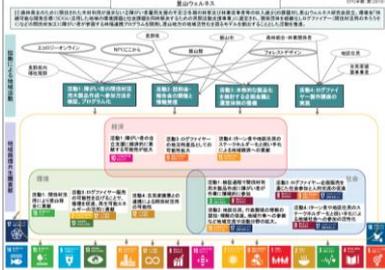



協議会のディスカッション内容をSDGsで振り返り

協議会（2019年度は4回開催）では、毎回最後に、ディスカッションの内容とSDGsとの相関性の振り返りを実施。

EPO中部「活動見える化プログラム」を活用したとりまとめ

2年間の取組の成果や事業の要素、そしてSDGsとのつながりについて整理。

取組の中で既に関わっている／これから関わるSDGsのゴールは何かを改めてメンバーが認識すると共に、まだ触れていないゴールも明確化し、今後の取組の新しいアイデアのヒントを探るディスカッションにつなげている。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

主な支援	実施事項	留意事項
事業の進捗管理	<ul style="list-style-type: none"> ①環境省事業としての業務管理 ②事業の進展、SH・地域の状況確認 ③上記①②の関係者間の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ● 採択団体、REO、EPOの3者連絡会を適宜、実施。 ● 連絡会では、EPOの「業務の進捗状況表」をもとに取組状況、及び事業周辺を含めた現地動向等の採択団体からヒアリングし、「進捗状況表」に反映の上、3者で共有。 ● 各取組の展開の仕方については、採択団体に一任。
ディスカッションの進行	<p>ワークショップ方式で取組アイデアを抽出するディスカッションを実施。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 拡散してよい（お互いの考えを共有する）ディスカッションと、事業を前進させるディスカッションを実施。 ● 後者では、本事業のカギとなる「ログファイヤー販売」「障がい者による作業」の軸がぶれないディスカッションとなるようワーキング用シートなどを工夫。 ● 例えば、取組のアイデア出しでは、「時間軸」をシート上に予め設定するなど。
主催フォーラムでのPRの場づくり	<p>2018年度、2019年度のEPO主催フォーラムを長野市、飯山市で開催。採択団体が登壇して事業PRを行うプログラムを盛り込む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 2019年度フォーラムでは、ログファイヤーを活用した「森カフェ」を実施。（これをきっかけに「森カフェ」主宰者とログファイヤーを活用した森カフェ講座のプロジェクトが進行中。） ● 講演として、採択団体による新たな地域ビジネス・プラットフォームの展開を念頭に、地域活動を事業へシフトする際に重要な考え方を提示する内容を依頼。（早稲田大学教授・島岡未来子先生による講演「多様な協働による事業創造に向けて」を実施。）

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

里山保全体験を通じた 障がい者雇用促進を目指す プログラム事業

里山ウェルネス研究会

①- 1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

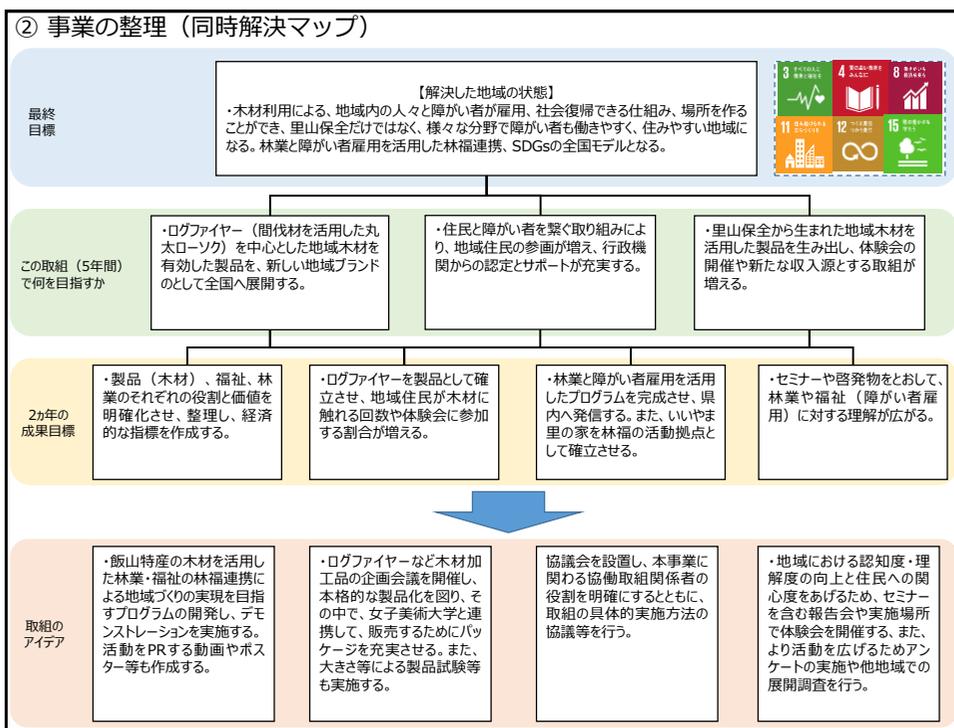
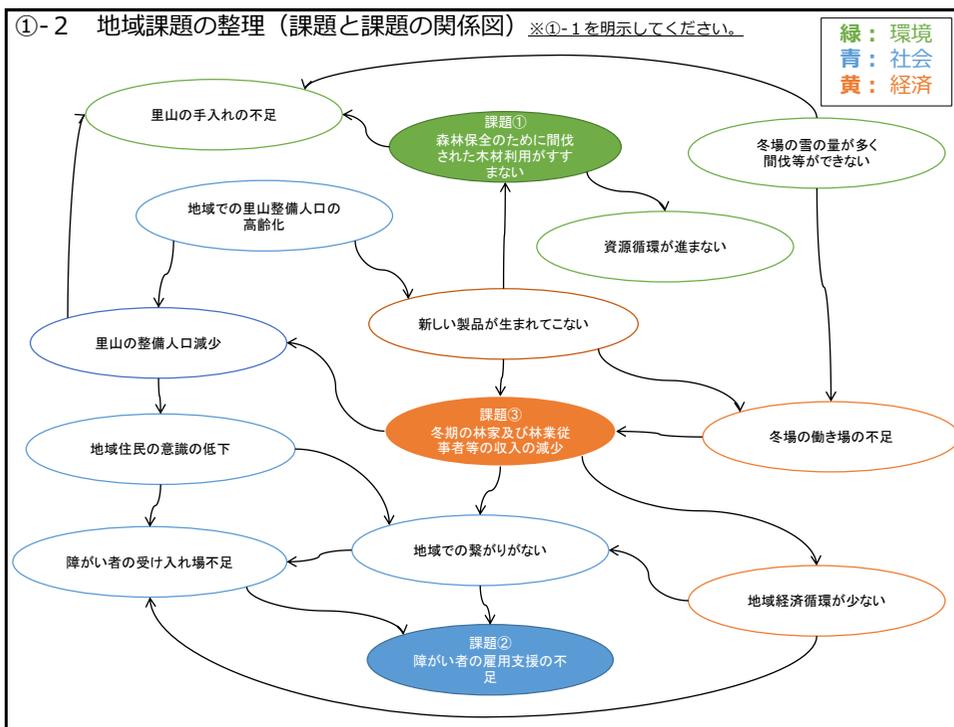
長野県飯山市は、長野県の最北に位置し、西側の新潟県との県境には総延長約80kmの信越トレイルが連なり、緑豊かな自然に包まれている。「母の森・神の森」と名付けられており、森林セラピー基地も存在する。また、この地域は過疎化・高齢化に伴い、里山の整備をする人が減っている上に、豪雪地域ということもあり、年間を通して森林整備を行うことができず、冬の期間、林家や林業従事者の収入が無くなってしまうという課題を抱えています。

併せて飯山市では平成19年3月に飯山市障害者計画（平成18年度～平成23年度）を策定し、障がい者施策の総合的推進を図ってきましたが、地域で暮らし続けるためのサポート体制、災害時の障がい者の避難や避難場所の確保、就労支援においては、実習先の確保等が課題になっています。

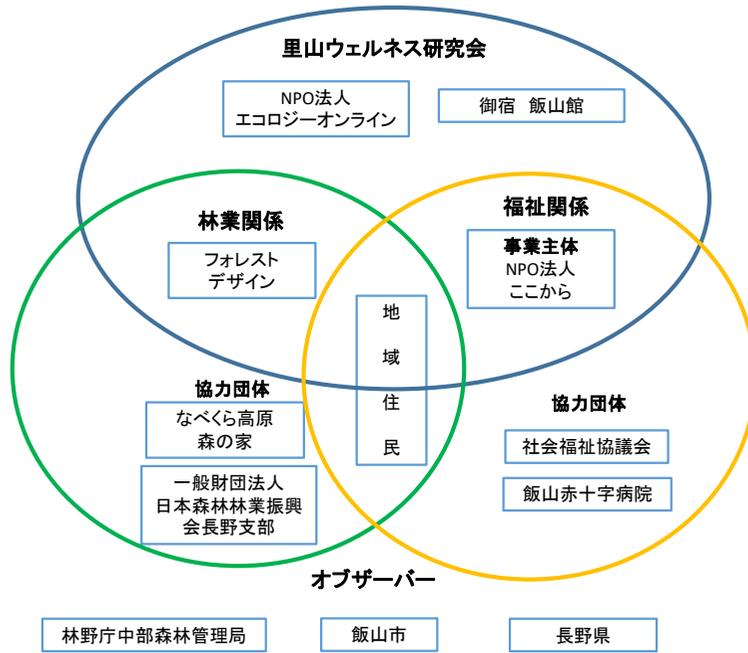
地域の担い手不足の課題が里山保全と木材利用にも大きく影響しており、自然あふれるこの地に、林家及び林業従事者と障がい者の取組（作業）をあわせることで、課題を同時に解決することが持続可能な地域づくりにつながることを期待しています。

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ①森林保全のために間伐された木材利用が進まない
- ②障がい者雇用支援の不足
- ③冬期の林家及び林業従事者等の収入減少



③ 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）



④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・間伐された木材利用が進まない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ログファイヤーの製品化させ、ヒアリング調査等を通して、製品としての確立をさせる。 ・燃焼試験等を通して、ログファイヤーの性能を明確化させる。
<p>【取組課題②】 ・障がい者雇用支援の不足</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の地域住民の連携を通じて、課題をより明確にし、林福連携のプログラムを確立させる。 ・他地域での調査を通して、飯山市内だけでなく、長野県内での、地域住民の新たなキーパーソンの発見を目指しつつ、地域住民の交流の場として場づくりを行う。
<p>【取組課題③】 ・冬期の林家及び林業従事者等の収入減少</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・冬期における林家及び林業従事者の作業を明確化させる。 ・連携をととして、林家及び林業従事者の参加を増加させる。

⑤ 本事業計画の見通し

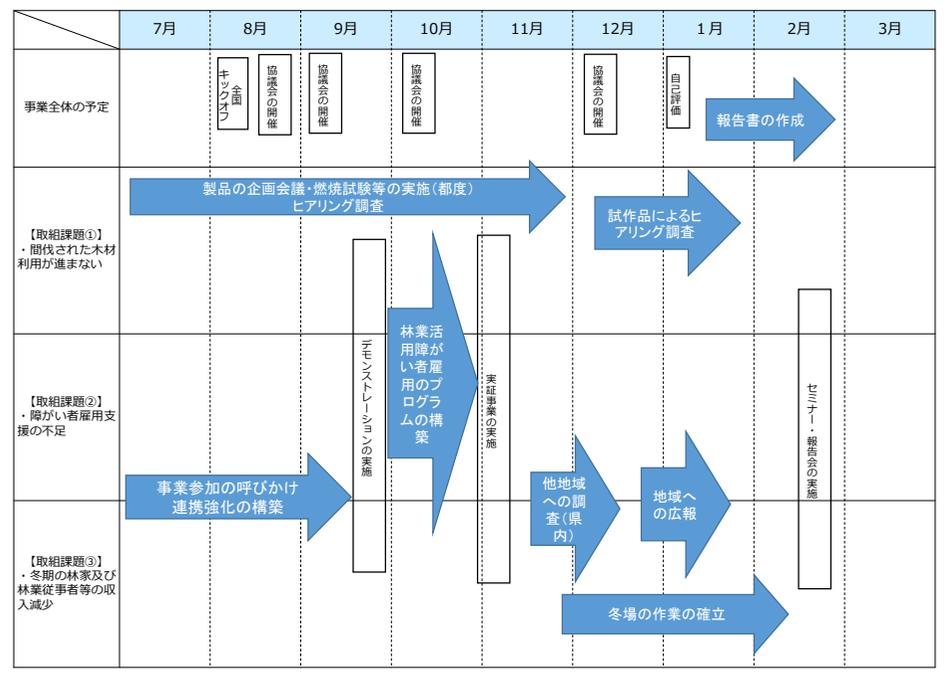
■事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・間伐された木材利用が進まない	・ログファイヤーを製品化させて、本格的な販売を開始させる ・パッケージや説明書等においては、女子美術大学と連携して制作したキャラクターを活用する。 ・新しい形で生まれたの地域の特産品として、飯山市に認定される。
【取組課題②】 ・障がい者雇用支援の不足	・雇用プログラムが確立され、県内において、同プログラムを活用して取り組む団体ができる。 ・飯山市及び長野県における林業、福祉が連携した雇用モデルとして承認され、行政からのサポートが充実される。 ・いいやま里の家（フォレストデザイン）が障がい者雇用場として確立される
【取組課題③】 ・冬期の林家及び林業従事者等の収入減少	・冬期の林家及び林業従事者の作業が明確化され、収入増加に繋がる。

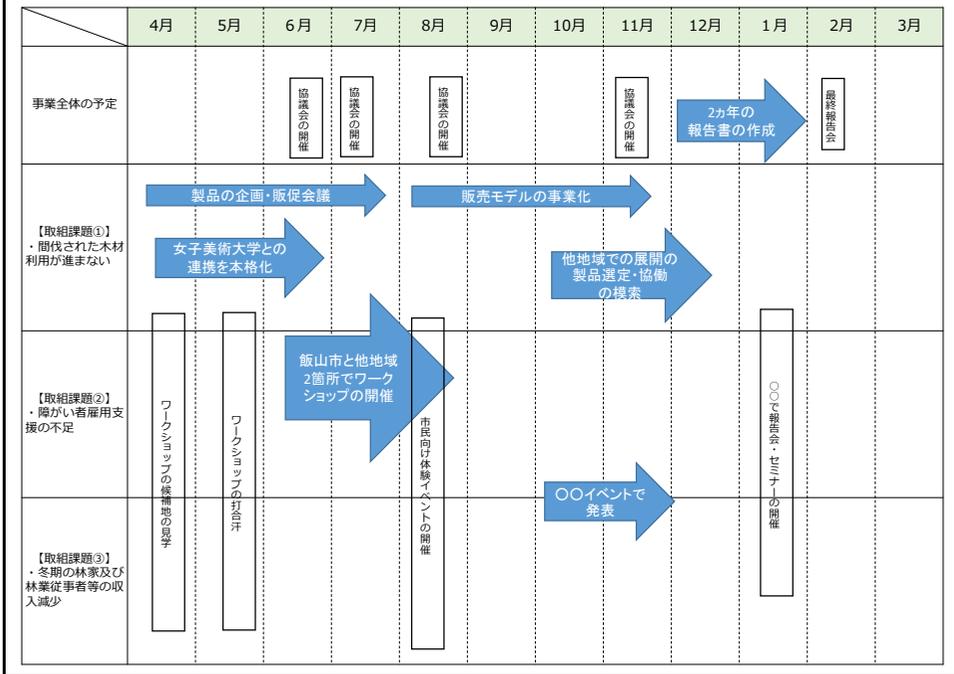
■5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の林業・福祉の連携から、地域木材と雇用、経済が三位一体となった新しい地域循環モデルとしての基盤となる ・取材や他地域からの視察が増え、地域の活性化に繋がる ・取り上げられた記事や映像を通して、飯山市に移り住む人が増える ・地域や世代を超えた交流が生まれ、多くの人々により新しい創造により、新しい事業計画が組み立てられる。 ・同団体を中心となり、SDGs、林福連携のモデル地域としての研修の場として活動が広がる。

⑥-1 課題解決に向けたスケジュール（平成30年度）



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）



⑦ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・協働主体をはじめ、複数の県をまたぎ、各ステークホルダーがそれぞれの仕事や他の活動等を抱えていることから、効率的・効果的な会議の運営が必要である。
- ・本取組の持続性について、行政からの支援やサポートを受ける場合、法人化が必要な場合もあり、本活動が長野県の事業にも関わらず、本事業の代表団体は栃木県の団体であることから、新しい雇用を生み出すためにも、長野県に所在地を置く団体の参加を増やし、事務局運営の体制を整える必要がある。
- ・地域住民の多くが高齢者であり、インターネットなどの電子媒体による情報周知の有効性が低いことである。そのため、飯山市や県、社会福祉協議会等の広報誌の有効活用が考えられる。この点においては、取組を進めながら、行政と協力して進めていく。

■その他、留意事項などがあればお書きください

.

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
＜令和元年度 事業計画＞

里山保全体験を通じた 障がい者雇用促進を 目指すプログラム事業

里山ウェルネス研究会

2019.05

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 本事業の林業・福祉の連携から、地域木材と雇用、経済が三位一体となった新しい地域循環モデルとしての基盤となる。
- 取材や他地域からの視察が増え、地域の活性化に繋がる。
- 取り上げられた記事や映像を通して、飯山市に移り住む人が増える。
- 地域や世代を超えた交流が生まれ、多くの人々により新しい創造により、新しい事業計画が組み立てられる。
- 里山ウェルネス研究会及び協議会が中心となり、SDGs、林福連携のモデル地域としての研修の場として活動が広がることにより、ツーリズムの面でも需要が増え、定住、企業研修等の場としての活動が増加する。

2019年度末
地域の状態

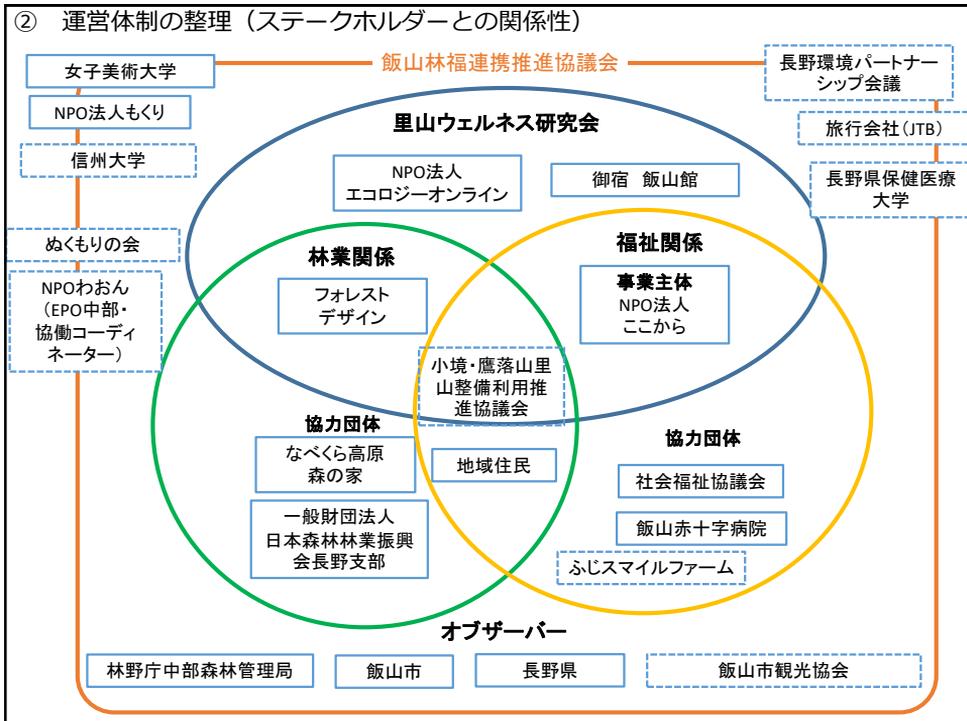
- 木材加工の工程に障がい者が参加する手法が確立するなど、林業と障がい者における林福連携事業が明確になり、市や県などの行政の協働取組の一環として、事業の普及を図る。
また、ログファイヤーの認知度も向上し、ふるさと納税の返礼品の採用、バラリンピックへの寄贈や各レクリエーション団体、施設、旅行会社と連携し、ログファイヤーを活用した環境教育、レジャーなどのプログラムを展開する。
- 「小境・鷹落山里山整備利用推進協議会」との連携をはじめ、地域等で行われている他の環境、福祉活動と連携した啓発活動、協力関係を形成する。

目指す未来
からの逆算

2018年度末
地域の状態

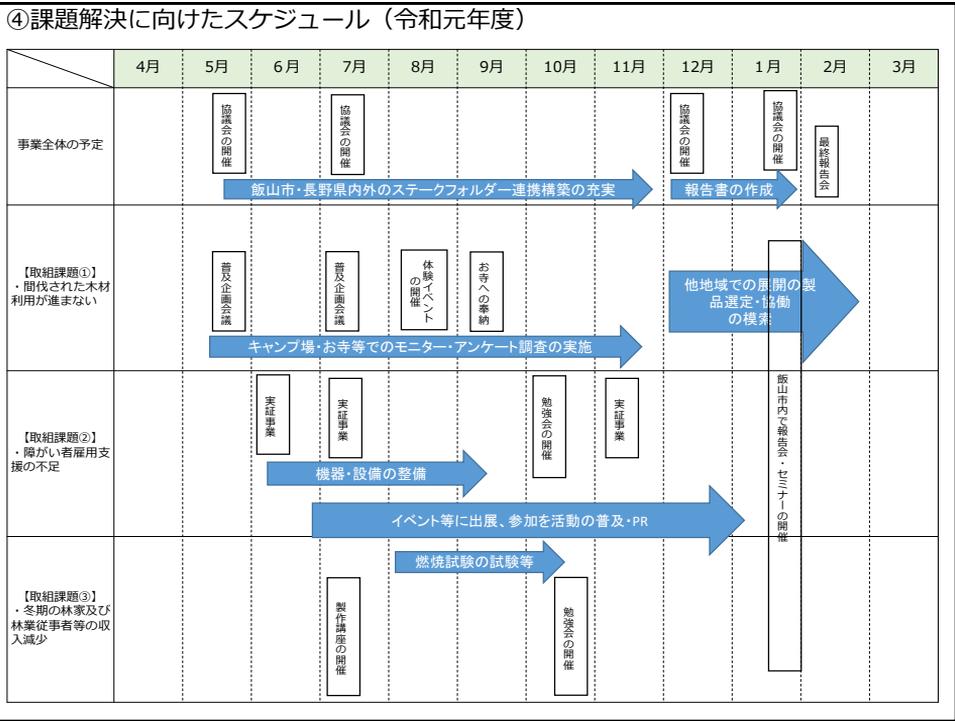
- 本事業の協議会として「飯山林福連携推進協議会」を設立して協議を重ね、今までつながりがなかった行政との関わりや連携もはっきりとれ、事業実施及び林福連携の基盤が整い、事業のスタートを開始することができた。飯山市の政策の中でも林福連携事業を推進する項目が追加された。
- 本事業の協議会とは別に、拠点地域に「小境・鷹落山里山整備利用推進協議会」（長野県ふるさと森林づくり条例・里山整備利用地域の活動推進主体に2018年12月に認定）も設置され、県による森林づくりのための林道整備や、推進協議会メンバー（本事業協議会メンバーでもある）による認知症予防への里山活用の取組など新たな展開も生まれている。

目指す未来
からの逆算



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 <環境課題> ・間伐された木材利用が進まない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・間伐材を活用した地域の新しい木材加工品の普及に取り組み、地域や関係者が里山の価値を再認識し、里山の維持管理に対する地域の意識を向上させる。 ・木材加工品の生産を進めることにより、里山における資源循環としての間伐材利用を促進する。 ・地域の未利用間伐材の年間の使用見込み量が数値化する。
<p>【取組課題②】 <福祉課題> ・障がい者雇用支援の不足</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の新しい木材加工品の製作における役割分担（必要人数）や稼働スケジュールを明確にする。 ・地域（市・県）の林業と福祉が連携した林福連携事業のモデル事業の構築に取り組む。 ・障がい者だけでなく、他の福祉事業と連携も模索する。
<p>【取組課題③】 <経済課題> ・冬期の林家及び林業従事者等の収入減少</p>	<p><地域の新しい木材加工品の生産></p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民や市内をはじめとする林業家の方がログファイヤーを製作できる展開を図る。 ・多くの場所で普及拠点ができ、3年後には林業従事者や関係者の人たちの収入の見込みが立てられるようにする。 <p><生産した木材加の活用方法の確保></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ログファイヤーがパラリンピック等の大きなイベント及び旅行会社等での活用・採用が決まる。 ・キャンプ場、ボーイスカウト、お寺等で毎年の使用が3件確定させる。



⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
・平成31年度の到達目標の変更	・本事業では、「里山と障がい者雇用の促進」というテーマの中で林業と福祉の連携において、林福連携としてきたが、異なる様々な分野のステークホルダーを巻き込んだ「協議会」で事業を進めていく上で、障がい者に加えて「里山と高齢者福祉」も事業の中でつなぐこととした。また、キャンプ場や宿泊施設と連携したツアー（観光）において、ログファイヤーの活用を図る追加の目標設定を行った。
・取組のアイデアの変更	・キーアイテムであるログファイヤーを地域経済の資源としていくため、林業家や市民に対するログファイヤーの制作講座の開催、協議会の中で地域資源として活用していくための方策等を検討する。
・取組のアイデアの変更	キーアイテムであるログファイヤーを多くの人に普及する上で、ログファイヤー使用に関するモニター事業の実施。これにより生まれたフィードバックを反映し、多くの人が製作でき、さらによりよいログファイヤーが完成でき普及することが期待できる。
・取組のアイデアの変更	・本事業の共同性や巻き込み状況に関して、当初はツーリズム（観光）関係との連携は記載をしていなかったが、ツーリズム関係と連携した方が面白いという意見も多々頂き、企業研修等をひとつの候補としたツーリズムとの連携を追加した。

<p>⑥ その他補足事項</p>	
<p>■事業を進める上での課題やリスクとその対策</p>	
<p>・協働主体をはじめ、複数の県をまたぎ、各ステークホルダーがそれぞれの仕事や他の活動等を抱えていることから、効率的・効果的な会議の運営が必要である。そのため、役割分担を明確にし、適宜、事業主任者と各担当者のミーティング（電話ミーティング含む）等を図っていく。</p> <p>・ログファイヤーを普及することで障がい者の作業促進や地域の未利用木材の利用促進につなげるという事業ではあるが、1つの製品の普及（販売促進）にならないよう多くの方を巻き込みつつ、目標達成に向けて努力していく。</p> <p>・いろいろな方々からアドバイスを頂くが、各アドバイザー及び審査の先生によりご意見に相違があり、困惑してしまうことが多々ある。都度、中部地方環境事務所、EPO中部と相談の上、事業を進めていく。</p>	
<p>■その他、留意事項などがあればお書きください</p>	
<p>.</p>	

①何と何の同時解決を目指したか

採択団体名：竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会
採択事業名：地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業

竹生島・びわ湖北部の 魅力発掘プロジェクト

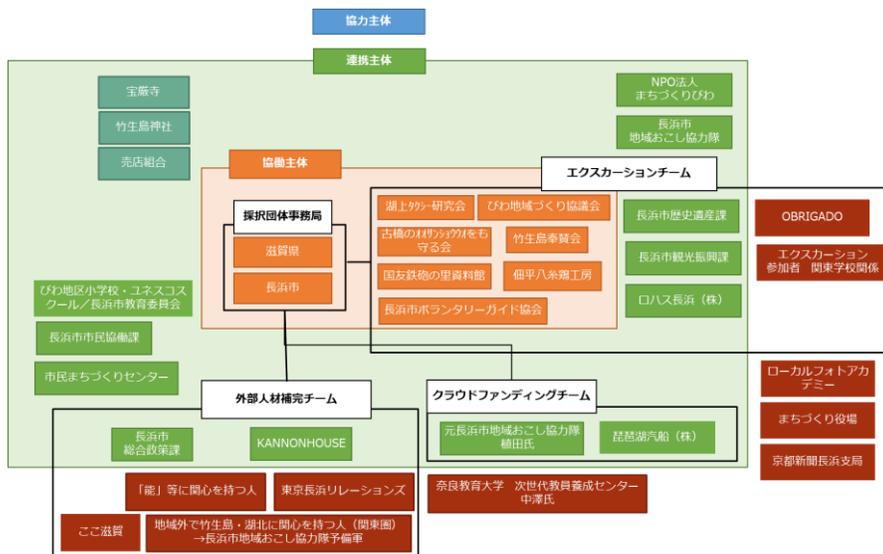
取組目標

1. 資金確保の体制構築
2. プラットホームの形成
3. 竹生島地域の魅力発掘

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

②同時解決のステークホルダーは誰か

運営体制の整理（ステークホルダーとの関係）



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

③2年間に行ったアクション

事業期間内（2カ年）に行った事業

A：エクスカーション事業プラットフォーム運営機能

持続的な協議会運営を目指すための体制基盤としてプラットフォーム会議を開催した。

B：エクスカーション運営に向けた開発・素材発掘機能

エクスカーションの協力者（個人、企業、団体）を増やすため、関係者とのヒアリング等を実施し継続的に運営できる体制を整備した。

C：ふるさと納税による事業資金確保機能

クラウドファンディングを活用し、市内外の人から賛同を得て寄付が集まり資金を確保した。次年度以降も実施し、資金の確保する予定。

D：外部人材補充推進機能

びわ湖北部・竹生島の歴史を通じて、暮らし・文化の魅力等、長浜で繰り広げられた時代を動かす人間模様、自然・生物と人々が互いに影響し合う暮らし等の内容などの講演会（会場：東京・上野区民館）の実施、また、「近江ゆかりの会」（会場：品川プリンスホテル）において、協議会事業の啓発としてPR・情報ブースへの啓発パネル・パンフレットの出展し、協議会事業である竹生島の再生・保全に関する取り組みやクラウドファンディングに関する取り組みを紹介した。

E：外来生物駆除募金確保機能

クラウドファンディングにおいて資金を活用したタブノキ苗の植樹地等の草刈り・清掃・アレチウリ等の外来種などの保全事業を実施した。

F：エクスカーションを活かした指導案開発機能

エクスカーションの試行を2回実施し、「ESDエクスカーション実施マニュアル」を作成した。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

④2年間を通じたアウトプットや学び

2年間の取りまとめ

取組目標	成果	課題
資金確保の体制構築	C E	資金をより多く確保し、事業を拡大していく。
プラットフォームの形成	A D	構成団体・構成員の高齢化担う若者世代の参画の検討する。
竹生島地域の魅力発掘	B F	地域資源の掘り起こしを行い、魅力的な竹生島周辺に関わるエクスカーションを計画する。



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

今後の取り組み



◇ 市民参加型の保全活動の実施

クラウドファンディングを活用し、市内外の人から賛同を得て寄付を募り資金を確保し、周辺地域と島の歴史的つながりや風習といった関係する各種団体による生物多様性の保全活動を実践する。

◇ エクスカーションの実施（事業型）

竹生島とその周辺地域が持つ美しい景観と豊かな生態系、歴史的、文化的価値、携わる人の生活等「竹生島・びわ湖北部の魅力」を広く発信し、学び（教育研修）、体験（本物に触れる）観光事業（地域振興）等の素材を発掘し、関係人口を増やしつつ、エクスカーションを実施する。



心のふるさと竹生島を 後世に残したい！

周辺地域が持つ美しい景観と豊かな生態系、歴史的、文化的価値、携わる人の生活等の「竹生島・びわ湖北部の魅力」を後世に残したい。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

タブノキ保全

地域社会のつながり回復

旧市域外の観光振興

カワウ対策のみ から 地域課題の解決

も含めた取組への変換

- これまでは **カワウ対策（タブノキ保全）**のみに焦点。（行政の予算と地域の自助努力に依存

→ 将来に向けた持続性に **赤信号**

- **2つの手段による収益化に向け、その素地づくり**に取り組む。

→ エクスカーションの策定・試行（計3回）

→ クラウドファンディングの実施（計2回）



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

SDGsを関係者が学ぶ場づくりから、 SDGsを活用した創造的対話へ

地域づくり・課題解決につながる創意工夫を導く助けとして



SDGs勉強会 滋賀県立大学地域共生センターより講師を招いて学んだ。

「SDGs勉強会」(きんき環境館主催)での学び合う機会

↓

異分野へのつながりに気づき、新しい仲間と出会うことを実感



「ながはまコミュニティカレッジ」での発信と交流
(長浜市市民協働センター、長浜市(市民協働課)、長浜市産業文化交流拠点、事業紹介)

図 タブノキ保全による波及効果の及ぶ範囲（一部）



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

伴走支援の内容・留意したこと

- ①ヒアリングを通じたつながり・仲間の拡大を支援
 - ・機能創出に向けたキーパーソン・主体との関係構築
- ②EPOならではの関係人口づくり
 - ・首都圏での場づくり（地縁・行政域を越えた範囲）
 - ・多様なセクターとのつながり
 （長浜市出身東京在住者／滋賀県人会
 ／能楽ファン／歴史ファン）
 [同郷グループが有効]
- ③専門性（スタッフ）の連携支援
 - ・スタッフが足しげく通い、専門性を連携させた支援（ESD教材化、エクスカージョン、自治体協働）

（協議会以外に、事業の協働主体が見られない状況から出発）

各機能を創出する地域協働に向けた つながり・仲間づくりを重視

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

竹生島・びわ湖北部の 魅力発掘プロジェクト

竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会

①- 1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

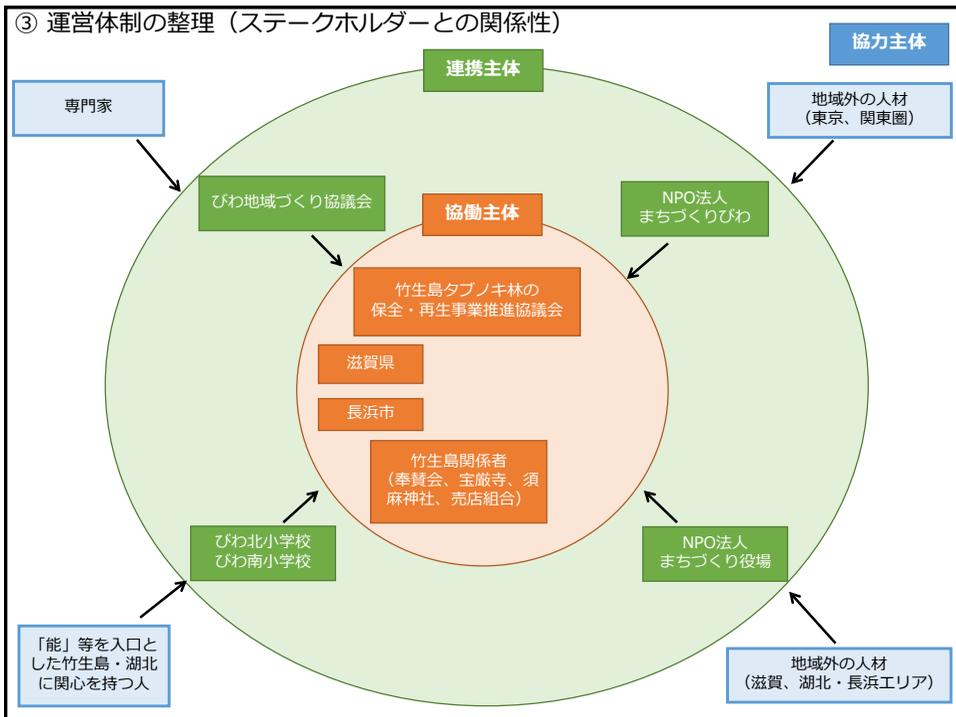
・滋賀県長浜市は、平成22年に長浜市に6町が編入合併したことで12万人を超える市（県内3番目）となったが、平成30年3月末現在では11万8千人と人口減少・少子高齢化の波が押し寄せている。採択団体である本協議会も高齢化が進んでおり、持続的に取り組みを進めていくためには次世代の担い手づくりが求められている。

・竹生島にカワウが大量に増え天然記念物である森林が枯れてしまったことから、平成22年に協議会を設立し、滋賀県と長浜市が関わって駆除やモニタリング、環境学習として植樹などに取り組んできた。補助金をベースとした取り組みであるため、経済的には持続可能ではない。

・長浜市内は、竹生島だけではなく黒壁スクエア、長浜城、余呉湖といった県内でも人気の観光資源があり、それらを活用した観光ツアーは地元業者が取り組み盛況である。しかし、「学び」「体験」「共感」という要素を含み、市域、県域の外部にある人の経済的な関与を創出するような地域資源を活かした魅力的なエクスカーションは少ない状況である。

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ① 事業として持続的に運営する資金・体制がない
- ② 事業を検討するプラットフォームがない。
- ③ 竹生島とその周辺の地域資源が教材化されていない



④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業として持続的に運営する資金・体制がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ここ滋賀」などを活用した長浜市の地域資源の魅力を伝えるワークショップを開催し、本事業に関心を持つ人材を発掘する。その中から、事業に関わる人 1～2名発掘する。 ・発掘した人材を対象とした支援体制が長浜市内の他部局と検討が進んでいる。
<p>【取組課題②】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業を検討するプラットフォームがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業参画の可能性のある団体等にヒアリングし、プラットフォーム会議への参画を促し、複数の団体が参加している。 ・事業を検討するプラットフォーム会議を開催し、参加団体の事業参画意欲を高める。
<p>【取組課題③】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・竹生島とその周辺の地域資源が教材化されていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域での団体等へヒアリングを行い、地域資源の発掘を行い、それらを使って地域の団体や外部有識者、外部人材などを巻き込んだワークショップを開催し、地域資源の関係性を浮き彫りにする。 ・外部有識者による検討会を開催し、地域へのヒアリング等で得た情報の補完、取りまとめに向けた検討を行う。(⑥-1の資料で仮に11月に入れました。) ・協議会運営の運用益を目指したエクスカージョンのパイロット版を実施し、アンケート集計などから課題やニーズなどを明らかにする。その結果を検証して、マニュアルを作成する。

⑤ 本事業計画の見通し

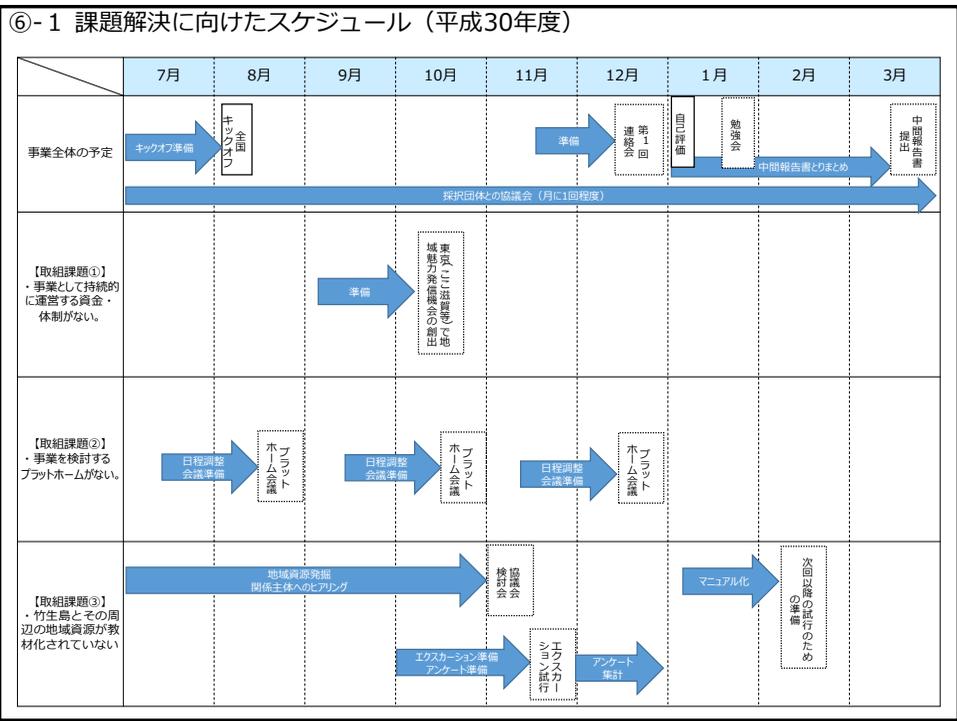
■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・事業として持続的に運営する資金・体制がない。	・事業に興味のある長浜市外の人材が何らかの形で関わっている。
【取組課題②】 ・事業を検討するプラットフォームがない。	・エクサカーションの実施等の事業全体の運営について検討するプラットフォームが構築できており、取組課題①の解決に向けて検討が始まっている。
【取組課題③】 ・竹生島とその周辺の地域資源が教材化されていない。	・地域資源の教材化を通じたエクサカーションのコースが2コース程度確立できている。 ・外部有識者による検討会を開催し、ヒアリング等で得た情報の補充を行い、教材化の精度が高まっている。

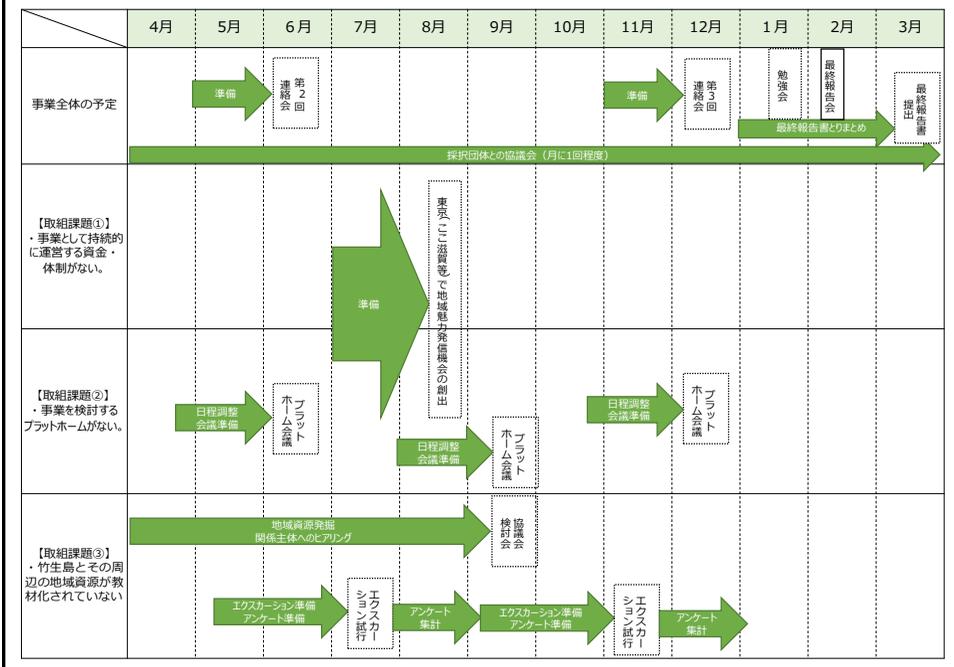
■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか

- ・長浜市民が、この取り組みを知ることで竹生島やその周辺の地域資源を訪れる機会が増え、地域への愛着が高まる。
- ・地域住民と外部人材で構成された新たな主体が協議会事務局の運営を行っている。
- ・協議会事務局と市内の観光事業者の連携が始まり、エクサカーションの多様化が進んでいる。
- ・竹生島とその周辺地域の教材化を活用したエクサカーションで観光客や修学旅行・体験学習旅行等の受け入れが始まっている。



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール (平成31年度)



⑦ その他補足事項

■ 事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・本協議会は補助金をベースとした取り組みであるため、経済的に持続可能でないことが課題である。竹生島の森林保全を持続させるために新たな資金源の確保が急務である。
- ・本協議会の構成団体の多くは高齢者であり、今後の活動を担っていく若者世代の参画が必要である。
- ・「学び」「体験」「共感」という要素を含んだ魅力的な竹生島周辺に関わるエクスカーションは少ない。地域資源を掘り起こしを地道に行っていくことが必要である。

■ その他、留意事項などがあればお書きください

・

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

竹生島・びわ湖北部の 魅力発掘プロジェクト

竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会

2019.4

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 本プロジェクトに興味のある滋賀県外の人材が移住し、リーダー役として地域のプラットフォーム運営に携わっている。
- クラウドファンディングの金額でプロジェクト運営が一部行えている。
- 事業全体を検討するプラットフォーム会議と個々の事業を検討するチームが市内外の多様な主体で構成されている。
- 協議会の財源となるエクスカージョンが5コース確立でき、一部は実施され、財源確保が行われている。
- エクスカージョンを構築する地域資源の発掘が長浜市内のすべてで完了している。
- 地域の多様な課題に取り組む主体と協調・連携する活動が計画されている。*
- SDGsを活用したつながりにより、他地域との交流が計画されている。*

2019年度末
地域の状態

- 本プロジェクトに興味のある滋賀県外の人材が何らかの形で地域の取り組みに関わっている。
- 長浜市に興味がある滋賀県外の人材との交流によりクラウドファンディングの金額が昨年より増加している。
- 事業全体を検討するプラットフォーム会議が構築できている。
- エクスカージョンやクラウドファンディングといった個々の事業を検討するチームの素地ができ始めており、一部では検討が行われている。
- 協議会の財源となるエクスカージョンが2コース確立できている。
- エクスカージョンを構築する地域資源の発掘が竹生島がある旧びわ町で完了し、旧びわ町以外の地域資源の発掘が行われている。
- 多様な課題に取り組む主体が集まる場（市内）へ参加し、地域内での認知が進む。*
- SDGsを活用した発信について、地域で検討・協議している。*

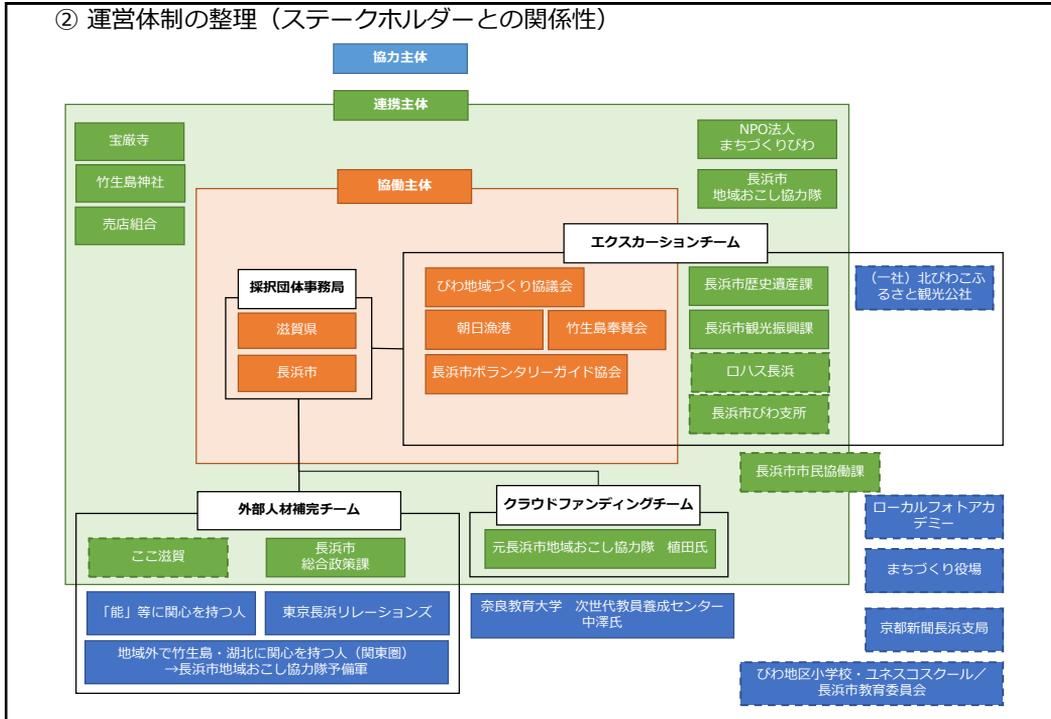


2018年度末
地域の状態

- 長浜市に興味がある首都圏の人材と交流ができ、事業推進のアドバイスがいただける関係性ができている。
- エクスカージョンを検討するプラットフォーム会議を多様な主体で開催できている。
- 協議会の財源となるエクスカージョンが1コース確立できている。
- エクスカージョンを構築する地域資源の発掘が竹生島がある旧びわ町で行われている。
- エクスカージョンを検討するプラットフォーム会議を多様な主体で開催できている。



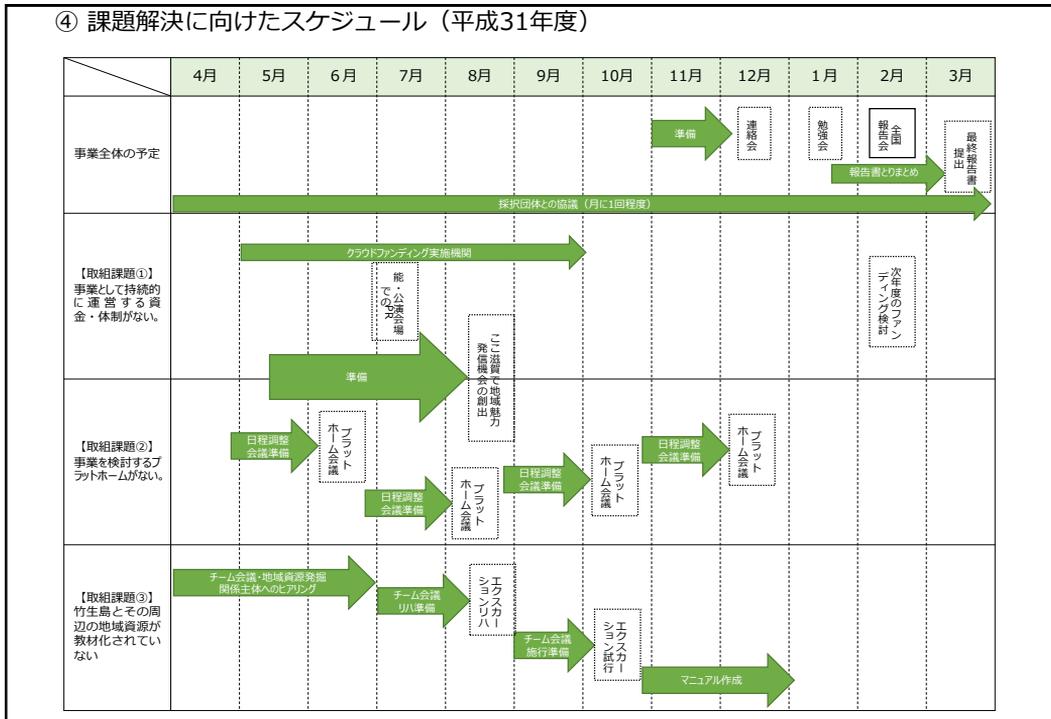
赤：人材発掘
橙：クラウドファンディング
青：プラットフォーム
緑：エクスカージョン



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・事業として持続的に運営する資金・体制がない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「ここ滋賀」などを活用した長浜市の地域資源の魅力を伝えるワークショップを開催し、本事業に関心を持つ人材を発掘する。その中から、事業に関われる人1～2名発掘する。 →発掘した人材を対象とした支援体制について長浜市内の他部局と検討が進んでいる。 能「竹生島」等に興味関心がある層に向けたPR活動を行い、クラウドファンディングの支援金額向上に努める。 多様な課題に取り組む主体が集まる場（市内）へ参加し、地域内での取組の認知が進む。
<p>【取組課題②】 ・事業を検討するプラットフォームがない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 事業参画の可能性がある団体等にヒアリングし、プラットフォーム会議及び事業推進チームへの参画を促す。 事業全体を検討するプラットフォーム会議を開催し、参加団体の事業参画意欲を高める。 個々の事業を検討・実行する事業推進チームの会議の場を作り、参加者一人一人がプロジェクトに貢献している自覚を芽生えさせる。
<p>【取組課題③】 ・竹生島とその周辺の地域資源が教材化されていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地域に詳しい団体へヒアリングを行い、地域資源を発掘する。それらを使って地域の団体や外部有識者、外部人材などを巻き込んだワークショップを開催し、地域資源の関係性を浮き彫りにする。 協議会運営の運用益を目指したエクスカージョンのパイロット版を実施し、アンケート集計などから課題やコースなどを明らかにする。その結果を検証して、マニュアルを作成する。 教材化におけるSDGsの活用について、関係者が検討・協議する。

④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）



⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
③ 2019年度末までの到達目標 ＜取組課題①＞	・本事業では、持続的な事業運営を図るためにふるさとクラウドファンディングFAAVOを活用した資金確保に取り組んでいます。昨年10月に国立能楽堂にて能「竹生島」の観覧者を対象としたPRを試行的に行いました。クラウドファンディングやカワウにより竹生島が危機的な状況になっていることについてほとんど認知されていないことが明らかになりました。今年度はクラウドファンディング期間中にPRを行い、昨年度以上の資金確保に努めます。 ・なお、一部の能楽愛好家の事業に対する関心は高いと考えられるため、竹生島だけではなく、琵琶湖周辺を舞台とする能の演目とも関連づける。 ・地域の社会課題との多様な課題に取り組む主体が集まる場（市内）への参加を加えました。
③ 2019年度末までの到達目標 ＜取組課題③＞	・地域資源の教材化に際して、事業を通じたSDGs達成に向けた貢献について、関係者が検討することを加えた。 ・たとえば、淡水域・陸域生態系の保全（ゴール15）のための持続的取組について、同様の課題を持つ地域との交流を視野に入れた発信について検討する。
④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度） ＜事業全体の予定＞	・仕様書に基づき、連絡会の回数を修正（2回→1回）にしました。
④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度） ＜取組課題①＞	・「能・公演会場でのPR」を追加しました。（夏期） ・次年度のファンディングについてクラウドファンディングチームの検討の場を追加しました。（2月）
④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度） ＜取組課題②＞	・仕様書に基づき、プラットフォーム会議の回数を修正（3回→4回）にしました。
④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度） ＜取組課題③＞	・仕様書に基づき、エクスカッションのスケジュールを変更しました。

⑥ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・本協議会は補助金をベースとした取り組みであるため、経済的に持続可能でないことが課題である。竹生島の森林保全を持続させるために新たな資金源の確保が急務である。
- ・本協議会の構成団体の多くは高齢者であり、今後の活動を担っていく若者世代の参画が必要である。
- ・「学び」「体験」「共感」という要素を含んだ魅力的な竹生島周辺に関わるエクスカーションは少ない。地域資源の掘り起こしを地道に行っていくことが必要である。
- ・2019年度、本協議会の事務局員（長浜市）が人事異動により担当者が変わった。地域との繋がりやこれまでの事業の取組状況も踏まえると取組が順調に進めない恐れがある。
- ・湖北地域での多様な課題解決に取り組む主体と交流する場への参加など、市が取り組む市民協働推進施策との連動性を高めるようながす。
- ・地域おこし協力隊を含む多様な主体にさまざまな役割で事業に関わること、教材化において市内外の学校関係者が関わる場をつくることなど、多様な関わりの機会の創出に留意する。

■その他、留意事項などがあればお書きください

- ・3年目（事業期間終了以降）のことも想定しつつ、資金・体制づくりを意識した取組を行う。

①何と何の同時解決を目指したか

採択団体名：公益財団法人 水島地域環境再生財団
採択事業名：みずしま滞在型環境学習で
新たな“まちのにぎわい”を創ろう

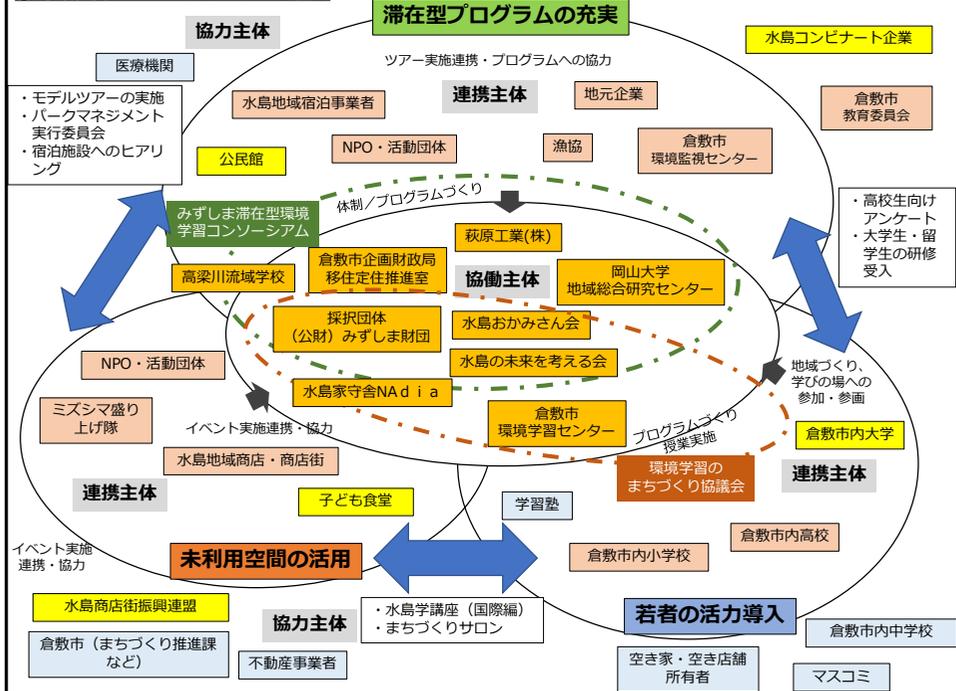
①「水島の学び」体験の機会 が限られる（環境）

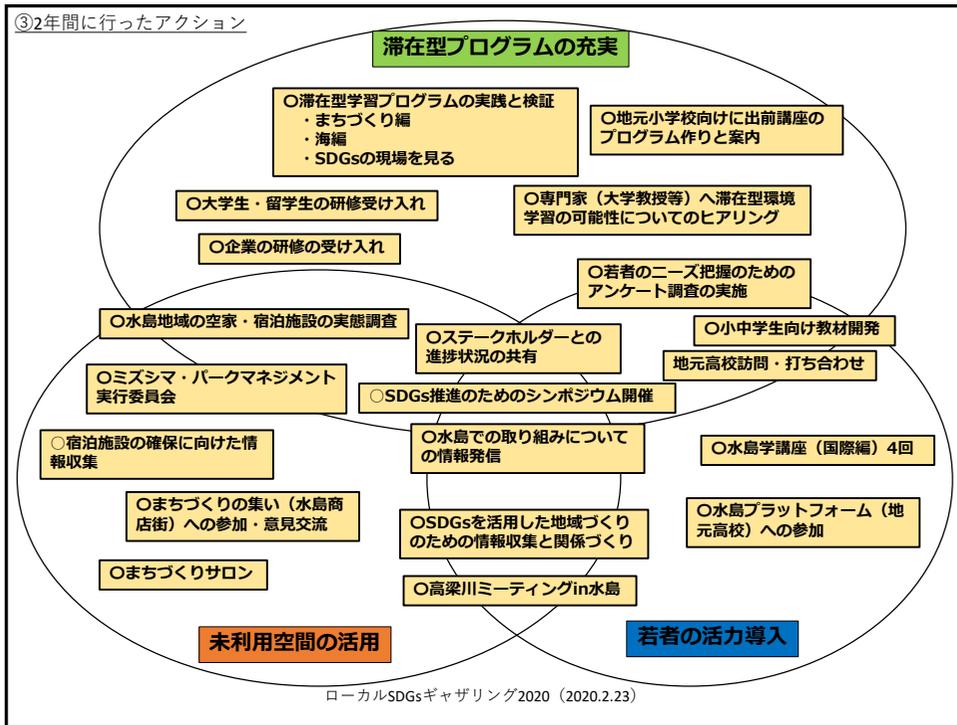
②商店街など地域活力が低下 している（経済）

③若者の地域定着率が上がら ない（社会）

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

②同時解決のステークホルダーは誰か





④2年間を通じたアウトプットや学び

- SDGsを現場で学ぶモデルツアーを実践できた。**
→環境学習を“地域の生活丸ごと”としてとらえ、学ぶことのできる資源の掘り起こしと実践ができた。
- 主体的にまちづくりに動く市民が増えた。**
→商店街の未利用空間の活用による憩いの場づくりを考えていた地元商店街関係者や地域の活動団体を大学をつなげて、未利用空間を活用したイベントを学びのプログラムとして実践することで、地域の価値を再認識し、取り組みを継続、発展させることにつながった。
- 地元高校と地域との関わりが深まった。**
→高校生が地域で学ぶことを通じて、課題を自分事としてとらえ、課題解決を考える中で、地域への愛着を育むことにつながった。高校が地域と連携した取り組みの意義を認識し、地域との連携を深め、継続していく仕組みを立ち上げた。
- 多世代間の交流が進んだ。**
→水島学講座（国際編）やモデルツアーの実践により、高校生や大学生と地域の大人といった多様な世代が交流し、若者が刺激を受ける機会が増えた。そのことで、地域の人も、学びが地域にもたらす効果を実感し、若者の学びを支える仕組みづくりが進んだ。

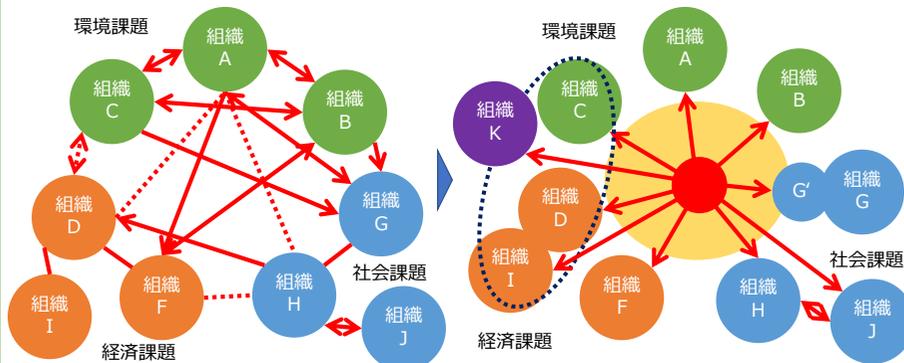
ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

3年後の展開	つながりたい人や機能
<p>①水島での環境学習は、“地域の生活丸ごと”としてとらえ、多様な主体との交流や芸術、食などの経験を通じて、持続可能な社会づくりに貢献する人材を育成できる「滞在して環境学習に行く価値のある地域」としてブランディングができています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水島コンビナート企業 ・地元中小企業 ・教育、食、観光などに関する大学等の専門家 ・農・漁業者
<p>②高梁川流域が連携して、国内外から訪れる人を受け入れる体制を整備することで、流域が活性化している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国内外の大学 ・高梁川流域の活動団体 ・観光や学びで流域を訪れる人
<p>③商店街の未利用空間が活用され、人々の憩いの空間がつくられることで、地域の活性化につながっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地元宿泊施設関係者 ・不動産事業者 ・空家、空き店舗等の家主
<p>④地域に暮らす若者が、地域の活動に関わることで、地域への愛着を育み、将来地元で暮らし、働きたいと考える若者が増えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地元小・中・高・大学等

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

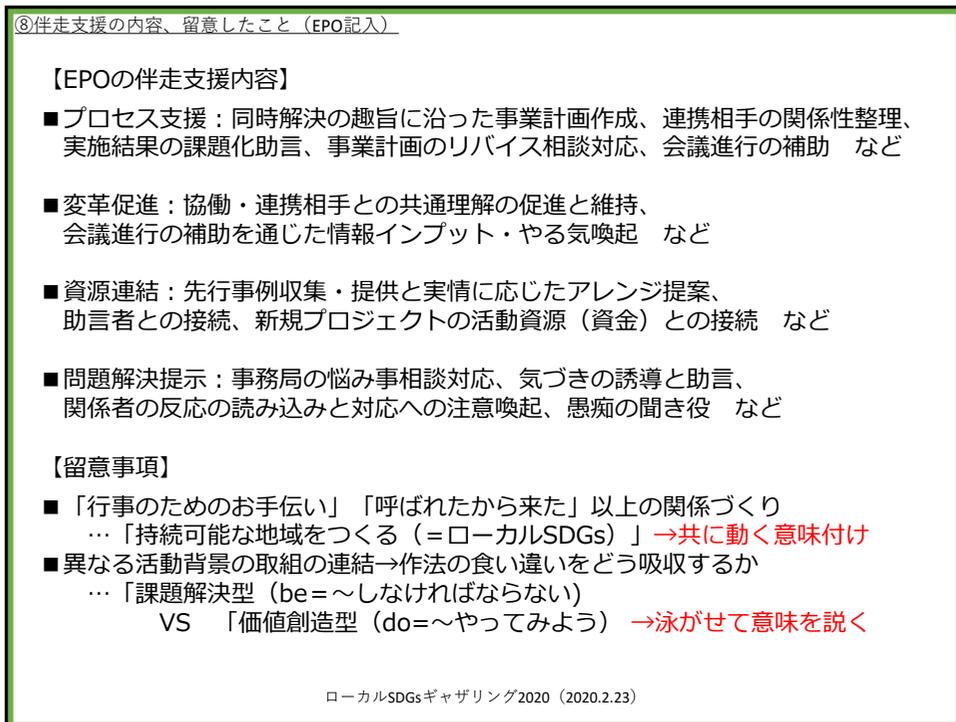
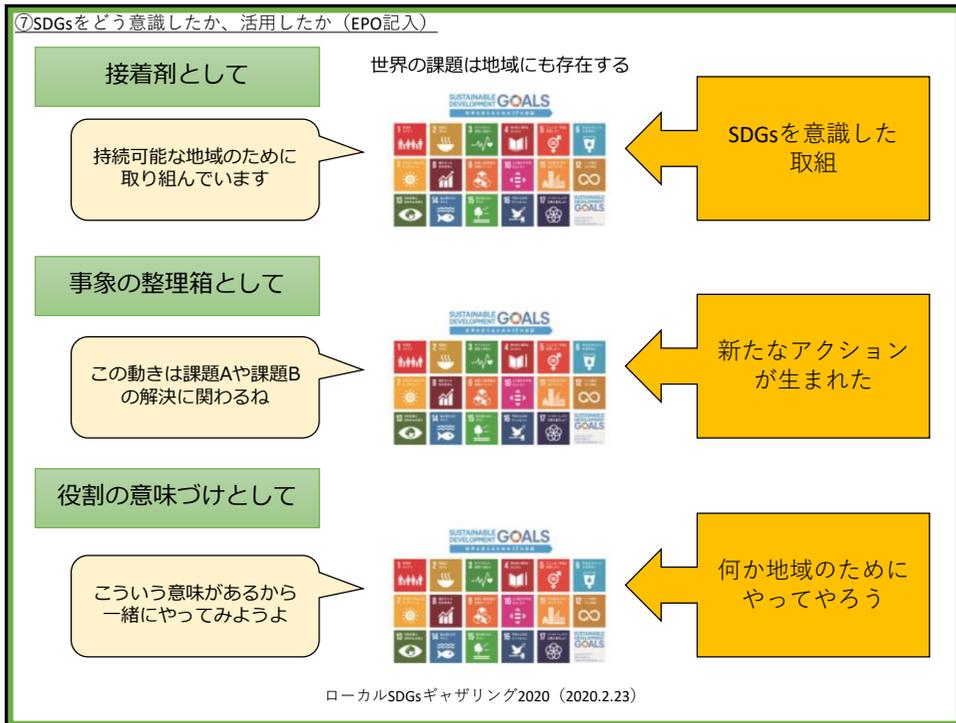
⑥同時解決のプロセスの特徴 (EPO記入欄)



【今年度の主な実施内容】

- ・滞在型環境学習モデルツアー企画、実施 (8月、11月)
- ・みずしま滞在型環境学習フォーラム (11月、地域イベントと同時開催)
 - ・地域活性化 (未利用地再生) に向けたワークショップ (8月まで)
 - ・商店街や地域住民との対話: まちづくりサロン (2ヶ月に1回程度)
 - ・小学生向け環境学習出前講座
 - ・高校生アンケート
- ・環境学習ツアー、まちづくり行事への高校生の主体的参加、活動報告機会など

ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)



環境省 持続可能な開発目標（SDGs）を活用した地域の環境課題と社会課題を
同時解決するための民間活動支援事業＜2カ年事業計画＞

みずしま滞在型環境学習で新たな “まちのにぎわい”を創ろう

公益財団法人 水島地域環境再生財団

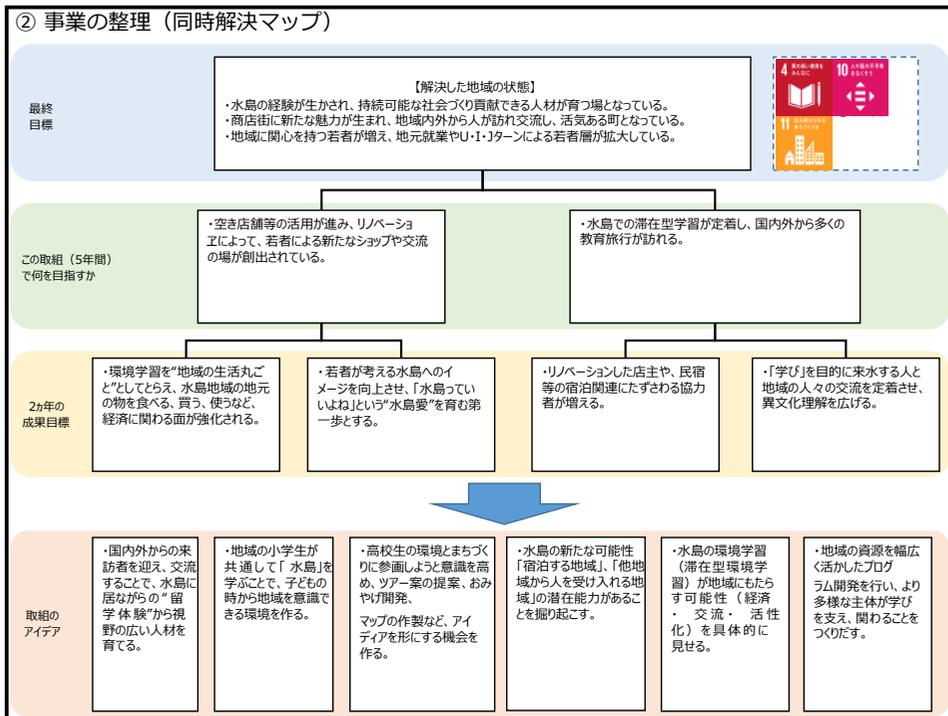
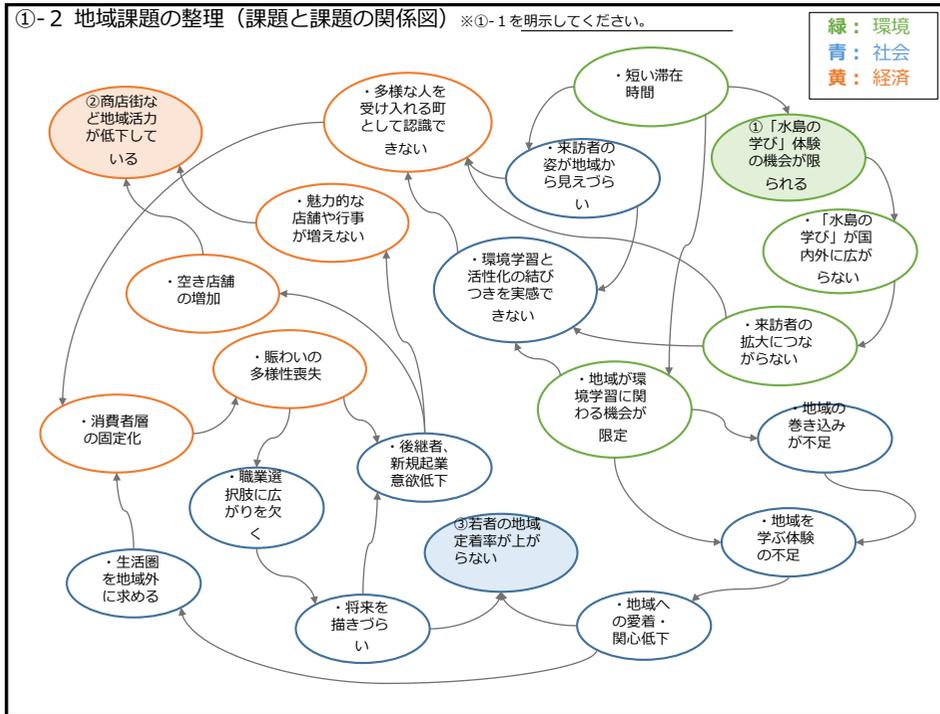
①- 1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

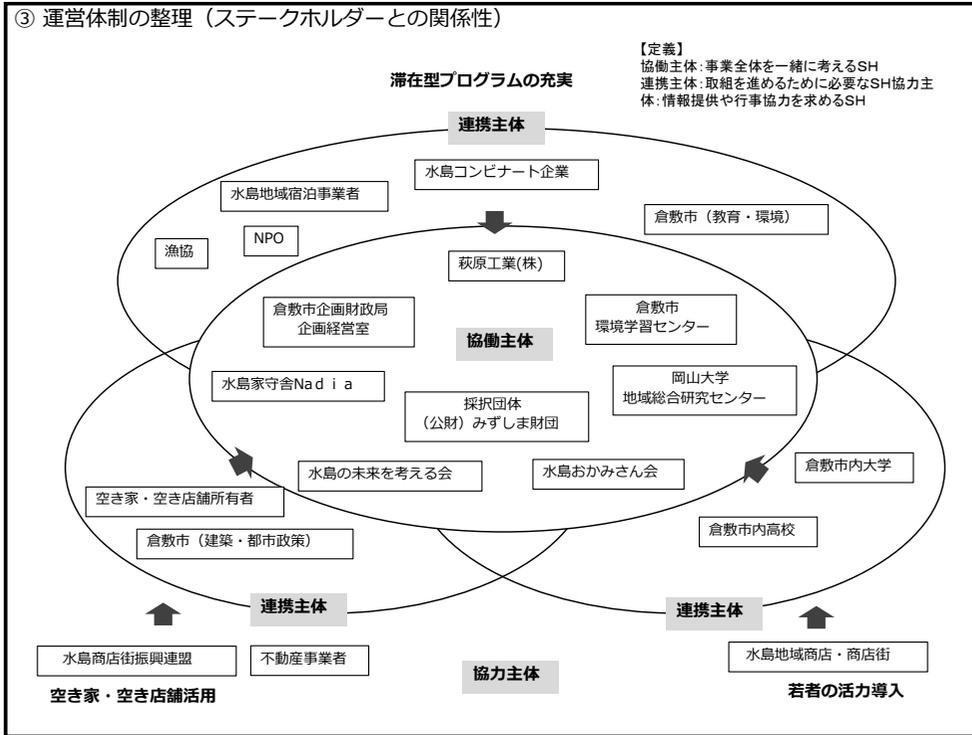
- ・国内有数のコンビナートを抱える岡山県倉敷市水島地域では、地域開発や公害経験を基に、環境をはじめ多面的な視点を持つ人材育成の場として「環境学習のまちづくり」を展開している。これまでも大学授業の一環や企業等の研修でエコツアーを受け入れてきた。その中で外国からの留学生や研修生にとって、水島の環境問題や克服の経験は重要な学びとして受け止められており、体験の充実が求められている。
- ・エコツアーで訪問者が増加しているものの、訪問による経済効果や地域との交流による地域の学びにつながっていない。滞在期間が短く、一過性の行事に止まっているため、地域の関わりが希薄で、広く住民や事業者に取り組みが浸透していない。
- ・倉敷市の調査（平成26年、書類上調査）では、人口48万人に対し約7,700戸の空き家があることが確認された。水島地域においても空き家が目立っており、防災、衛生、景観等への影響が懸念されている。商店街もシャッター店舗が目立ち、地域の活力低下が顕在化している。
- ・中高校生の地域離れが進み、活力低下の一因になっているのではないかと考えられている。

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ①「水島の学び」体験の機会が限られる。
- ②商店街など地域活力が低下している。
- ③若者の地域定着率が上がらない。



③ 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）



④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 「水島の学び」体験の機会が限られる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源を活かしたプログラム開発を行い、多様な主体が学びを支え、関わることをつくりだす。自分とは違う他者を理解しようとする意識が芽生えるまちづくりの一步となる。 ・日帰りできえず、滞在して学ぶことで、工場に隣接する地域で暮らす人の視点、工場へ働きで働く人の視点を得ることができ、より生活に根差した多面的な学びとなる。 ・地域の小学生が共通して学ぶプログラムリストができて、学校へ提供できる。
<p>【取組課題②】 商店街など地域活力が低下している</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・企業向けの客層が中心だった既存宿泊施設が、新規の客層の可能性をさくることができる。 ・水島の新たな可能性「宿泊する地域」、「他地域から人を受け入れる地域」の潜在能力があることを発見できる。 ・商店街の空家、空き店舗調査の結果をまとめる。調査結果のまとめをもって、水島商振連、地元団体、宿泊施設関係者に説明と協力の呼びかけを行い、関係者を増やすことを目指す。
<p>【取組課題③】 若者の地域定着率が上がらない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「学び」を目的に来水する若者と地域の中高生の交流の機会を水島学講座国際編として、3回実施する。 ・そのことを通じて、自らが暮らす地域で、異文化交流ができることや、水島地域特有の国際的な学びが「おもしろい」、「また行ってみたい」と、地元中高生の関心を高めることにつながる。 ・国際関係学などに関心ある中高生全員が、海外留学はできない（費用が高額で、経済格差がある）。水島で国際体験の一部分ができることで、「水島留学」の可能性をさく。若者が考える水島へのイメージを向上させ、「水島っていいよね」という「水島愛」を育む第一歩とする。

⑤ 本事業計画の見通し

■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 「水島の学び」体験 の機会に限られる	<ul style="list-style-type: none"> ・初年度に整理した学びのプログラムに基づき、環境学習を“地域の生活丸ごと”としてとらえる滞在型のツアーや大学の研修受け入れを重ねる。その中で水島の公害経験に基づき、様々な立場の人と交流を深め、多面的な思考や、持続可能な社会の在り方を学ぶことができる地域という認識が広がっている。 ・小学校向け出前授業のプログラムが整理されることで、小学校高学年の児童が、社会の授業で持続可能な社会について学ぶ機会ができています。
【取組課題②】 商店街など地域活力 が低下している	<ul style="list-style-type: none"> ・資源を活用した商品（おみやげ）開発に向けた、専門家による講座や地域資源の現状調査を行う水島学講座（商品開発編）を高校生向けに開催する。開発した商品を、地域のイベントで試験的に販売するなど、若者がまちづくりに関わる仕組みを作る。 ・滞在型環境学習の実践や商品開発を通じて、リノベーションした店主や、民宿等の宿泊関連に携わる協力者が増え、より地域全体としての魅力づくりの議論が進んでいる。
【取組課題③】 若者の地域定着率が 上がらない	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の若者が、「学び」を目的に来水する人との交流や異文化理解についての経験を積み、地元の資源を活かした商品開発に関わることで、地域への関心が高まっている。 ・高校生対象に「水島地域の環境・生活」アンケート調査を実施する。20年前の調査と比較を行い、高校生の地域への想いの変化を探るとともに、将来（20年後）の地域像を探る手掛かりが得られている。

■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<ul style="list-style-type: none"> ・水島での環境学習は、“地域の生活丸ごと”としてとらえ、多様な主体との交流や、地元の物を食べる、買う、使うといった経験を通じて、多面的で総合的なもの見方・価値観や、課題を発見し、解決のための方法を自分で考える力を持った、持続可能な社会づくりに貢献する人材を育成することの出来る、「滞り滞りして環境学習を学びに行く価値がある地域」というブランディングができています。（ゴール4） ・受入の基盤整備を議論する協働主体の掘り起こしを進め、空き家などを活用して、若者の滞在型の学びを受け入れる体制を整備することで他地域から人が集まる地域となり、異文化交流を通じて、地域が活性化することが期待できる。（ゴール10、11） ・未利用だった空き家が活用されることで、安心して暮らせる地域づくりにつながる（ゴール11）。 ・地域に暮らす若者が、地域づくりや地域活性化に関わる機会が増えることで、地域への愛着をはくくみ、将来地元で暮らし、働きたいと考える若者が増えている。（ゴール11）

⑥-1 課題解決に向けたスケジュール（平成30年度）

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定	第1回連絡会	第1回全県シンポジウム の進捗状況の共有 ステークホルダーとの連携		ステークホルダーとの進捗状況の共有		ステークホルダーとの進捗状況の共有	自己評価 第2回連絡会		ステークホルダーとの進捗状況の共有
【取組課題①】 「水島の学び」体験の機会に限られる	7/23プログラム検討委員会発足 ・大学生向け研修業検討 ・小学生向け出前授業検討	8/8～10モデルツアー実施（商店街・まちづくり）	高梁川流域の大学へモデルツアー報告と次回案内送付、募集スタート	第2回プログラム検討委員会 →参加集約	11/24～25第2回モデルツアー実施（海）			第3回プログラム検討委員会	プログラム集印刷・発送 水島地域内小学校に配布
【取組課題②】 商店街など地域活力が低下している	調査の設計 ・宿泊施設一覧作成 ・ヒアリング項目検討	→実施 ・既存宿泊施設へのヒアリング				シンポジウム	空家・空き店舗調査の結果を関係者に説明		
			空家店舗空き家調査	→とりまとめ					
【取組課題③】 若者の地域定着率が上がらない		8/16 第2回水島学講座開催（環境・エネルギー） /高校生と大学生・留学生の交流		空家家リノベーション事例の把握 →空家家リノベーション事例ヒアリング		第3回水島学講座開催（イノベーション要素と文化） 高校生と大学生・留学生の交流		高校生対象「水島地域の環境・生活調査」の設計	市内高校への説明

⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定		水島エコツアー （水島地区の自然環境を 体験する）	第3回 連絡会		水島エコツアー （水島地区の自然環境を 体験する）		水島エコツアー （水島地区の自然環境を 体験する）	第4回 連絡会		水島エコツアー （水島地区の自然環境を 体験する）	最終 報告会	
【取組課題①】 「水島の学び」体 験の機会が限られ る	小学校に出 前講座の活 用を働きか ける 大学に研修 の働きかけ	小学校出前 講座の受け 入れ（適 宜）	水島エコツ ア－実施 （まちづく り編）	水島小学 校 出前 授業	水島エコツ ア－実施 （コンピ ナート企業 編）			水島エコツ ア－実施 （海編）	水島小学 校 出前 授業	シンポジ ウム		
【取組課題②】 商店街など地域活 力が低下している	水島エコツ ア－や研修 で地域の宿 泊施設を活 用	水島学講座 （商品開発 編）①	水島学講座 （商品開発 編）②	水島学講座 （商品開発 編）③	商品試作		水島朝市で お披露目 （以降、毎 回販売）					
【取組課題③】 若者の地域定着率 が上がらない	高校生対象 「水島地域 の環境・生 活調査」の 発送	第4回 水島学講座 （国際編）			第5回 水島学講座 （国際編）				第6回 水島学講座 （国際編）	シンポジ ウムで報告		

⑦ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・行政（倉敷市）と政策協働についての文書等による確認ができておらず、担当者の異動等により、関わり方が変わってくる可能性がある。倉敷市の事業の中に、本取り組みを位置づけることで、継続的にかかわる体制を作りたい。
- ・本事業を経済的に持続可能なものにするためにも、滞在型の学びの受け入れ費用だけでなく、水島コンビナート企業をはじめ、地元企業や地元団体などから、協賛金などの形で財政的にも支援を得られる仕組みを作る必要がある。
- ・商店街の空き店舗の活用については、その建築の構造上（1階が店舗、2階が住居など）から、賃貸がしにくい課題があるが、家主に負担をかけない活用方法を考えるなどして、協力者を増やす。

■その他、留意事項などがあればお書きください

- ・別事業との運動と切り分けをきちんと行う。
- ・各主体のメリットと、責任範囲をきっちり整理しながら、取り組む。

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

みずしま滞在型環境学習で 新たな“まちのにぎわい”を創ろう

公益財団法人 水島地域環境再生財団

2019.5.10

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

- 水島での環境学習は、“地域の生活丸ごと”としてとらえ、多様な主体との交流や、地元のを食べる、買う、使うといった経験を通じて、多面的で総合的なもの見方・価値観や、課題を発見し、解決のための方法を自分で考える力を持った、持続可能な社会づくりに貢献する人材を育成することできる、「滞在して環境学習を学びに行く価値がある地域」というブランディングができていく。
- 受入の基盤整備を議論する協働主体の掘り起こしを進め、活用されていない土地や建物などを活用して、若者の滞在型の学びの受け入れ体制を整備することで他地域から人が集まる地域となり、異文化交流を通じて、地域が活性化している。流域全体に若者が学びに訪れ、流域で活動する団体が活性化している。
- 地域に暮らす若者が、地域づくりや地域活性化に関わる機会が増えることで、地域への愛着をはぐくみ、将来地元で暮らし、働きたいと考える若者が増えている。
- 水島独自の持続可能な街づくりが進んでおり、その中心に地元の若者たちが居る。

2019年度末
地域の状態

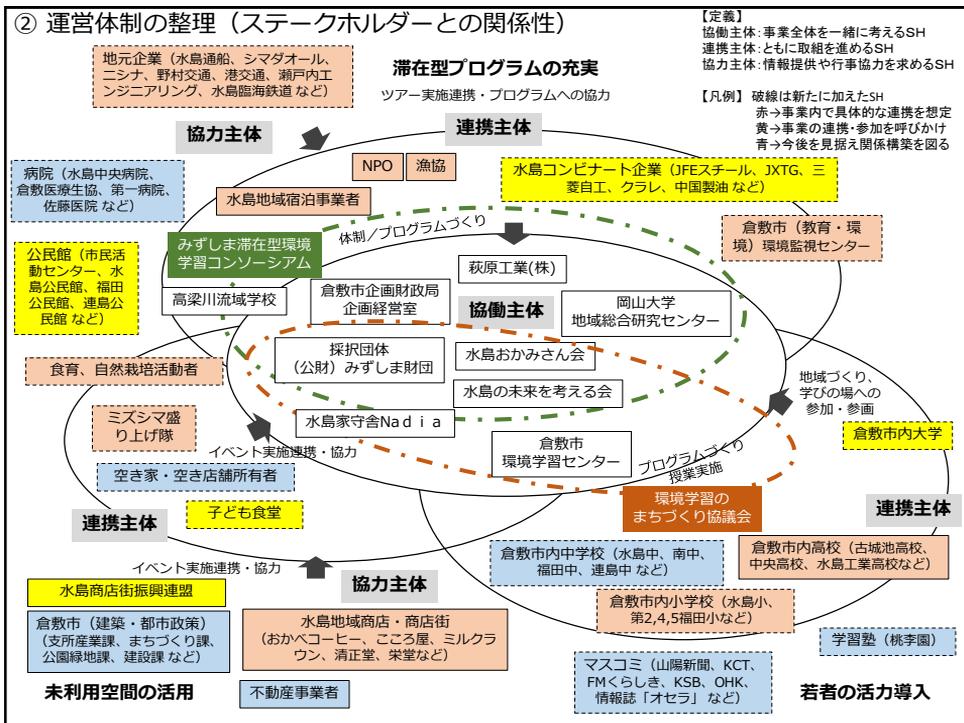
- 滞在型モデルプログラム及び小学校向け出前教室の実績を積み重ねることで、SDGsに向けた学びのできる地域としての認識が広まっている。
- 本事業に関わるステークホルダーが抱える課題について議論する場を提供することで、2022年度末の将来像とその実現のためのアプローチについて共通認識となっている。
- 地域づくりの議論が進み、目に見える形で拠点整備が進むことにより、参加した地域住民や若者に地域づくりの担い手としての意識が醸成されている。

目指す未来
からの逆算

2018年度末
地域の状態

- モデルツアープログラム（2回）の実施を通じて検証を行い、滞在型の学びが、「体験の機会」や、「地域の巻き込み」に有効であることを確認できた。
- 商店街関係者に、水島地域が多様な人を受け入れることのできる地域と考えてもらったための下地を作ることができた。
- 水島地域内の宿泊施設のリストを作成した。拠点の一つとなる宿泊施設とつながり、実際にモデルツアーで活用することで、学びによる新たな客層の可能性を感じてもらったことができた。
- 水島地域唯一の高校である倉敷古城池高校生の地域への関心を高めることができた。

目指す未来
からの逆算



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・「水島の学び」体験の機会が限られる	<ul style="list-style-type: none"> ・初年度に整理した学びのプログラムに基づき、環境学習を“地域の生活丸ごと”としてとらえる滞在型のツアーや大学の研修受け入れを重ねる。その中で水島の公害経験に基づき、様々な立場の人と交流を深め、議論と実践を通じて、多面的な思考や、持続可能な社会の在り方を学ぶことができる地域という認識が広がっている。 ・小学校向け出前授業のプログラムが整理されることで、地域の小学校高学年の児童が、社会の授業で持続可能な社会について学ぶ機会ができています。 ・地域の小・中・高校での出前授業を地域の人が講師となって実施することで、子どもたちや学校の先生が、地域の人の関係性を作ることができ、地域づくりに参加するための門戸を開くことができる。
【取組課題②】 ・商店街など地域活力が低下している	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の活用されていない土地や建物の活用を目指して、専門家による講座や地域資源の現状調査、具体的な活用法について考えるワークショップを行う水島学講座（空間整備編）を地域住民や大学生、高校生向けに開催する。ワークショップの内容を具現化する「倉敷版パーキングディ」を開催することで、若者が関わることによる地域の活性化を住民が実感することができる。 ・地域づくりをテーマに、市民・企業・行政など様々な主体が集まり、ざっくばらんに議論をする「地域づくりサロン（仮）」が定着することで、地域と企業や、地域住民同士が課題を共有し、連携を深めることができる。 ・滞在型環境学習の実践や活用されていない土地や建物の整備等を通じて、リノベーションした店主や、民宿等の宿泊関連に携わる協力者が増え、より地域全体としての魅力づくりの議論が進んでいる。
【取組課題③】 ・若者の地域定着率が上がらない	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の公共空間を活用して、人々が憩える空間を創出することを旨とした水島学講座及び、「倉敷版パーキングディ」の実施を通じて、若者が実践的に地域の課題を知るとともに、社会貢献の成果を実感することで、地域への愛着を育むことにつながる。 ・地域の若者が、「学び」を目的に来水する人との交流や異文化理解についての経験を積み、地域の公共空間を活かしたまちづくりに関わることで、地域への関心が高まっている。 ・地域内の高校に通う高校生対象にアンケート調査を実施する。調査結果をもとに、若者へのアプローチ方法等を探る手掛かりが得られている。

④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定		第3回連絡会	ステークホルダーとの連携強化の具現化 （関係機関との共有）	ステークホルダーとの連携強化の具現化 （関係機関との共有）		ステークホルダーとの連携強化の具現化 （関係機関との共有）		ステークホルダーとの連携強化の具現化 （関係機関との共有）		第4回連絡会	全国報告会	報告書の作成
【取組課題①】 「水島の学び」体験の機会に限られる		小学校に出前講座の活用を働きかける 大学に研修の働きかけ 5/29ライデン大学受け入れ	小学校出前講座の受け入れ（適宜） 大学の研修受け入れ（適宜）	水島小学校 出前授業	水島エコツアー実施（まちづくり編）			水島エコツアー実施（海編）	水島小学校 出前授業			
【取組課題②】 商店街など地域活力が低下している	水島エコツアーや研修で地域の宿泊施設を活用		「地域づくりサロン（仮）」①	「地域づくりサロン（仮）」②	「地域づくりサロン（仮）」③	「地域づくりサロン（仮）」④	「地域づくりサロン（仮）」⑤	11/8シンポジウム				
【取組課題③】 若者の地域定着率が上がらない		5/11水島学講座①（ミーティング）	高校生向けアンケートの設計	水島学講座②（ミーティング） 高校生対象「水島地域の環境・生活調査」の発送	8/29-30水島学講座③（まちづくりWS）	9/27水島学講座④（まとめ）	分析・とりまとめ	シンポジウムで報告				

⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
・取り組みアイデアの変更（勉強会の開催）	・昨年度中間評価での「団体の取り組み意識が地域より先行しているのでは？」といった意見があった。また、「世界一の環境学習のまち・みずしま」という共通の将来像はあるが、具体的なビジョンや、それを実現するためのステップについて、地域のステークホルダー全てと同じテーブルに着けていない。そこで、地域への問題意識や将来像を、ステークホルダーと共有することを目的に、自由に意見交換できる場（サロン形式）を開催することとした。
・取組課題へのアプローチの見直し（取組課題②）	・当初、空き家、空き店舗を活用して、滞在型の学びを受け入れる体制づくりを目指していたが、地域の関係者へのヒアリングなどから、その建築の構造上（1階が店舗、2階が住居など）、賃貸がしにくいなどの課題があることが明らかとなってきた。一方、既存の宿泊施設へのヒアリング等を通じ、研修で活用できる宿泊や集会所との関係ができた。また、取組を進める中で、商店街に位置する未利用地（スーパー跡地）の活用についての相談が入った。これらを勘案し、空き家、空き店舗については、引き続き情報収集により可能性を探りつつも、未利用地を使った商店街等との協働による学びと賑わいづくりを試行することとした。
・取り組みアイデアの変更（取組課題②③）	・2カ年事業計画では、高校生等と商店街関係者による地域資源を活かした商品開発を考えていたが、上記の事業見直しを踏まえ、またより広い関係者が関わる中で地域を巻き込むことが求められていることを勘案し、未利用地の活用を考えるワークショップ（高校生、商店街や地域住民、エコツアー参加者等を対象とする）にテーマ変更した。
・運営体制の整理（ステークホルダーの拡大）	・昨年度、活動を進めていく中で、当初想定をしていた以外に、様々な分野のステークホルダー（公民館、地元小・中・高校、地域で活動する団体など）が見えてきた。今後、活動を進めていくうえで、これらの分野にも連携を広げていくことが重要であると考え、アプローチするステークホルダーを追加することとした。

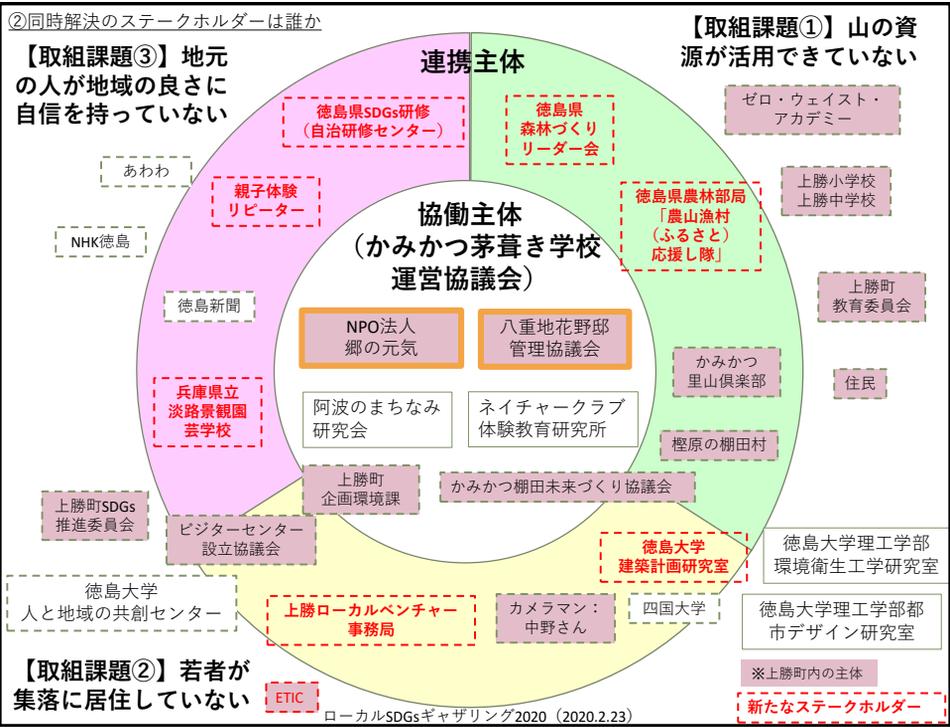
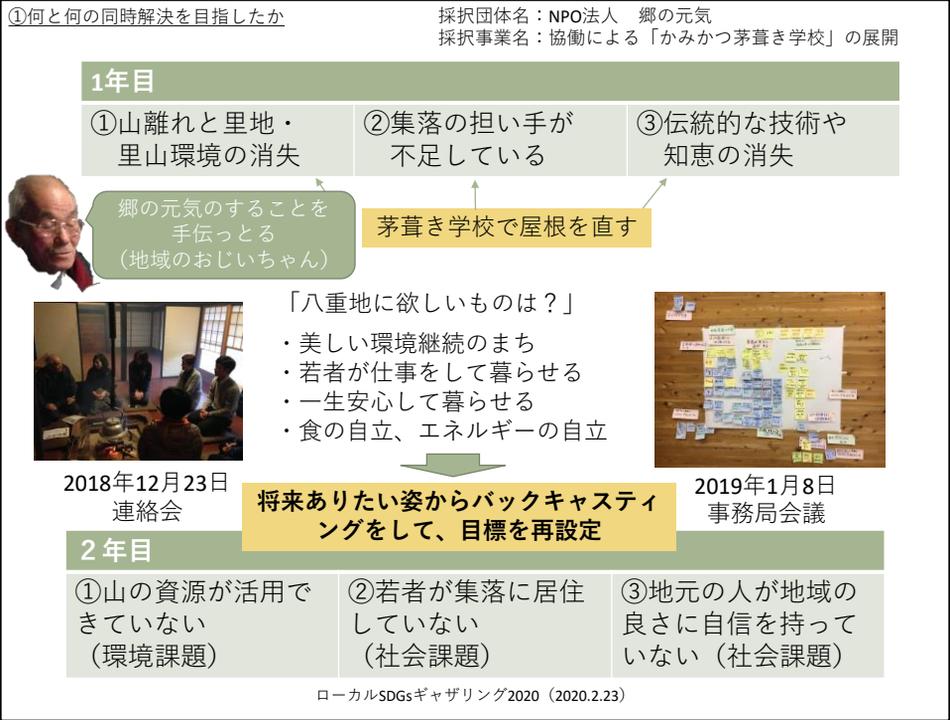
⑥ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- 行政（倉敷市）と政策協働についての文書等による確認ができておらず、担当者の異動等により、関わり方が変わってくる可能性がある。また、学校関係者も、本事業に積極的にかかわっていた先生が異動になると、一から関係性を構築しなおさなければならない可能性がある。倉敷市や学校の事業の中に、本取り組みを位置づけることで、継続的にかかわる体制を構築できるよう働きかけたい。
- 本事業を経済的に持続可能なものにするには、重要な課題である。そのためには、滞在型の学びの受け入れ費用に加えて、水島コンビナート企業をはじめ、地元企業や地元団体などから、協賛金などの形で財政的にも支援を得られる仕組みを作る必要があると考えられる。水島地域では、平成28年度に倉敷市や地元経済界、商店街や地域の活動団体などが、協働で学びをテーマに地域づくりに取り組むことを目的とした「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」を立ち上げており、本事業の重要なステークホルダーとなっている。今後、財政面での持続可能性の確立を目指して、コンソーシアムと一緒に仕組みづくりに取り組んでいきたい。

■その他、留意事項などがあればお書きください

- 別事業との連動と切り分けをきちんと行う。
- 各主体のメリットと、責任範囲をきっちり整理しながら、取り組む。
- 水島地域では、本事業の他にも地域の活性化や、若者のまちづくりへの参画を目的に、賑わいの場・集いの場の創出他のための地元大学と連携した公園整備プロジェクトや、賑わいづくりのための「臨鉄ガーデン」、「イス1 G P」、「夕暮れガーデン」といった様々な取組が行われている。これらの取り組みと連携をとってステークホルダーを拡大し、横のつながり、関係性をつくっていくことで、目指す将来像を実現していきたい。



⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

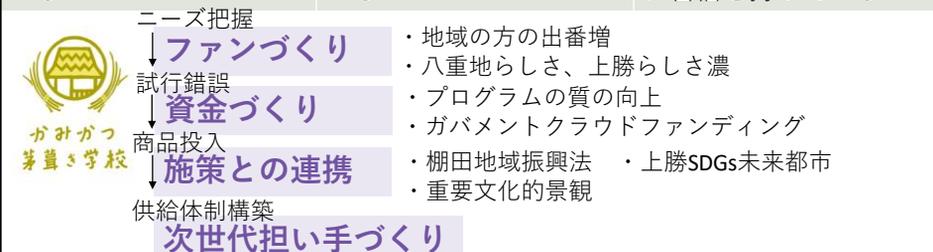


- ・茅葺き民家の維持
- ・棚田・集落の維持



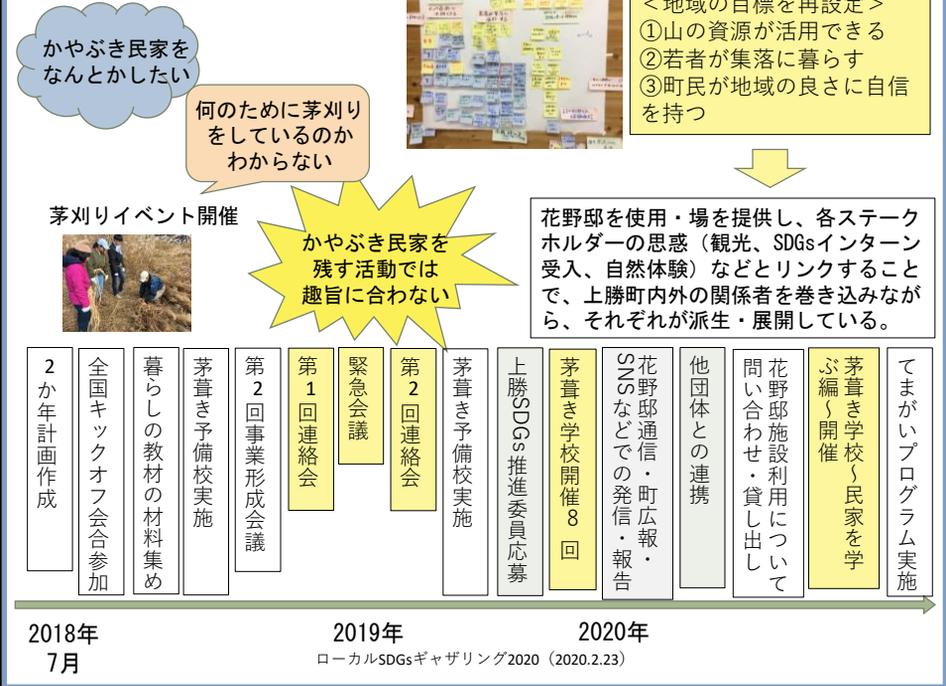
3年後目標

- ①山の資源が活用できている
- ②若者が集落到に居住している
- ③地元の人が地域の良さに自信を持っている



投資会社・日本テクノロジーベンチャーパートナーズ/村口CEO (徳島新聞)
ローカルSDGsギャザリング2020 (2020.2.23)

⑥同時解決のプロセスの特徴 (EPO記入欄)



⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

1. フォアキャスティングではとどり着けない未来を描くために、「2030年に上勝町がこんな場所であってほしい」からバックキャスティング
2. 上勝町（SDGs未来都市）が設置する「上勝町SDGs推進委員会」との比較
 - ・委員募集の段階で採択団体に情報提供
 - ・推進委員として会に出席することで、採択団体は団体としての立場を離れ、上勝町の置かれている状況を俯瞰、上勝町の将来を考える機会になっている
 - ・推進委員を務める町内に住む同年代の人との意見交換や、講師を務める枝廣淳子氏からの情報提供などから新たな情報や知識を得ている。
 - ・SDGs推進委員会で議論している上勝町のビジョンとリンクして、取組の位置づけや意味の捉え直しが期待できる。

<具体的なSDGsとの関連>

「8：働きがいも経済成長も」

-8-9：雇用創出、地域の文化振興、産品販促につながる持続可能な観光

「11：住み続けられるまちづくりを」

-11a：経済・社会・環境における都市部、農村の良好なつながり

「12：つくる責任 つかう責任」

-12-8：持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つ

＋上勝町内の他の取組とパッケージ化して、町全体の動きと連動して発信するなど今後展開が期待できる

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

対話・問い、関係性の構築

- ・会議やイベントに参加、状況把握、関係者との関係構築
- ・取組と目指すべき目標の方向性を確認、適宜問いを立てる
- ・町内外の団体や事例の紹介
- ・SNSでの発信や広報など、伝え方をインプット（意味づけ）

14の支援手法



(ヒューマンピクトグラム2.0 <http://pictogram2.com/>)

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

協働による 「かみかつ茅葺き学校」 の展開

特定非営利活動法人 郷の元気

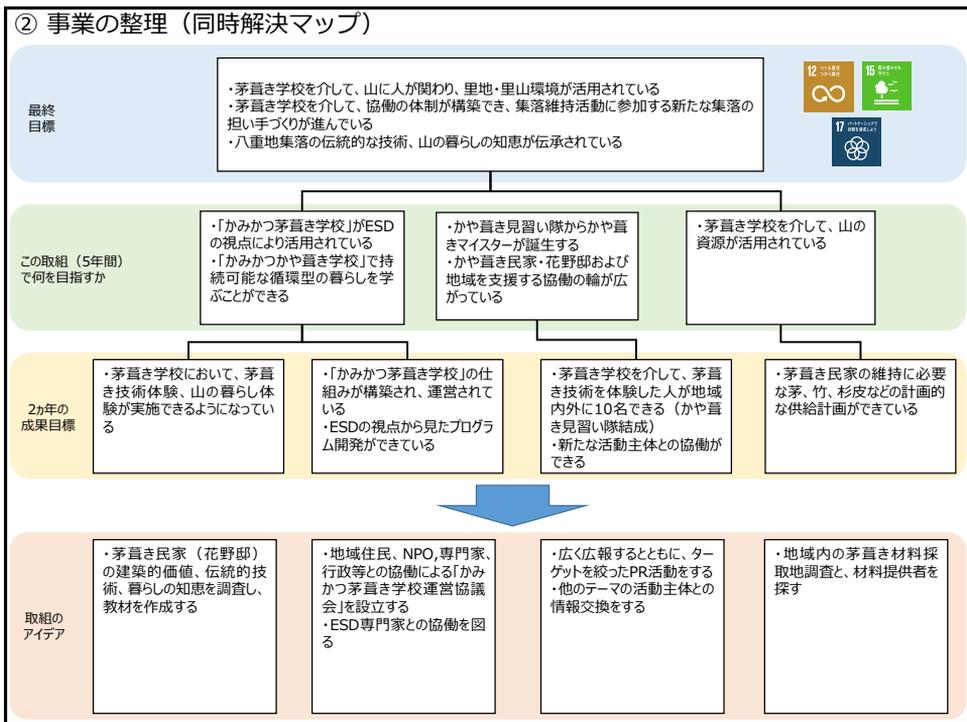
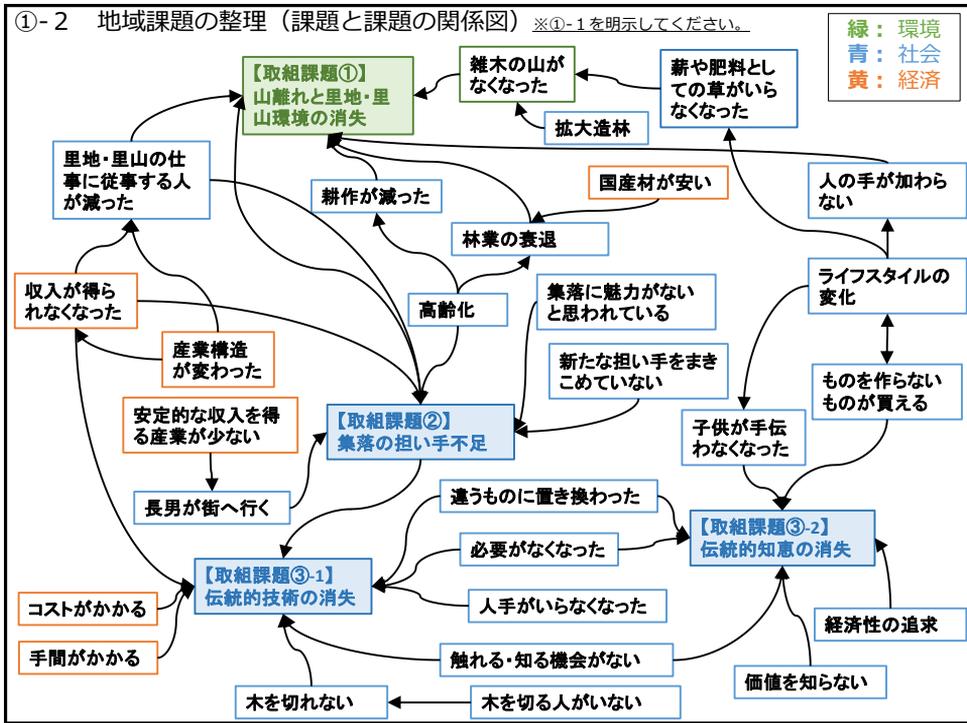
①- 1 地域課題の整理

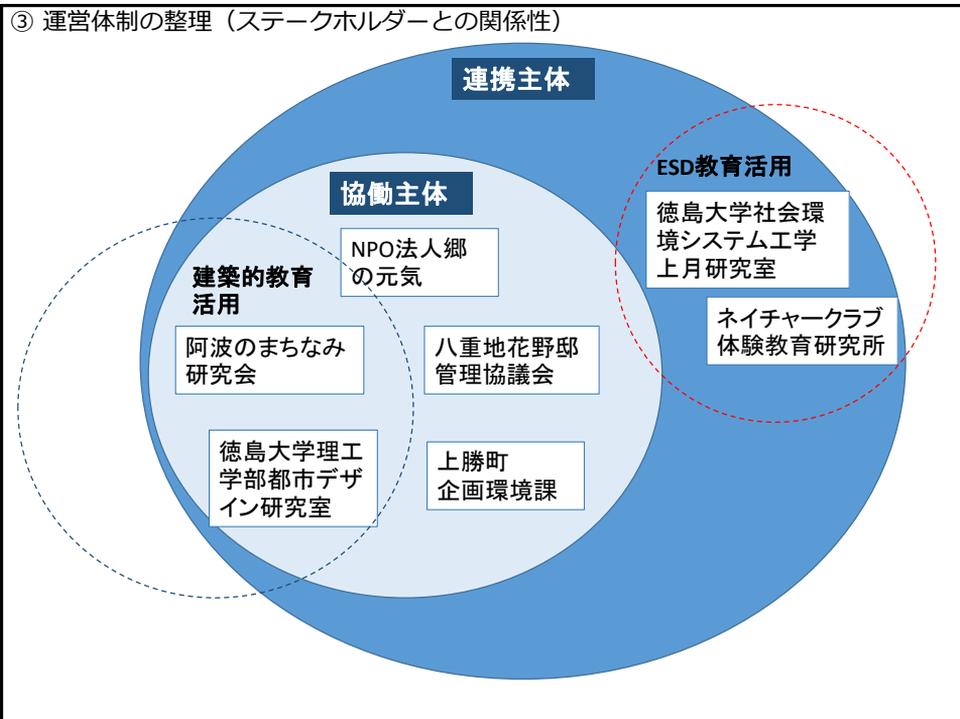
■ 地域の状況や課題背景

- ・【里地・里山環境の消失】八重地地区は、高丸山山頂付近のブナ自然林をその水源涵養機能のために、集落が守り、維持してきた。集落には棚田が広がり、高丸山からの水が集落を潤している。高丸山周辺で炭を焼き、勝浦町まで歩いた道があったという。しかし、奥山ならではの炭焼きの業、棚田での耕作では収入を得られない時代になり、次第に仕事としての山への関わりが激減してしまった。人の手が加わることにより維持されてきた里地・里山の自然環境が消失しつつある。
- ・【集落の担い手が不足】八重地地区は上勝町の最奥の集落で、人口46人、高齢化率78%と、人口減少・高齢化が顕在し、集落の維持が困難になりつつある。上勝町内での仕事がないため、後継ぎが町外へ出てしまうことが多い。新たな集落の担い手づくりは集落、行政や外部支援者を含む協働の体制が必要不可欠である。茅葺き民家（花野邸）を集落活性化の拠点として、その有効な活用が住民から期待されているが、未達成となっている。
- ・【伝統的技術・伝統的暮らしの知恵の消失】八重地地区には、地域ならではの業を通じた伝統的技術、自然との折り合いをつけてきた山の暮らしと知恵がある。しかし、何でもお金で買える、労力や工夫が要らない都市的な生活が山でもできるようになり、伝統的な技術や知恵が必要なくなってしまった。伝統的技術や知恵は日常的に必要ではなくなったことから、徐々に知る人、知る機会が減っている。その価値を再認識し、伝承を意識した伝える場、知る場をつくる必要がある。

■ 何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ①山離れと里地・里山環境の消失
- ②集落の担い手が不足している
- ③伝統的な技術や知恵の消失





④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・山離れと里地・里山環境の消失	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民へのヒアリングを行い、かや葺き屋根に必要な山の材料の種類、量などを明確にする。 ・地域住民へのヒアリングを行い、かつての山の暮らしで利用していた、山の資源の種類、利用の目的等を明らかにする。
【取組課題②】 ・集落の担い手が不足している	<ul style="list-style-type: none"> ・「かや葺き学校」の前段階として、実体験からの学びを得ることを目的とする「かみかつかや葺き予備校」を開催する。 ・他のテーマの活動主体との情報交換をする。 ・建築関連の専門家、学校等との情報交換をする。
【取組課題③】 ・伝統的な技術や知恵の消失	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民への、かや葺きの建築、屋根の維持管理に関するヒアリングを行い、かや葺き技術についての情報をまとめる。 ・地域住民への、かや葺きの暮らしに関するヒアリングを行い、生活文化や手仕事についての情報をまとめる。

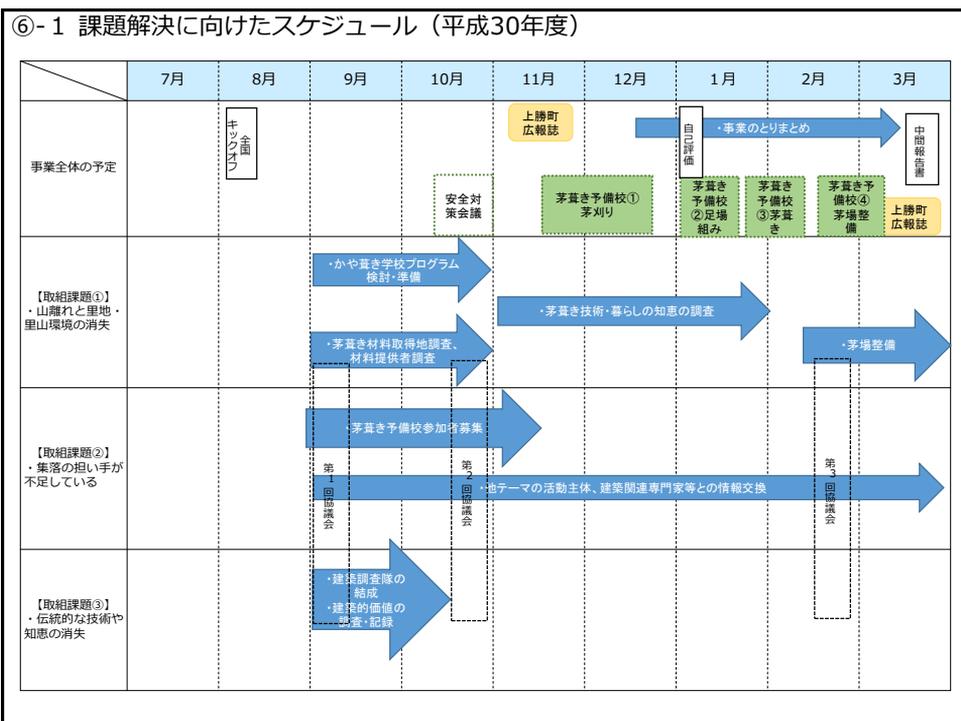
⑤ 本事業計画の見通し

■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

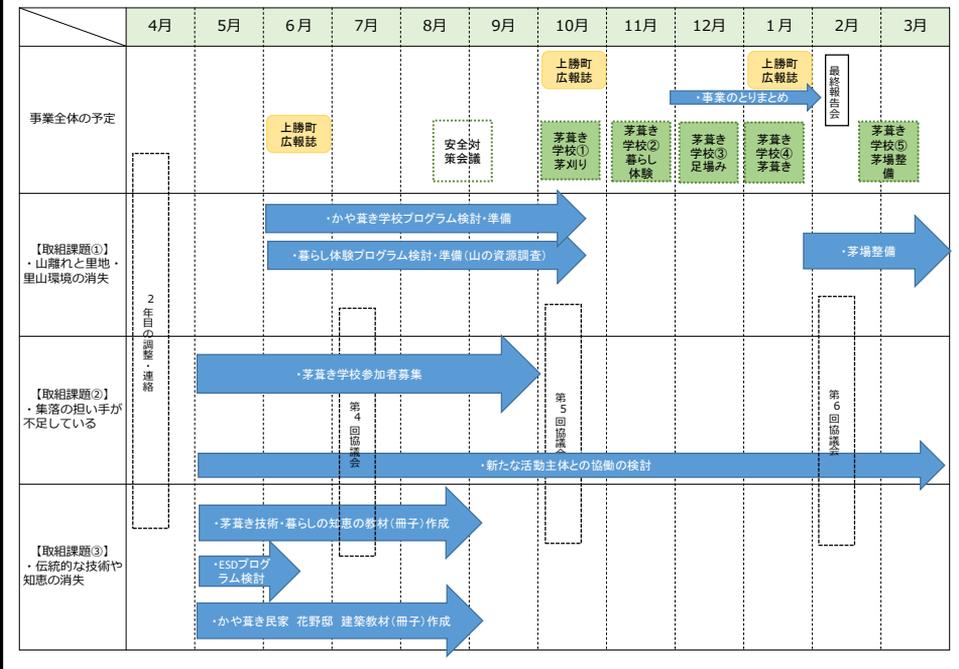
項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・山離れと里地・里山環境の消失	<ul style="list-style-type: none"> ・かや葺き民家で利用する「茅場」の整備が進んでいる。 ・かや葺き民家で利用する竹、スギ皮などの提供者を見つけ、交渉が完了している。 ・「かみかつかや葺き学校」を介して、山の資源が利用されている。
【取組課題②】 ・集落の担い手が不足している	<ul style="list-style-type: none"> ・「かみかつかや葺き学校」を介して、新たなかや葺き体験者（茅葺き見習い隊：茅葺きボランティアを含む）が地域内外に10名以上できる。 ・「かみかつかや葺き学校」を介して、新たな活動主体との協働が創出されている。
【取組課題③】 ・伝統的な技術や知恵の消失	<ul style="list-style-type: none"> ・かや葺きに関する地域の伝統的技術、かや葺き屋敷の暮らしの知恵や手仕事の情報をまとめ、ESDの視点による教材ができていく。 ・「かみかつかや葺き学校」でESDの視点による体験活動が実施できている。 ・かや葺きの暮らしの価値を現代的意味付けができていく。

■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<p>(取り組み課題①：里地・里山環境の消失)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かみかつかや葺き学校」を介して、山の茅場が整備され、利用できるようになる。 ・「かみかつかや葺き学校」における暮らし体験に必要な山の資源を増やす活動が推進される。 <p>(取り組み課題②：集落の担い手が不足している)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かみかつかや葺き学校」を介して、「かや葺きマイスター」を育成する ・「かみかつかや葺き学校」を介して、新たな人と人のつながりが構築でき、協働の輪が広がる。 <p>(取り組み課題③：伝統的な技術や知恵の消失)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かみかつかや葺き学校」の教材および体験の質を向上し、利用者増を図るとともに、かや葺き学校の自立的運営を目指し利用料金を設定する。 ・「かみかつかや葺き学校」において、薪の利用や小水力発電等の循環型の暮らしの設備を整え、循環型ライフスタイルが発信できるようになる。



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）



⑦ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・かや葺きボランティアおよび、かや葺き学校の参加者を獲得するために、ターゲットを明確にすること、魅力的なプログラム作成を行う。
- ・「かや葺き」の社会的価値を発信できるよう、現代的価値の再確認および掘り起こし、強化を行う。
- ・地域住民の取組み課題に係わる理解や意識の醸成に時間を要することがリスクとして予想される。関係者と地域住民とのコミュニケーションの強化と、地域住民が参加できる場づくりを行う。
- ・本事業の上勝町内における位置づけを行うため、重要里地里山（八重地）およびSDGs 未来都市との連携ができるよう取り組む。

■その他、留意事項などがあればお書きください

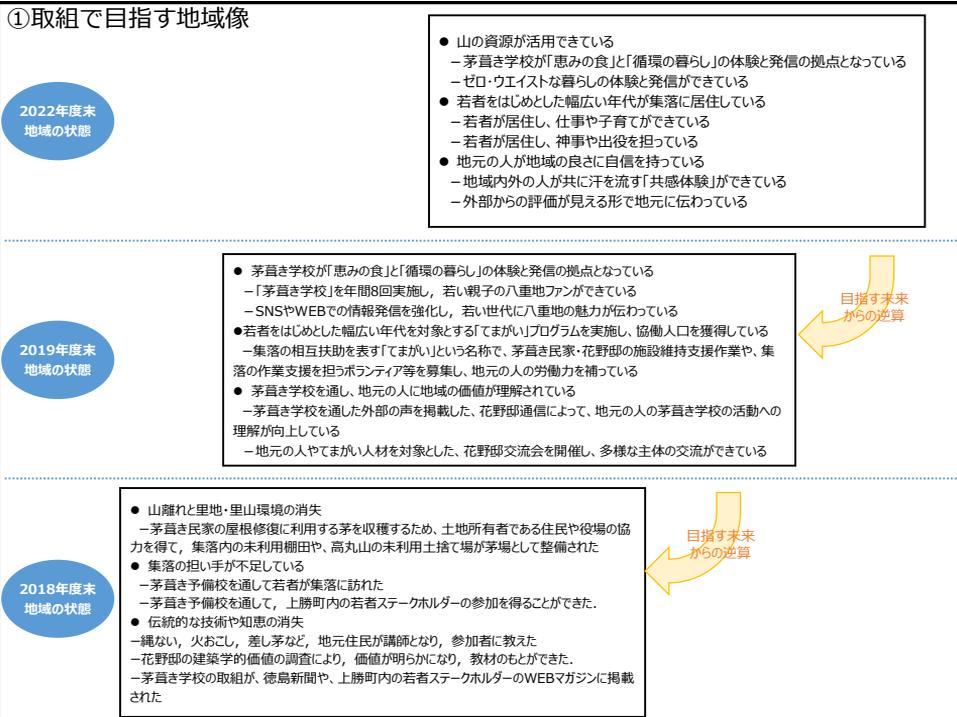
.

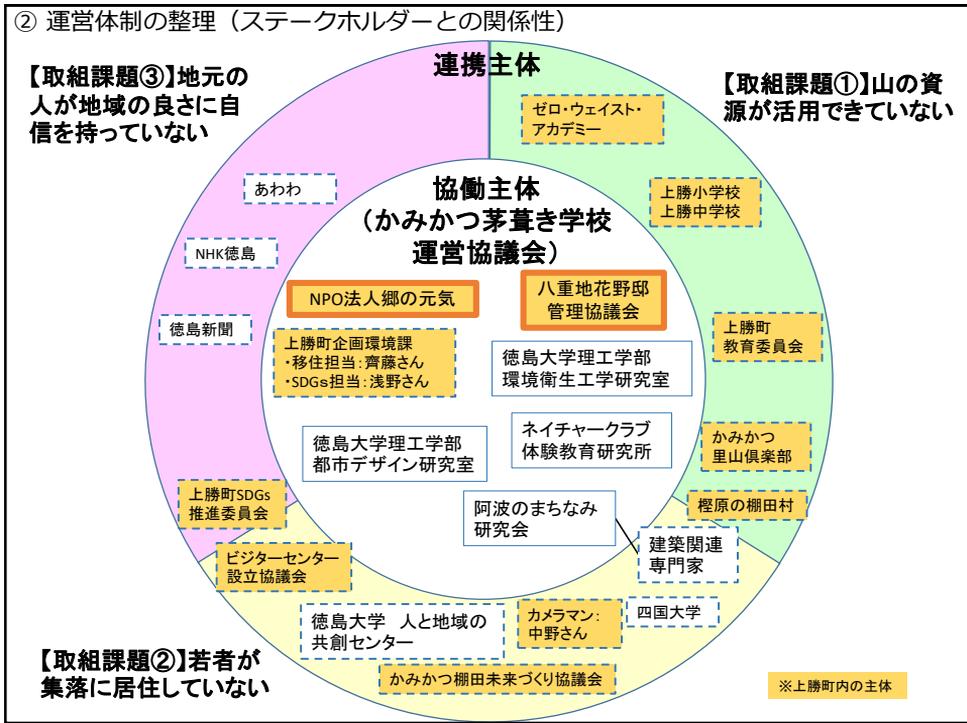
環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

協働による 「かみかつ茅葺き学校」 の展開

特定非営利活動法人 郷の元気

2019.5.9





③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】</p> <p>・山の資源が活用できていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・若い親子をターゲットとして「茅葺き学校」を年間8回開催し、若い親子のリピーターを獲得する。 ・「茅葺き学校」の実践をとおして、体験のプログラム内容や安全面の質を向上し、ふさわしい利用料金を徴収できるようにする。 ・「茅葺き学校」において、ゼロ・ウェイトな暮らし体験ができるようになっていく。 ・徳島大学環境衛生工学研究室やネイチャークラブ体験教育研究所と連携し、授業単元をサポートする学校教育プログラムを検討し、教育委員会を通して小中学校へ情報提供ができていく。 ・阿波のまちなみ研究会と連携し、花野邸の建築学的価値を学ぶプログラムを実施し、茅葺き民家の価値発信を行う。 ・かみかつ里山倶楽部環境教育部会と連携し、茅葺き学校のプログラムを実施し、利用者層を広げる。 ・花野邸facebook、上勝町全体の情報発信サイト「まるかみ」での発信を強化し、上勝町内における花野邸および茅葺き学校の認知度を向上させる。
<p>【取組課題②】</p> <p>・若者が集落に居住していない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集落の作業支援活動や、花野邸の施設整備活動などを行う、「てまがいプログラム」を実施し、若者をはじめとした幅広い年代が参加している。 ・集落の作業支援活動としての「てまがいプログラム」は、農作業支援、祭りの支援など、八重地集落からの要望に合わせて行う。 ・花野邸の施設整備活動としての「てまがいプログラム」は、茅刈り等の茅葺きに関する作業の他に、暮らし体験を実施するための薪割りやコンポストづくりなど、必要に応じて行う。 ・てまがいプログラムのリピーターが地域住民と交流ができていく。 ・てまがいプログラムにおいて徳島大学人と地域の共創センターや都市デザイン研究室と連携し、学生等の参加を得る。 ・てまがいプログラムを通して、菅原の棚田村と交流ができ、活動が波及している。 ・棚田未来づくり協議会（棚田4地区を核とした集落居住を目的とする協議会）と連携した活動を行い、双方が活性化される。 ・花野邸において居住体験できるよう施設整備を進め、上勝町移住担当者と連携し、上勝町役場からの情報発信ができていく。
<p>【取組課題③】</p> <p>・地元の人が地域の良さに自信を持っていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・花野邸通信を集落および町内全域に配布することにより、茅葺き学校の活動と、茅葺き学校を通じた外部の声が、地元の人に伝わっている。 ・地元の人と茅葺き学校関係者、てまがい人材等との花野邸交流会を開催し、茅葺き学校を通じた人と人の信頼関係が構築されている。 ・茅葺き学校の活動がマスコミ等からの外部評価を得ている。 ・プロカメラマンによる茅葺き学校の活動や八重地集落の写真をアルバムにし、地域住民に見ていただき、写真を通して改めて地域の良さに気づいてもらう。

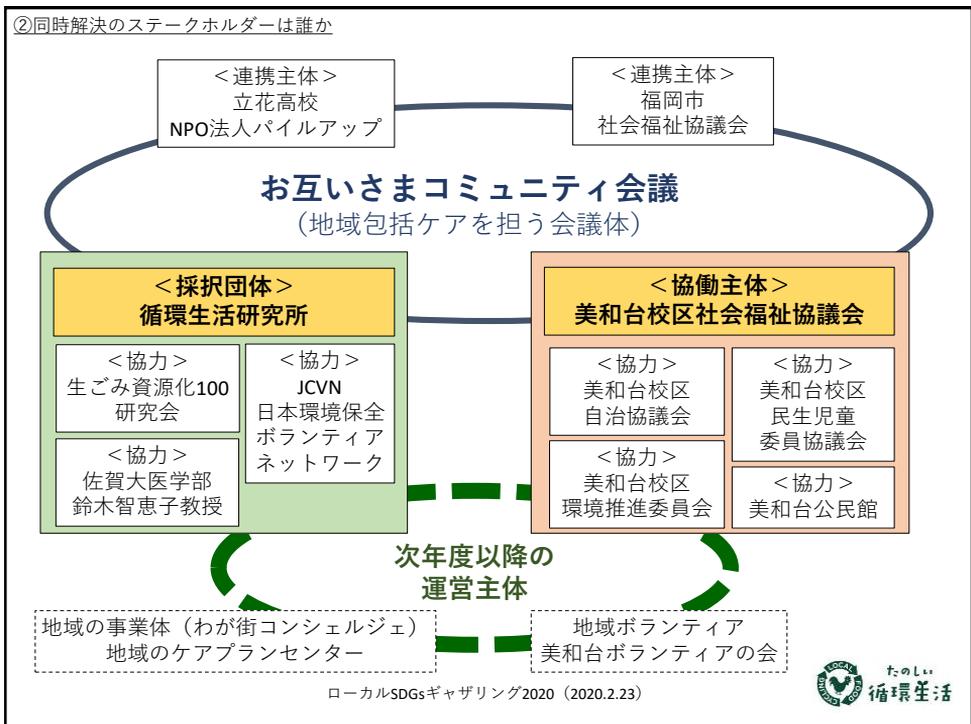
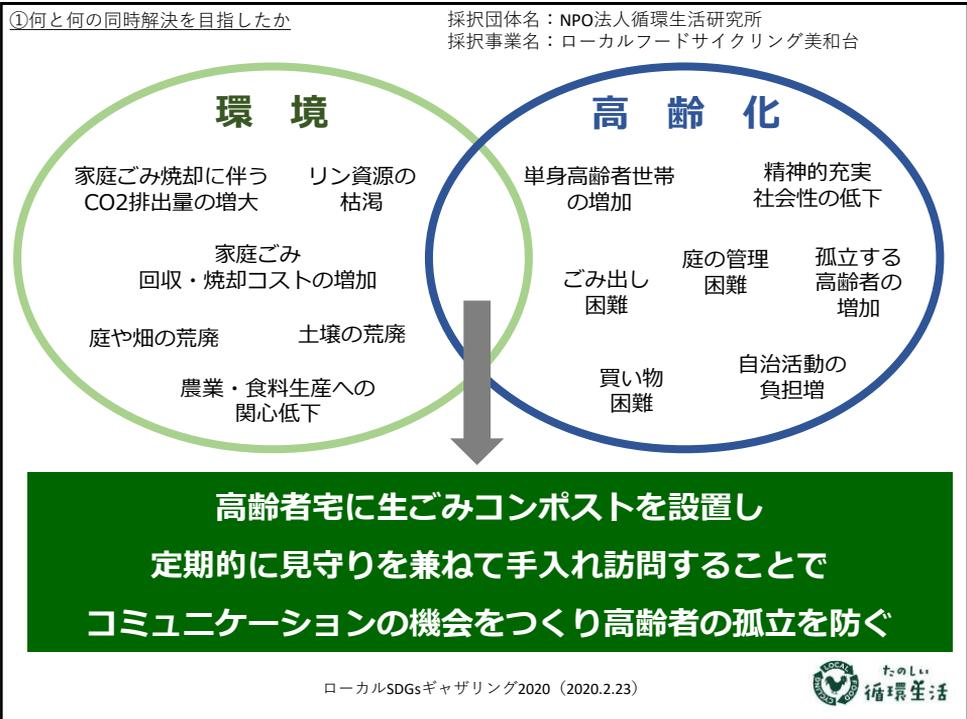
④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業全体の予定			協議会		連絡会		協議会		連絡会	協議会	全国報告会	
【取組課題①】 ・山の資源が活用できていない		5/12① 田植えと 里のめ ぐみこは ん	6/8②書 のこども 遊びど べ釣り体 験		8/3③流 しそめ んと里山 あそび		9/28④ 稲刈りと 里のめ ぐみこは ん	10/26⑤ 郷の香 り・ゆず しほりと かきまぜ	11/30⑥ 高丸山で 茅場体験 と里のめ ぐみこは ん	12/21⑦ 餅つきと しめ縄づ り	1/18⑧ 山のめ ぐるみで つくるほ うきとた わし	
【取組課題②】 ・若者が集落に居 住していない			●茅葺き学校・実踐活動(暮らしの知恵、技術の伝承)									
			●茅葺き学校・冊子作成(暮らしの知恵、技術の伝承)									
【取組課題③】 ・地元の人が地域 の良さに自信を持 ていない			花野 邸通 信		花野 邸通 信		花野 邸通 信	花野 邸通 信	花野 邸通 信		花野 邸通 信	
				花野 交流 会			花野 交流 会					
			花野邸周辺整備									
				草刈り		稲刈り	ゆず採り		茅刈り			

⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点（項目）	変更した理由
・令和元年度の到達目標の変更 （取組課題①について）	・本事業では、「山離れと里地・里山環境の消失」を取組課題としていたが、地域課題の同時解決に結びつかないことに気付き、改めて将来像についてWSで検討し、「今まで上勝の人がしてきたような、山に生かされる暮らし、山を守る暮らしを次世代につないでいきたい」との意見により、「山の資源活用」を目標とした。今年度、目標に向かう取組を検討する中で、「山の資源」の対象を明確にしたほうがよいとの意見があり、「山の資源」の対象をWSで抽出し、その中から、茅葺き学校で実現する目標として「山菜やジビエ等の「恵みの食」と山の資源を材料に知恵と手間で作る「循環の暮らし」の体験と発信にすることが決定した。
・令和元年度の到達目標の変更 （取組課題②について）	・本事業では、「集落の担い手が不足している」を取組課題としていたが、将来像のWS検討における「若い人が集落に入り、仕事で収入を得て、子育てができる」との意見により、目標を「若者が集落に居住する」とした。 ・「若者が集落に居住する」に向け、まずは、集落のいろいろな活動に参加し、地域住民との信頼関係を構築できる協働人口を獲得することを令和元年の目標とした。
・令和元年度の到達目標の変更 （取組課題③について）	・本事業では、「伝統的な技術や知恵の消失」を取組課題としていたが、WSにおける「地域住民が価値に気付いていない」との意見により、目標を「地域住民が地域の良さに自信を持つ」とした。 ・「地域の良さに自信を持つ」に向け、まずは、地域の価値の理解を向上させることを令和元年の目標とした。
・取組のアイデアの変更	・昨年度は「茅葺き予備校」を開催し、外部からの参加者に対するアプローチを中心に行っていたが、今年度は、集落内部に対し、茅葺き学校を通じた地域の価値の理解向上にも取り組む。 ・地域住民が茅葺き学校を通して、集落外の人材との交流が活性化するよう取り組む。

<p>⑥ その他補足事項</p>
<p>■事業を進める上での課題やリスクとその対策</p> <ul style="list-style-type: none">・集落が高齢化しており、茅葺き学校の取組みへの参加が困難になりつつある。（高齢化率80%）・早急に、集落の知恵や技術を記録し、次世代が担えるよう、人材育成を進める必要がある。
<p>■その他、留意事項などがあればお書きください</p> <p>.</p>



③2年間に行ったアクション

- **取り組みを理解し信頼してもらうための関係性づくり**
→高齢者サロンや自治組織会議での説明会21回、勉強会での発表の機会
自治組織でも福祉のプロでもない人が訪問することへの不安を解消
 - 社会福祉協議会、公民館、民生児童委員等との連携が不可欠
 - 最初は決まった曜日・時間、固定メンバーで訪問する
 - 別の世帯に暮らしている家族の反対にあうことも、、、
 - 地域性を理解することも大切（町ごとに雰囲気が違う）
- **コンポストの設置129軒／見守りコンポストの実施64軒**
→週に1度のコンポスト手入れを兼ねた訪問
- **手入れが行き届かなくなった庭の一部の菜園化と堆肥活用 5軒**
→高齢化、夫の介護等を理由に手入れされなくなった庭の畑を手入れし、定期的に管理。収穫野菜は校区内で販売または配布。
- **普及のための講座（コンポスト、野菜づくり、ハーブの使い方やリースづくりなど季節を楽しむもの）の開催 24回**
- **堆肥で育った野菜の販売／マーケットの開催 17回**

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）



④2年間を通じたアウトプットや学び

- 見守り訪問軒数：64軒（2020年1月20日）**
 - ・設置軒数129軒／うち見守りなしで堆肥化44軒
 - ・65歳以上を含む世帯43軒のうち、**独居9軒、65歳以上のみ26軒。**
- 生ごみ資源化量（～2019年12月末日）：12.67t**
- CO2削減量（～2019年12月末日）：4.43t**

巡回先世帯年齢構成	軒数	割合
65歳未満のみ	19	30%
65歳以上～74歳未満を含む	22	34%
75歳以上を含む	21	33%
グループ、不明	2	3%

理解しスタートすれば、非常に喜ばれる

「ごみ出しの回数が減った」
「あんたが来るとボケんですむわ」
「ちょっとジャムの蓋開けてくれん？」
「主人の入院先までの30分の運転が不安なんよ。どうしたらいいかねえ。」
「リコーダー練習、聞いてやらんね」
「カラオケサークルの仲間に話したら『いいことしよるね！』って言われたとよ」
「庭の甘夏、獲って帰り」
「〇〇さん、退院されたか知ってる？」

福祉・環境ともに課題が大きく複合的でそれぞれの視点だけで考えているだけでは取り組みは先細り解決できないという現状



NPOと地域が「同時解決」の必要性を実感した

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）



⑤3年後の展開とつながりたい人や機能

①見守りコンポスト/コミュニティコンポスト

見守りを兼ねた訪問型（これまでと同様）/地域住民が集まる既存の場をコンポストの回収・交換・堆肥の還元拠点とする拠点型 の2タイプでコンポスト事業を継続。地域に立ち上がる新しい事業体にしゅみを引き継ぐよう整理する。

→地域の福祉を一手に担う「わが街コンシェルジェ事業」との連携・役割分担で、事業者・従事者が対価を得られるしゅみにしていく

→2025年地域包括ケアシステムの始動を目指したモデルづくり

②コミュニティガーデンの運営

地域内の公共花壇や個人所有の未活用菜園で、堆肥をつかった野菜の栽培管理などの指導やサポートを行う。

→公民館前や隣の公園に大型プランターを設置し野菜を育てる案は主事や東区地域支援課へは了承済み。地域住民が関わられるよう、コミュニティ型へ移行する。

→すでに花壇づくりは花づくりに関心があるメンバーで自主的にスタート。落葉堆肥づくりや、堆肥を使って公民館前で花苗育成などを実施中。自宅で作った堆肥を持ち込み花苗を育てている方も。

他、堆肥の販売や町全体の共助のしゅみを確立する。

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）



⑥同時解決のプロセスの特徴（EPO記入欄）

言うは易し、橋を架けるは難し

- 環境×福祉の課題横断的な体制づくりを、丁寧に重ねてきた。
- 地域の様々な機会（見守り活動、サロン、公民館活動）をとらえて、顔の見える関係をミルフィーユのように刷り込むプロセス。
- 社会福祉協議会・自治協議会との3人4脚。
- マルチチーム（コンポストクルー＋民生委員）で取組んだ、マルチイシュー



ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

⑦SDGsをどう意識したか、活用したか（EPO記入）

ローカルSDGs、地域でやって

- 特別なことではなく、それぞれの地域主体が取組んできたことがSDGsに直結していることを循環生活研究所がスポークスマンとして伝える。
- 地域のリーダーの問題意識にSDGsが浸透。

社会福祉協議会長による、美和台校区版SDGsへのトライ。

美和台校区が目指す持続可能な、地域社会実現のための取り組み	
1. 美和台校区における貧困をなくそう	10. 地域に住む人の格差をなくし、心の垣根を取り払おう
2. 美和台校区の食卓を豊かに自ら働きし食育に動めよう	11. 安心して暮らし続けられる住みよい街をつくらう
3. 全ての人に健康と切れ目のない福祉を提供しよう	12. 生産と消費に無駄を省く賢い生活者になろう
4. 習熟の度合いに応じた教育を、じっくり地域で確認し成果を求めよう	13. 地球環境を守り自然と共生する地域をつくらう
5. 性差を受容し人として認め合い、尊重され活躍する地域を作ろう	14. 海洋資源を守るためにゴミの廃棄のあり方を考えよう
6. 暮らしに安全な水の確保と衛生環境を整えよう	15. 生物多様性の確保のために、身近な自然と向き合おう
7. 安心して使える再生可能エネルギーの確保に動めよう	16. 平和と人権を尊重し和を以て暮らしとする地域にしよう
8. 互いが助け合う事業をビジネス化し、地域の再生産を活性化させよう	17. 意志ある人のパートナーシップにより前に進もう
9. 手に技術を持つことで技術革新の基盤を作ろう	18. 美和台校区の循環型地域共生の町づくりプラン

⑧伴走支援の内容、留意したこと（EPO記入）

課題の同時性、全国事業としての同時性

- 地域事業（地域課題の同時解決）であり、全国8つのモデル事業（8タイプの同時進行）である。
- 地域タコつぼ型の支援ではなく、横断的なネットワーク性、ワーキングネット志向。
- 東北・関東ブロックとのノウハウ交流、団体間の認識共有の場づくり。



東北ブロック研修



専門家招聘



SDGsリーフレットの発行

ローカルSDGsギャザリング2020（2020.2.23）

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）を活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈2カ年事業計画〉

ローカルフードサイクリング 美和台

特定非営利活動法人 循環生活研究所

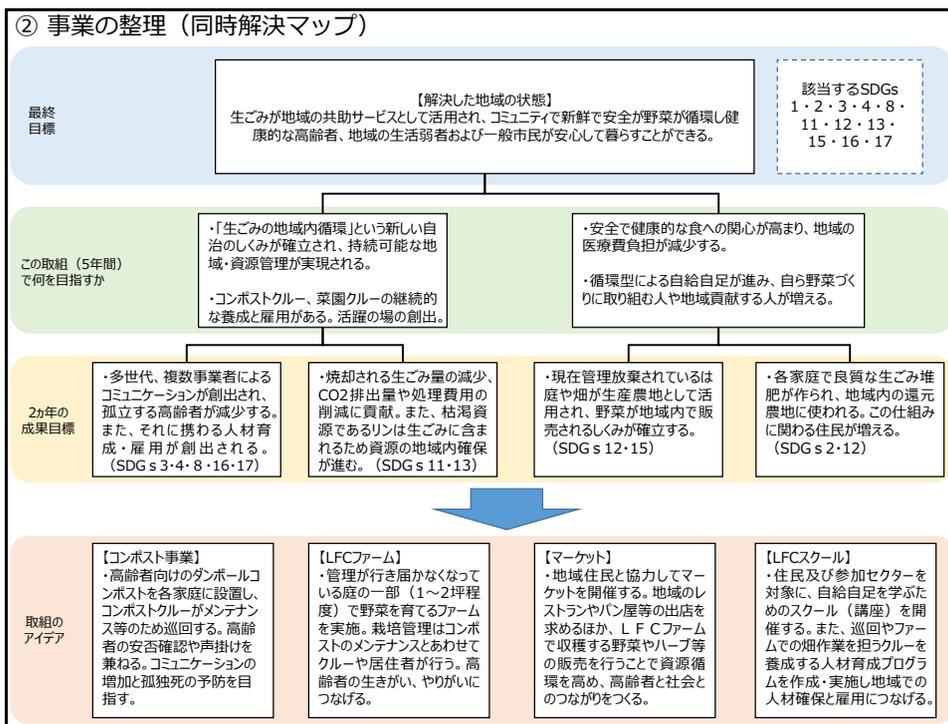
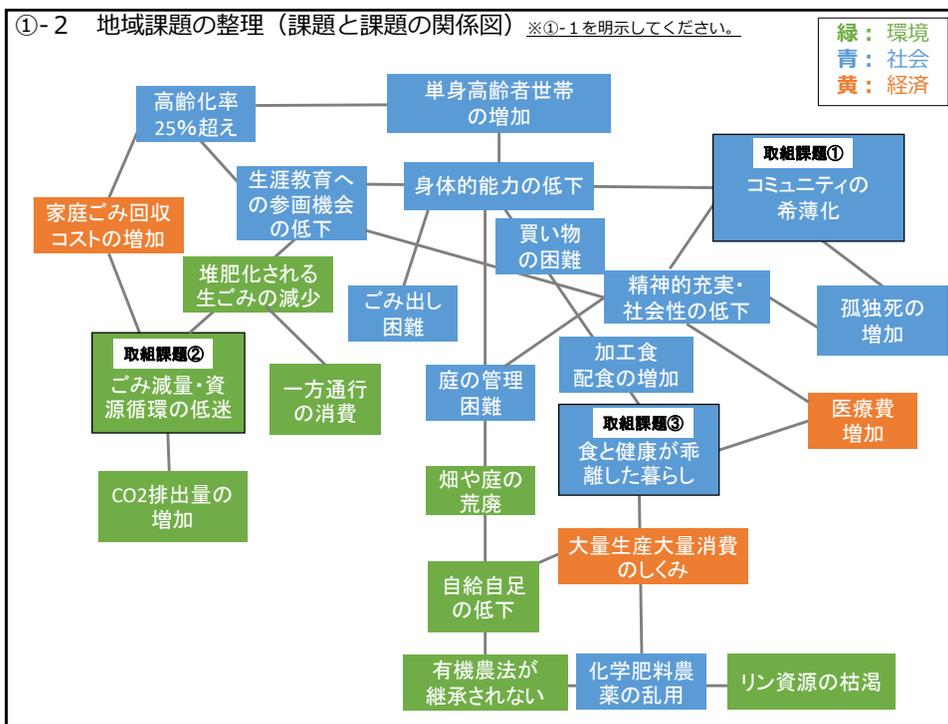
①- 1 地域課題の整理

■地域の状況や課題背景

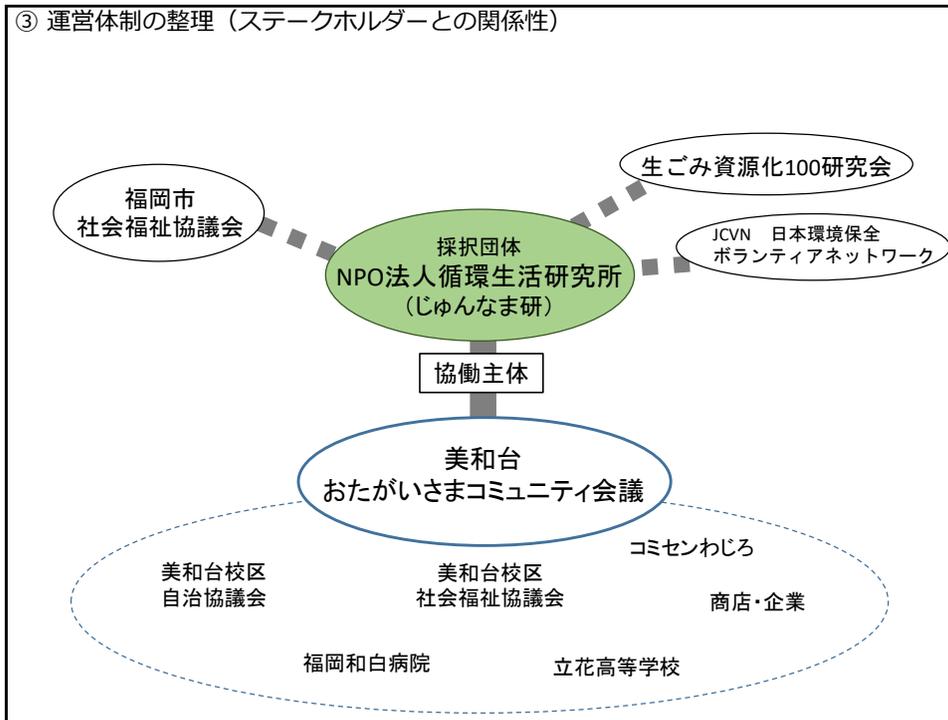
- ・美和台地区は人口6,600世帯、高齢化率が25%を超え、自治活動等の人材不足、地域コミュニティの希薄化が進むと考えられる。孤立する中高年者が増加し、特に単身世帯では孤独死の危険性が高まる。
- ・高齢者世帯の食事は加工品や購入した総菜等が多く、健康維持の視点があまり考慮されていない。
- ・生ごみコンポストはこの地区で20年普及継続してきたが、講座に出かけられる人数が減少。還元農地であった庭の管理も困難となり、現在は焼却場に行く生ごみ量が増加。ゴミ出しが困難な高齢者も多い。（生ごみは90%が水分で、運搬や焼却等において多くのCO2を排出する。）
- ・野菜を生長させる栄養素のうち、特に枯渇資源であるリンを日本は輸入に頼っている。（生ごみにはこれらの栄養素がバランスよく含まれる。）

■何と何の地域課題の解決に取り組むか

- ・高齢化によるコミュニティの希薄化
- ・ごみ減量・資源循環の低迷化
- ・健康と食が乖離した暮らし



③ 運営体制の整理（ステークホルダーとの関係性）



④ 平成30年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・高齢化に伴うコミュニティの希薄化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者向けのダンボールコンポストを100世帯に設置。高齢者の安否確認や声掛けを兼ね、コンポストクルーがメンテナンス等のため週1回程度地域を巡回する。 ・コンポストの設置に当たっては説明会を月に1回開催し、参加者を募る。説明会では、コンポストの使い方や簡単な野菜の育て方などの講座も行う。 ・巡回するクルーを育成するプログラムを作成する。
<p>【取組課題②】 ・ごみ減量・資源循環</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンボールコンポストを設置し、コミュニティ内での堆肥化が進む。1年間で生ごみを18t資源化、CO2を6.3t削減する。 ・5世帯の庭の一部を菜園とし、地域内で作った生ごみ堆肥を使って野菜を育てる。枯渇するリンを輸入に頼らず循環させる農業をコミュニティ内で実践する。
<p>【取組課題③】 ・健康と食がかい離れた暮らし</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・庭で育てた野菜を販売するマーケットを内4回開催し、地域循環でできた野菜の周知がされる。マーケットを拠点とした住民の交流が生まれる。 ・栄養が地域内で循環し、身近な場所で育った野菜を手に入れられることで食への関心が高まる。 ・自ら自宅で野菜作りに取り組む人が増える。

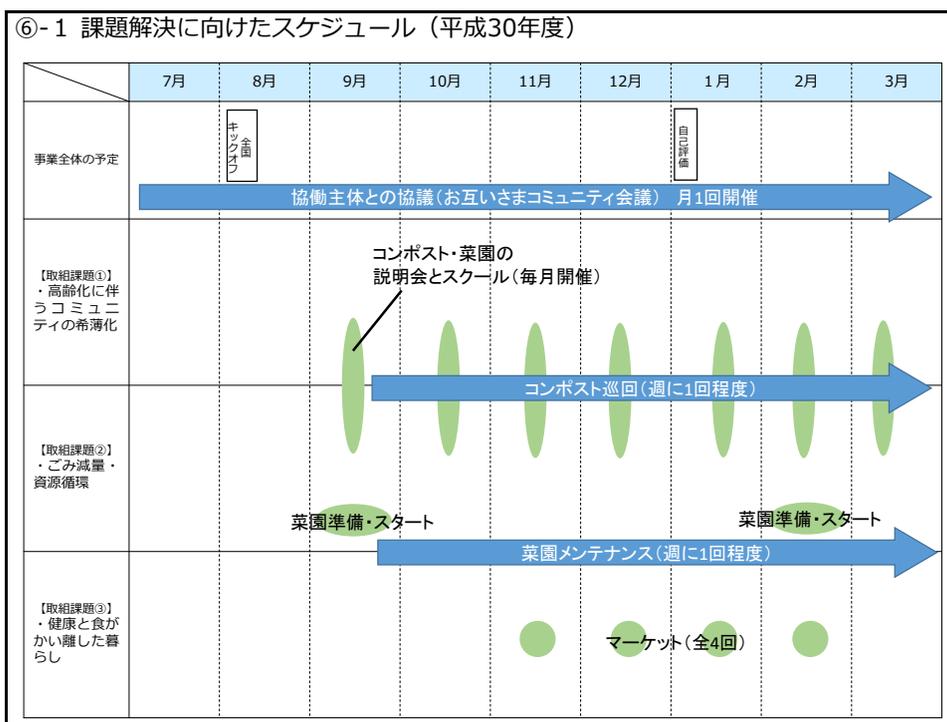
⑤ 本事業計画の見通し

■ 事業期間内（2カ年）の到達目標

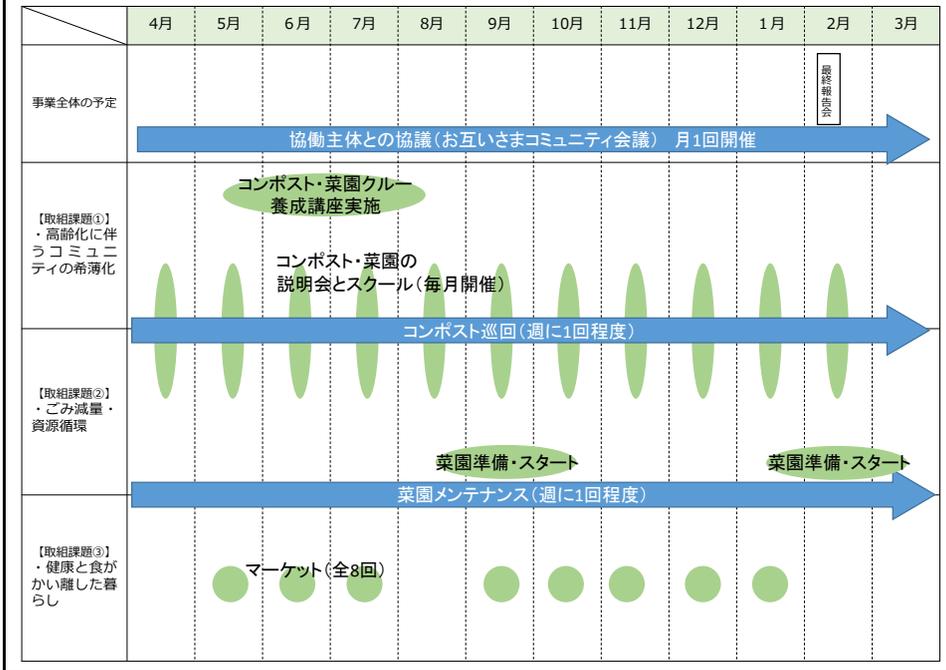
項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
【取組課題①】 ・高齢化に伴うコミュニティの希薄化	・高齢者向けのダンボールコンポストを200世帯に設置。高齢者の安否確認や声掛けを兼ね、コンポストクルーがメンテナンス等のため週1回程度地域を巡回する。 ・コンポストの設置に当たっては説明会を月に1回開催し、参加者を募る。説明会では、コンポストの使い方や簡単な野菜の育て方などの講座も行う。 ・巡回するクルーを育成し、地域内に2名の雇用が生まれる。
【取組課題②】 ・ごみ減量・資源循環	・ダンボールコンポストを設置し、コミュニティ内での堆肥化が進むことで、2年間で生ごみを32t資源化、CO2を11.2t削減する。 ・20世帯の庭の一部を菜園とし、地域内で作った生ごみ堆肥を使って野菜を育てる。枯渇するリンを輸入に頼らず循環させる農業をコミュニティ内で実践する。
【取組課題③】 ・健康と食がかい離れた暮らし	・庭で育てた野菜を販売するマーケットを定期的に行い、循環経済が活性化。マーケットを拠点とした住民の交流が生まれる。 ・自ら野菜作りに取り組む人が増える。

■ 5年後（事業期間終了から3年後）の取組と地域像

取組の状況や地域課題に対してどのような影響を与えているか
<ul style="list-style-type: none"> ・ローカルフードサイクリングシステムにより、安全で健康的な野菜を食べる人が増える。 ・生ごみが地域の共助サービスの資源として大切に取られ、地域内で循環する。 ・地域内にさまざまな健康増進、コミュニティ形成、自給自足のためのサービスや教育プログラムが実施される。 ・コミュニティの活性化が進み、安心して住める地域になる。



⑥-2 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）



⑦ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・人材の確保（クルー）
教育機関との連携や、地域ボランティアの育成
- ・移動手段
- ・評価システム
研究会での検討
医療機関との連携

■その他、留意事項などがあればお書きください

.

環境省 持続可能な開発目標（SDGs）活用した
地域の環境課題と社会課題を同時解決するための民間活動支援事業
〈令和元年度 事業計画〉

ローカルフード サイクリング美和台

NPO法人循環生活研究所

2019.5.7.

①取組で目指す地域像

2022年度末
地域の状態

・「生ごみの地域内循環」という新しい自治のしくみが確立され、持続可能な地域・資源管理が実現される。
・コンポストクーラー、菜園クーラーの継続的な養成と雇用がある。活躍の場の創出。
・コミュニティの主体的な動きにより、住民の病気が予防され、身体的・精神的な健康が促進されている。
・循環型による自給自足が進み、自ら野菜づくりに取り組む人や地域貢献する人が増える。

2019年度末
地域の状態

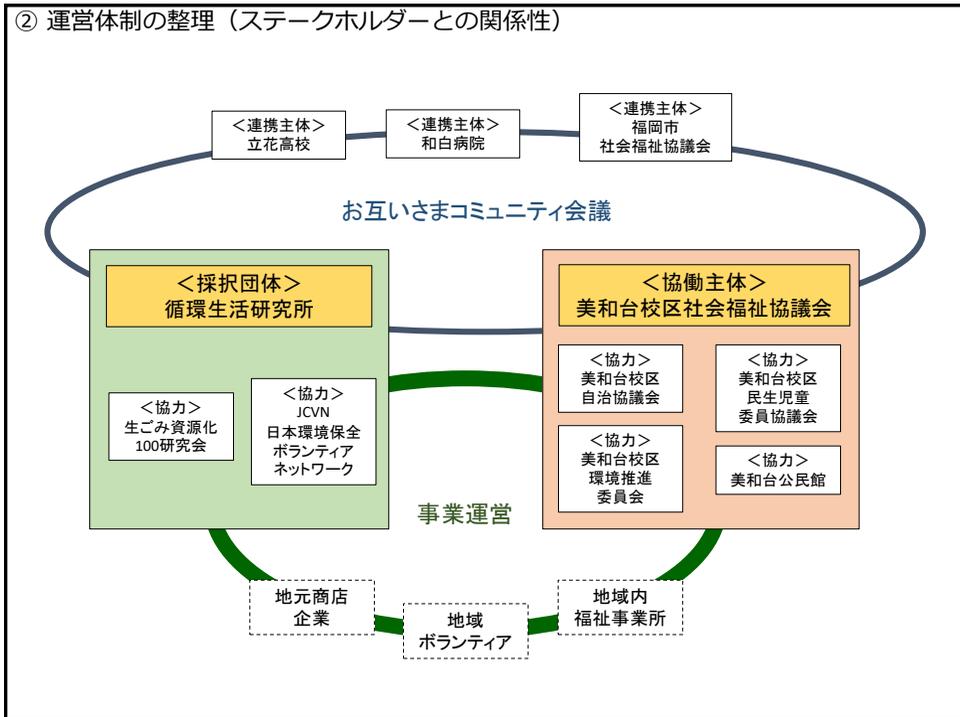
・多世代、複数事業者によるコミュニケーションが創出され、孤立する高齢者が減少する。また、それに携わる人材育成・雇用が創出される。
・焼却される生ごみや落ち葉、雑草量の減少、CO2排出量や処理費用の削減に貢献。また、枯渇資源であるリンは生ごみに含まれるため資源の地域内確保が進む。
・現在管理放棄されているは庭や畑が生産農地として活用され、野菜が地域内で流通するしくみが確立する。
・各家庭で良質な生ごみ堆肥が作られ、地域内の還元農地に使われる。この仕組みに関わる住民が増える。

目指す未来
からの逆算

2018年度末
地域の状態

・コンポストを100世帯に設置。見守りを兼ねたコンポスト手入れ巡回が実施され、会員の異変等は地域の民生委員や公民館等へ情報共有する仕組みができてきた。
・コンポストの設置が進んだことにより、2018年度のみで4トン以上の生ごみ、1.43tのCO2を削減した。
・できた堆肥を活用する菜園を、5か所の庭や放置畑に設置。循環野菜を育成し、地域で販売する取り組みが進んでいる。

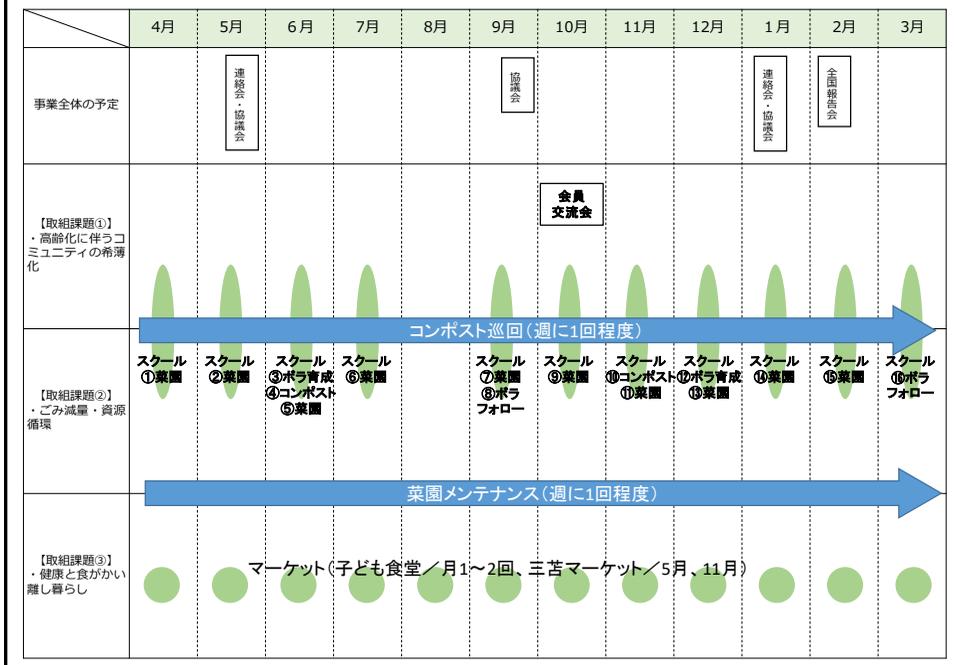
目指す未来
からの逆算



③ 2019年度末までの到達目標

項目	目標 (課題に対してどの程度解決に繋がる取組が進められるか)
<p>【取組課題①】 ・高齢化に伴うコミュニティの希薄化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者向けのダンボールコンポストを130世帯に設置。高齢者の安否確認や声掛けを兼ね、コンポストクルーがメンテナンス等のため週1回程度地域を巡回する。 ・巡回するクルーを育成し、5名の新規クルーが活動に参加する。 ・菜園の一部をコミュニティ化し、地域住民30名が菜園づくりに関わる。地域住民の身体的・精神的な健康を促進する。 ・コンポスト会員を対象としたイベントを開催し、会員によるコミュニティを形成する。 ・会員サービスと会費を検討、できた堆肥の販売等を検討し、今後も事業を円滑に進めるための資金調達の方針を決める。
<p>【取組課題②】 ・ごみ減量・資源循環</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンボールコンポストを設置し、コミュニティ内での堆肥化が進むことで、2年間で生ごみを約22t資源化、CO2を7.7t削減する。 ・5世帯の庭の一部を菜園とし、地域内で作った生ごみ堆肥を使って野菜を育てる。枯渇するリンを輸入に頼らず循環させる農業をコミュニティ内で実践する。 ・木枠コンポストを菜園や公園に試験的に設置し、落ち葉や雑草の堆肥化を進める。落ち葉・雑草を約25㎡回収し、約10㎡の堆肥を作る。
<p>【取組課題③】 ・健康と食がかい離した暮らし</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・庭で育てた野菜を販売するマーケットを定期的で開催し、循環経済が活性化する。マーケットを拠点とした住民の交流が生まれる。 ・コンポスト会員の3割（39軒）が堆肥を自宅で活用し、野菜を育てる。

④ 課題解決に向けたスケジュール（平成31年度）



⑤ 2カ年事業計画（H30.8）からの変更点

計画の変更点(項目)	変更した理由
目標数値 コンポスト設置軒数 2カ年で200軒 ↓ 2カ年で130軒	軒数を増やすことよりも、しきみを見直し、地域の課題を拾い出すことやニーズに応えること、この事業の継続の方法など、課題を解決するための基盤固めに注力するため。
目標数値 新規雇用2名 ↓ 新規クルー5名	現時点では、当事業での予算と会費収入以外の収入はなく、今年度中の雇用は難しい。ボランティアで菜園やコンポストの活動に協力する人を増やすことを今年度の目標とする。
民生委員との連携強化	事業実施前には想定していなかったが、現場で個別の高齢者の事情を良く把握しており、万一にかあった時に連絡する窓口となる。また、コンポストを実践したり、担当の高齢者をご紹介いただけた方も多し。民生委員との役割分担などが地域のニーズとして今後表面化すると思われる。
対象者年齢層の拡大 65歳以下の世帯にも普及する	65歳以上のみへの普及では先細りするので、若い世代へも普及し担い手を増やすべきとの地域の声を反映。
落葉回収・堆肥化のスキーム	地域より、公園の落ち葉(松葉)や雑草を引き取らないかと打診があったり、会員宅で自宅の落ち葉処分に悩んでいるとの声があったことから、落ち葉を回収するしきみのニーズがあると考えている。生ごみコンポストは置かないが、落ち葉を提供したい(=処分に困っている)人は多いと思われるため、これまでのコンポストと同様のしきみでできないか検討したい。 ※福岡市では、自宅から出る落ち葉、剪定枝、雑草などは燃えるごみとして焼却処分している。

⑥ その他補足事項

■事業を進める上での課題やリスクとその対策

- ・高齢者宅へ立ち入ることに不安を感じる人がいる
→最初の訪問は女性スタッフまたは申込時に顔を合わせたスタッフが行う。訪問曜日と大まかな時間を事前に決め、説明する。訪問するスタッフ数は最大2名。視察などの受け入れは一人暮らしの高齢者宅は避け、了解を得たお宅のみに伺う。スタッフによって訪問エリアを決め、原則そのエリアを変動させない。など。
- ・事業費の資金調達と3年目以降の事業継続の姿について考えるべきであるが、2カ年ですべて整理するのは難しいと思われる。
→今後のことをどう決めていくか美和台社協と相談し、コアメンバーの意見をもらいながら進める。

■その他、留意事項などがあればお書きください

.

メモ欄

メモ欄

メモ欄

